せたがや福祉区民学会

実践研究発表会

報　告　集

《日時》　平成２６年５月24日（土）
１２時３０分～１５時３０分

○１２時３０分～キャンパスツアー

○１３時３０分～実践研究発表会

《会場》　日本体育大学

主催：せたがや福祉区民学会
共催：日本体育大学
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
後援：世田谷区
社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会

目　　次

Ⅰ　開会式挨拶
せたがや福祉区民学会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
開催校（日本体育大学）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
世田谷区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

Ⅱ　実践研究発表会プログラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

Ⅲ　実践研究発表会当日の会場風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

Ⅳ　パネル発表及び資料掲示一覧
パネル発表一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第１ブース　人と人とのつながり・福祉文化
１　高齢者と幼児のつながりづくりの試み・・・・・・・・・・・ １３
２　高齢者所有空室ストック有効活用　ホームシェア・・・・・・・ １５
３　配食サービスとコミュニティカフェの取り組みと・・・・・・・・・ １７
地域共同の展開について
４　「世老研」福祉活動３３年の歩み・・・・・・・・・・・・・・・・ １９
５　砧地域ご近所フォーラムのとりくみ・・・・・・・・・・・・・・・ ２１
～医療・介護・福祉・行政そして地域の連携～

第２ブース　障がいの理解
１　在宅重度障害者介助のチームワークと情報共有化の重要性・・・・ ２３
～当事者と介助者が抱える問題点とその打開策～
２　「わいわい隊からはじまるチャレンジ」・・・・・・・・・・・・・ ２５
～行事運営ボランティアの組織づくり～
３　マイナスの現象に自ら振り回されるＡさんの心情の受け止め・・・ ２７
４　世田谷区障害者雇用促進協議会の取り組み・・・・・・・・・・・・ ２９
５　”給料日“は買い物に行こう！・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３１
～工賃の意義への考察～

第３ブース　子どもの発達／人権
１　発達障害のある子どもとの関わり・・・・・・・・・・・・・・・・ ３３
～食事場面を通して～
２　福音寮・性教育の取り組みについて・・・・・・・・・・・・・・・・ ３５

第４ブース　家庭生活支援
１　在宅介護家族の会の有様・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３７

２　母と子とかかわるということ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３９
～自分の子育てを通して～
３　子ども家庭支援の現場から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
～関わることの難しさ　関わることのその力～
４　家庭訪問支援を通じて学んだこと・・・・・・・・・・・・・・・・・　４３

第５ブース　認知症ケア
１　認知症と医療連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４５
２　生活習慣病と認知症予防にむけて『物語（ナラティブケア』が・・　４７
認知症高齢者を支える
３　日常の外出ケアによる認知症症状への効果・・・・・・・・・・・・　４９
４　認知症高齢者の社会貢献を可能にする「彼も誰かの社会資源」・・　５１
５　素晴らしき特技をもう一度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５３

第６ブース　高齢者支援
１　地域包括ケアの推進と特養の役割（考察）・・・・・・・・・・・・　５５
２　転倒リスク=車いす？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５７
～歩くことをあきらめない～
４　カレンダー製作を通して、利用者の主体性を引き出せるような・・　５９
関わり方を考える

第７ブース　人材育成／チームケア
１　歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」の３つの目的達成と・・・・・・６１
効果について
２　胃ろうゼロを考えるⅢ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６３
～多職種で支える経口栄養・私達の「STOP!胃ろう」～
３　介護サービス事業団団体のこれまでの活動と今後の課題・・・・・・６５

第８ブース　スポーツと健康・福祉
１　バイオリズム表を活用した思いやりや対話・・・・・・・・・・・・・６７
２　障がいのある人とない人のスポーツ・レクリエーション交流事業・・６９
～世田谷における実践～
３　ハダカのお付き合いと地域社会・・・・・・・・・・・・・・・・・・７１
～水泳を通して～
４　地域で活動する訪問管理栄養士の活動紹介とその効果・・・・・・・７３
５　もっと自由に外出を楽しむために／・・・・・・・・・・・・・・・・７５
世田谷区福祉移動支援センターの外出相談」から見えるもの

Ⅴ　資料掲示一覧

１－ア　東日本大震災による区内避難者への支援で見えてきた・・・・・７７
現状と課題「世田谷区社会福祉協議会が実施する
「避難者の孤立防止事業」をとおして～」

２－ア　感情表現を促すためのＡＡＣ（補助代替コミュニケーション）・・７９
～脳性まひによる肢体不自由者の事例～
２－イ　立ち直る姿を導く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８１
２－ウ　新しい価値に気づく・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８３
２－エ　身勝手に見えるＡさんの心情理解の視点・・・・・・・・・・・８５

３―ア　世田谷区社会福祉協議会が提案する切れ目のない支援について・８７
～あんしん事業・成年後見事業・任意後見契約～
５－ア　デイサービスに通うことにより生活に意欲が持てるように・・・８９
なった事例
６－ア　利用者の声から始まった新たな試み・・・・・・・・・・・・・・９１
６－イ　地域開放事業の展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９３
～元気な奥沢街づくりClub　For　優～
６－ウ　その介護と医療「明日への架け橋」・・・・・・・・・・・・・・　９５
６－エ　地域の社会資源を活かした介護予防の取り組みについて・・・・９７
６－３　生きる力の支援の取り組み『外出会』編・・・・・・・・・・・・９９
～入所者の「思い」に応える外出会～
７－ア　自己覚知の点から親の思いを考える　・・・・・・・・・・・・１０１

Ⅵ　資料編

実践研究発表会参加者数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０３
日本体育大学校舎配置図・会場見取り図・・・・・・・・・・・・・・・１０４
日本体育大学教育研究棟２階　会場フロアマップ・・・・・・・・・・・１０５
せたがや福祉区民学会役員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０６
団体会員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０７
＜参考＞せたがや福祉区民学会第５回大会発表予定者一覧・・・・・・１１０
広告協賛団体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１５

注　用語については、発表原稿原文のまま掲載しています。

せたがや福祉区民学会実践研究発表会開会挨拶

せたがや福祉区民学会
副会長　永山　誠

せたがや福祉区民学会研究発表会の開催にあたり、一言ごあいさつを申し上げます。

本日は多くの方々の参加を得て開催できることをうれしく思います。思い出しますと本年２月開催予定でした第５回大会が予想外の大雪のため中止となりました。その後、大会実行委員長である日本体育大学の横山先生の特別のご尽力によりこの発表会の開催が可能になり、横山先生にはたいへんご苦労をおかけしました。こころからお礼を申し上げます。

本日の発表パネルを見たのですが、興味をそそるテーマや研究・実践・現実の福祉の実態の報告でいっぱいです。区民学会は、こうした研究発表を６年分も蓄積しています。この研究発表の６年間のリストは文字通りお気づきのことでしょうが、「宝の山」だと思っています。この成果を区民の「生活の質」の向上にどう生かすのかというもっとも重要な課題が残されています。

しかしこれは区民学会の目標ではありますが、区民学会の役割・機能をはるかに超えるものです。したがって区民の「生活の質」の向上にどう生かしていくか、別途、区民の皆様の間で議論が興ることを期待したいと思います。

今、緑が大変美しいです。このみずみずしい自然の息づかいが心地よいですね。この季節に、皆さんのこころを込めた研究発表を学びあう機会ができたことに感謝をしたいと思います。

最後になりますが、大会中止の場合、本日のような研究発表会の開催は今回のみですのでご了解ください。また、本日の研究発表は「大会発表」の扱いにはなりません。報告書は作成する予定ですが、研究業績表記の際、「第５回大会発表」とは表記できないことを念のためお断りしておきます。

以上をもちまして、私のあいさつといたします。



せたがや福祉区民学会実践研究発表会　開催校からの挨拶

実践研究発表会開催校代表　横山　順一

このたびは、「せたがや福祉区民学会実践研究発表会」にお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。

２月１５日に開催を予定しておりました「せたがや福祉区民学会第５回大会」は、大雪のために開催することができず、皆さまにはたいへんご迷惑をおかけいたしました。当日は、チアリーディング部によるオープニングセレモニーなど、本学ならではのおもてなしでお迎えする予定でおりました。自然現象とはいえ、何より大会の中止によって多くの実践発表ができなくなってしまったことが残念でなりませんでした。中止が決定された後、多くの方々から「発表の場を」とのお声が寄せられ、何か大会に替わるものはできないかと学会事務局と検討を重ね、この発表会の開催に至りました。

この発表会は、会場の関係から発表の方法をパネル発表のみとさせていただきましたが、皆さまのご理解とご協力を得て、４０を超える発表を行う準備が整いました。新たな試みではありますが、パネル発表ならではの活発な情報交換や交流により、有意義な発表会となることを願っております。

この場をお借りしまして、発表会の開催にあたりご支援とご協力をいただきました多くの方々に感謝申し上げます。

今後とも、地域の皆さまとこのような交流の機会を持ちながら、世田谷における福祉の向上に努めてまいりたいと存じます。



せたがや福祉区民学会実践研究発表会　世田谷区挨拶

世田谷区副区長
秋山　由美子

皆様、こんにちは。世田谷区副区長の秋山です。

本日は「せたがや福祉区民学会 実践研究発表会」の開催、誠におめでとうございます。保坂区長は、本日所用があり、こちらに出席できないことを大変残念がられておりました。皆様方に、よろしくお願いしますとお伝えくださいとのことでした。

今年２月の記録的な大雪で、２月１５日開催予定だった第５回大会は残念ながら中止となってしまいました。改めて本日の発表会を開催されるにあたり、会場としてご協力いただきました日本体育大学の皆様をはじめ、発表会準備のためにご尽力いただいた「せたがや福祉区民学会」の理事の皆様、運営委員、発表会の実行委員の皆様のご尽力に心より敬意を表させていただきます。

「せたがや福祉区民学会」は、区内の福祉関係の事業所で働く方、福祉を学びあるいは研究・教育に携わる方、福祉行政に携わる方、活発な福祉活動を展開されている区民の方が、一堂に会して日頃の福祉実践活動の工夫や抱える課題、研究成果について発表し合い、学び合うというたいへんユニークな取組みです。

私は、毎年参加させていただいておりますが、発表内容が年々レベルアップしていると感じております。こうした発表を通じてお互いの知見を磨き合い、より質の高い、実践的な活動へとつなげていただいている皆さまの取り組みをとても誇りに思っております。

また、参加されている学生さん同士が、「つながろう」「研鑽しよう」と若い力同士がつながりあう息吹きが芽生えていることを、大変頼もしく思っております。

今回の開催校である日本体育大学や区内の大学の協力を得まして、世田谷の福祉が、さらに充実してゆくものと、大いに期待しております。

今年は、認知症ケア、高齢者支援、子どもの発達、障害の理解など、８つの分野でのパネル発表のほか、資料展示発表も含めると４０を超える研究成果や実践活動の発表が予定されていると伺っています。



特に、今回初めてテーマとして設けられた「スポーツと福祉・健康」は、日本体育大学ならではの企画であり、新しい視点での研究成果の発表を期待しております。

結びに、本日、ご参加の皆さまのさらなる発展とご健勝を祈念いたしまして、挨拶といたします。

せたがや福祉区民学会　実践研究発表会プログラム

＊キャンパスツアー　（１２：３０～１３：１５）

１２：３０　　第１会場出発

＊実践研究発表会　（１３：３０～１５：３０）

１３：３０　開会式　＜第１会場＞

開会挨拶　　せたがや福祉区民学会副会長　永山　誠　氏
開催校挨拶　日本体育大学体育学部准教授　横山　順一　氏
世田谷区副区長挨拶　　世田谷区副区長　秋山　由美子氏

１３：４５　パネル発表・資料掲示　＜第１会場＞＜第２会場＞

１３：４５　パネル発表①
１４：０５　パネル発表②
１４：２５　パネル発表③
１４：４５　パネル発表④
１５：０５　パネル発表⑤

※各会場では、ブースごとにパネル発表①からパネル発表⑤の割振りで発表を行います。

１５：３０　閉会　＜第１会場＞

＜第１会場ブース＞
１　人と人とのつながり・福祉文化
２　障がいの理解
３　子どもの発達／人権
４　家庭生活支援

＜第２会場ブース＞
５　認知症ケア
６　高齢者支援
７　人材育成／チームケア
８　スポーツと福祉・健康

【注】
・各パネル発表は、１０分発表の後、５分質疑応答となります。
・資料の掲示は、パネル発表会場にて行います。自由にご覧ください。
・各発表に対する講評・助言はありません。

＊懇親会　（１６：００～１７：００）
※近隣のお店に席を移して行います。
※懇親会に参加される方は、参加費１千円程度を懇親会会場でお支払いください。

せたがや福祉区民学会実践研究発表会　当日の会場風景



▲キャンパスツアー



▲パネル発表



▲第１会場（１２０１教室）

パネル発表および資料掲示一覧



注　○要旨本文については、平成26年2月時点に作成されたものです。
　　○テーマ及び発表者名は、平成26年5月24日時点のものです。

実践研究発表会　パネル発表一覧

第1会場（1201教室）　16発表

1　人と人とのつながり・福祉文化				
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	中山　美智子 田尻　勝紀 大沼　昌子	ひこばえ広場	高齢者と幼児のつながりづくりの試み	13:45
2	園原　一代	NPO法人ハートウォーミング・ハウス	高齢者所有空室ストック有効活用　ホームシェア	14:05
3	佐野　有未	老人給食協力会ふきのとう	配食サービスとコミュニティカフェの取り組みと地域協同の展開について	14:25
4	森田　睦子 芹田　利夫	世田谷区老人問題研究会	「世老研」 福祉活動33年の歩み	14:45
5	桐原　仁子 安藤　秀彦 橋元　晶子 丸山　節子 山本　恵理	砧地域ご近所フォーラム2014 実行委員会	砧地域ご近所フォーラムのとりくみ ～医療・介護・福祉・行政そして地域の連携～	15:05

2 障がいの理解				
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	伊藤　伸二 阪本　英樹	区内在住定年退職者 区内在住重度障害者	在宅重度障害者介助のチームワークと情報共有化の重要性　～当事者と介助者が抱える問題点とその打開策～	13:45
2	中村　勘太	世田谷福祉作業所	「わいわい隊からはじまるチャレンジ」 ～行事運営ボランティアの組織づくり～	14:05
3	長見　亮太	世田谷区立下馬福祉工房	マイナスの現象に自ら振り回されるAさんの心情の受け止め	14:25
4	浅野　剛史	世田谷区障害福祉担当部障害者地域生活課	世田谷区障害者雇用促進協議会の取り組み	14:45
5	斉藤　由子	上町福祉作業所	"給料日"は買い物に行こう！ ～工賃の意義への考察～	15:05

3 子どもの発達／人権

	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	田淵　かおる	子どもの生活研究所めばえ学園	発達障害のある子どもとの関わり ～食事場面を通して～	13:45
2	菊地　悠介 小野寺　健	福音寮	福音寮・性教育の取り組みについて	14:05
3				
4				
5				

4 家庭生活支援

	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	高山　都規子 渡辺　公恵 斉藤　映子	かたよせ会	在宅介護家族の会の有様	13:45
2	佐藤　小百合	母子生活支援施設かわだ	母と子とかかわるということ ～自分の子育てを通して～	14:05
3	前田　佐知子	母子生活支援施設 パルメゾン上北沢	子ども家庭支援の現場から ～関わることの難しさ　関わることの　その力～	14:25
4	井口　直樹	子どもの生活研究所おおらか学園	家庭訪問支援を通じて学んだこと	14:45
5				

第2会場（1202教室）　16発表

5　認知症ケア				
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	鹿野　幹子 横山　香織	深沢あんしんすこやかセンター	認知症と医療連携	13:45
2	千葉　優雅 大森　和江	優っくり小規模多機能介護喜多見	生活習慣病と認知症予防にむけて 『物語（ナラティブケア）』が認知症高齢者を支える	14:05
3	長谷部　希恵子 高木　英樹	グループホームももちゃん	日常の外出ケアによる認知症症状への効果	14:25
4	相田　有紀 小泉　佳志美	等々力の家居宅介護支援事業所	認知症高齢者の社会貢献を可能にする「彼も誰かの社会資源」	14:45
5	八重樫　亮一	優っくりグループホーム鎌田	素晴らしき特技をもう一度	15:05

6　高齢者支援				
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	木谷　哲三	世田谷区立特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	地域包括ケアの推進と特養の役割（考察）	13:45
2	瀬戸　麻里絵	優っくりグループホーム鎌田	転倒リスク=車いす？～歩くことをあきらめない～	14:05
3				
4	小林クリスト ファー太	世田谷福祉専門学校卒業生	カレンダー製作を通して、利用者の主体性を引き出せるような関わり方を考える	14:45
5				

7　人材育成／チームケア

	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	林　秀幸 鈴木　浩二	等々力の家デイホーム	歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」の3つの目的設定と効果について	13:45
2	鳴海　弘将	社会福祉法人奉優会 等々力の家	胃ろうゼロを考えるⅡ ～多職種で支える経口栄養・私達の「STOP！胃ろう」～	14:05
3	辻本　きく夫	世田谷区介護サービスネットワーク	介護サービス事業者団体のこれまでの活動と今後の課題	14:25
4				
5				

8　スポーツと福祉・健康

	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	中山　進	世田谷区民	バイオリズム表を活用した思いやり対話	13:45
2	大河原　裕迪	日本体育大学体育学部健康学科 福祉支援専攻	障がいのある人とない人のスポーツ・レクリエーション交流事業 ～世田谷における実践～	14:05
3	豊田　キヨ子	あめんぼう	ハダカのおつき合いと地域社会 ～水泳を通して～	14:25
4	村上　奈央子	地域栄養サポート自由が丘	地域で活動する訪問管理栄養士の活動紹介とその効果	14:45
5	鬼塚　正徳 泉谷　一美	NPO法人せたがや移動ケア	もっと自由に外出を楽しむために/世田谷区福祉移動支援センターの「外出相談」から見えるもの	15:05

実践研究発表会　資料掲示一覧

第1会場（1201教室）　掲示数6

1　人と人とのつながり・福祉文化

	展示発表者	所属	テーマ
ア	遠藤　慧 西堀　圭介	世田谷区社会福祉協議会	東日本大震災による区内避難者への支援で見えてきた現状と課題 ～世田谷区社会福祉協議会が実施する「避難者の孤立防止事業」をとおして～

2　障がいの理解

	展示発表者	所属	テーマ
ア	田坂　知樹	サポートステーションさいとう	感情表現を促すためのAAC(補助代替コミュニケーション) ～脳性まひによる肢体不自由者の事例～
イ	甲斐　実	世田谷区立下馬福祉工房	立ち直る姿を導く
ウ	村瀬　精二	社会福祉法人樫の木会	新しい価値に気づく
エ	下國　君子	世田谷区立下馬福祉工房	身勝手に見えるAさんの心情理解の視点

3　子どもの発達／人権

	展示発表者	所属	テーマ
ア	田邉　仁重	世田谷区社会福祉協議会	世田谷区社会福祉協議会が提案する切れ目のない支援について ～あんしん事業・成年後見制度・任意後見契約～

第2会場（1202教室）　掲示数7

5　認知症ケア

	展示発表者	所属	テーマ
ア	瀧村　悦久	デイホーム三宿	デイサービスに通うことにより生活に意欲が持てるようになった事例

6 高齢者支援

	展示発表者	所属	テーマ
ア	谷　義幸	デイ・ホーム松原	利用者の声から始まった新たな試み
イ	関　勝之 中島　和子	デイ・ホーム奥沢	地域開放事業の展開 ～元気な奥沢街づくりClub For　優～
ウ	長島　正明 相内　五十美	優っくりデイサービス喜多見	その介護と医療「明日への架け橋」
エ	渡辺　孝行 内藤　麻里	奥沢あんしんすこやかセンター	地域の社会資源を活かした介護予防の取り組みについて ～介護予防強化推進事業を通した取り組み事例～
3	三友　一仁	世田谷区立特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	生きる力の支援の取り組み『外出会』編 ～入所者の「思い」に応える外出会～

7 人材育成/チームケア

	展示発表者	所属	テーマ
ア	田島　和美	世田谷区立下馬福祉工房	自己覚知の点から親の思いを考える

第３ブース　　子どもの発達／人権

	発表者	所属	テーマ
1	田淵　かおる	子どもの生活研究所めばえ学園	発達障害のある子どもとの関わり ～食事場面を通して～
2	菊地　悠介 小野寺　健	福音寮	福音寮・性教育の取り組みについて

高齢者と幼児のつながりづくりの試み

発表者：ひこばえ広場　中山美智子、田尻勝紀、大沼　昌子

[活動目的]　遊びを通して高齢者と幼児がお互いにもつ力を感じ合い、認め合い、生かしあいながら理解を深め、その力が多世代や地域にもつながっていくことを目指す。
[発表概要]　3年間の実践活動を総括しながら、今後の展望と課題について考察する。
[1年目]　生涯大学福祉文化コース授業の一環として、保育園の役割と幼児への理解を深めるために、隣接する保育園児と遊びを通した交流を行った。ねらいは希薄になっている老・幼世代の交流と文化伝承の機会・きっかけづくりである。
[2 年目]　修了後、「ひこばえ広場」としての自主活動とし、卒業・在学生にも呼びかける。保育園児と一緒の「遊びの広場」とその準備のための「大人の広場」を月1回ずつ開催する。会員相互と保育園とのコミュニケーションのため、毎月［ひこばえ広場たより］を発行した。保育園側の期待が大きいのに励まされた。
[3年目]　世老研（世田谷区老人問題研究会―34 年前老人大学第1回修了生創設）の協力で園児にフラダンスを教えることが縁で「世代間交流ひこばえ世老研」として活動の輪を広げることになった。幼児と高齢者が一緒になにかをやりたい…の思いが双方から出され、5歳児にフラを教え、夏のお楽しみ会には可愛い衣装を着けて園庭で一緒に踊った。秋のいきいき文化祭では世田谷区民会館の大舞台でも一緒に踊り、さらに 12 月には憧れていた 3，4 歳児も一緒に園のホールでフラダンスに親しむおたのしみ会をもつことができた。　この間会員も増えたので年長児中心から、対象を 2～5 歳児の年齢別にそれぞれ決まった人が関わることにした。
「大人の広場」では 60~80 歳代の会員が絵本を読む練習を通して呼吸法を鍛えたり、絵本の選択から昔話の奥深さを知ったり、戦前・戦中・戦後の遊びの違いから時代状況を回想し、今の子どもたちに何を残し伝えていくのかを考えたり、会員同士の経験や技能を出し合い、研鑽を積む生きがいの場にもなってきている。
[考察]　保育園や子どもたちとの信頼関係も増し、期待や希望をもって待っている。大人の広場で話し合い段取りしたことがそのままいかないこともあり、子どもと接する難しさや面白さを知る。人間発達の諸相に接し気づかされることが多く楽しい。
[課題と展望]　「試み」から脱して末永く継続するために何が必要かが課題である。1つは社会的視点から、核家族・共働き家庭の増加、育児・保育環境の重要性を鑑みた時、社会の第一線を退いた高齢者の経験や文化力を、子育ての力として積極的に生かせる方策を公に考えていくこと。2つは高齢者が生きがいや居場所、健康を求めるときに、次代を担う子どもに関わることの意義に気付けるようにすること。3つ目は実践活動では、好奇心や探究心を持ち、仲間と助け合い協力する楽しさを味わえるようにすること。そして子どもと高齢者の安全管理は常に重要課題である。
　これからも増加する高齢者の才智を、困難な状況の増す子育て環境に注ぐことができれば、いろいろな意味で豊かな社会への展望が拓けるはずである。

テーマ：高齢者と幼児のつながりづくりの試み
発表者：ひこばえ広場　中山美智子、田尻勝紀、大沼昌子

＜概要＞
高齢者と幼児が直接触れ合い、遊ぶ。高齢者は感動と生命力をもらい、幼児は、伝承遊びなどをとおして、文化の継承と人間への信頼関係を作ることができる。。保育士も、高齢者の準備する遊びに刺激を受ける。

＜質疑応答＞
Q：保育所との共同企画では、具体的にどのような遊びを行い、どのような様子でしたか。
A：区立保育園との現在の活動では、コマ回しやあやとり、ゴム縄、折り紙、エコ工作（トイレットペーパーの芯で動くおもちゃを作るなど）等を作っています。今後は地域で、認証保育所ともつながっていきたいと思います。





高齢者所有空室ストック有効活用　ホームシェア

発表者：NPO法人ハートウォーミング・ハウス　園原一代

活動の目的：世田谷区が2009年に実施した世田谷区民意識調査によれば、借家に居住する人に比べると持ち家に居住する人の方が定住意向が強く特に一戸建て持ち家の居住意向は81.8%、民営アパートの居住者の居住意向65.3%と大きく差が出ています。ライフステージ別では高齢期の居住者の定住意向は84.4%となっており、住み続けることを望んでいる人が多いことが伺えます。この「住み慣れた家に住み続けたい」という高齢者の希望を実現するために、高齢者が所有する住宅の空き部屋を若い世代に安価な賃料で貸し出し、住宅の維持管理費や他に充てるなどします。加えて、高齢者と若者双方に福祉的効果を促し、所有建物と高齢者の健康生活の長寿化を目指しています。

実践内容：2010年に国土交通省・長期優良住宅先導的モデル事業・独立行政法人福祉医療機構「高齢者世帯所有の部屋ストック有効活用事業」に採択を受けました。そこでは・ホームシェアに対する戸建て住宅オーナー、入居者世代の意識アンケート調査、・居住ヒストリー、住宅ヒストリーを20件、・シェア居住実験4件の調査事業を行いました。さらに、2011年に国土交通省まちの担い手事業より採択を受け、「ホームシェア実践事業」を経て、2011年2月からホームシェア事業を開始しました。現在、シェアオーナーと学生2名のホームシェアが立ち上がっており、2年以上経過しています。

結果：・異世代間のホームシェアによる高齢者支援の可能性・ホームシェアがもたらすインフォーマルな支援の特徴・フォーマルな支援との連携による発展的な可能性・若者支援の可能性・ストック型社会における住宅活用の手法として有効である・シェアハウス等の流通の拡大　をみると、ホームシェア文化が発展していく可能性は高いと考えています。

考察：ホームシェアを知ってもらい実施するためには、空き部屋などの資源を通して、福祉的サポート団体や大学、地域のボランティアなどの様々な主体とネットワークを構築することが必要です。こうした連携は、第一には建築分野の専門性を有するホームシェアを実施するサイドが、福祉分野を含んだ既存の支援ネットワークを必要としている連携といえます。一方で、こうした建築・福祉分野を包含したネットワークができることは、地域福祉にとっても、その在宅支援を行う前提となり、住宅資源を提供し続けるという点で有効なネットワークといえます。高齢者を含む様々な人々が、住み続けやすい地域づくりを行うことに貢献しうる取り組みであると考えています。

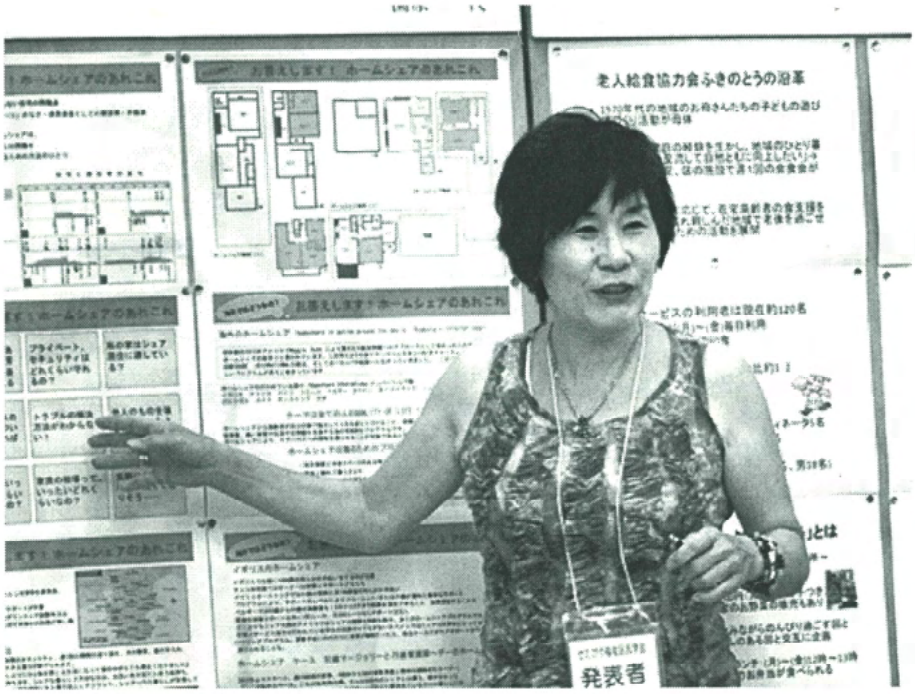
テーマ：高齢者所有空室ストック有効活用　ホームシェア
発表者：NPO 法人ハートウォーミング・ハウス　園原一代

＜概要＞
高齢者が、住み続けたいと思う家に住み続けるため、若者に空室を提供し、収入を得ながらホームシェアする。シェアハウスと異なり、既存の一戸建て住宅の空き室を賃貸することで、オーナーが入居者と住宅をシェアする。海外でも積極的に取り組まれている。

＜質疑応答＞
Q：高齢者であるオーナーが死亡したり、認知症になってしまった場合は？
A：予め入居前に決めておくことができます。

Q：高齢者同士のホームシェアはありますか。
A：あります。その場合はサポートが必要となるため、取り決めが必要です。

Q：高齢者自身のメリットは？相続の問題等もあり、現実的に日本で増えることは可能でしょうか。
A：我が家で過ごすのに、独居よりも人の気配を感じながら生活することを希望する人は多いです。大いに可能だと考えています。



配食サービスとコミュニティカフェの取り組みと地域協同の展開について

発表者：老人給食協力会ふきのとう　佐野有未

【活動の目的】
子ども会のお母さんたちが遊び場存続のための署名集めで地域を訪ね歩く中、多くのお年寄りに出会ったことをきっかけに、１人暮らしのお年寄りや介護の重荷を１人で背負っている女性、子育て中の女性など、地域で孤立しやすい人々を少しでも助ける仕組みの１つとして、１９８３年に手づくりの食事を一緒に食べる会食会を開始。
以来、「地域は一つの家族」をテーマに在宅高齢者の食支援を中心として、住み慣れた地域で老後も暮らし続けていくための環境作りや助け合いの仕組みなど地域のニーズに応じた活動を展開している。

【実践内容】
地域ボランティアの自主的な参加により、主に在宅高齢者を対象とした配食サービス・会食会・ホームヘルプサービス・男性料理教室など、５拠点４支部で活動を実施。
新たに２０１２年１２月より、地域の中でお互いに支え合い関心を持ち合う仕組みとして「コミュニティカフェ♪ふきのとう」を開設。
◆配食サービス：(月)～(金)週５日、昼食と夕食の配食、１日約１００食をお届け
◆コミュニティカフェ：(水)１２時～１５時、誰でも来られる地域サロンとして開放

【結果】
配食サービスでは、地域住民がボランティア参加することで、高齢者の食事情から暮らしに至る様々な問題を身近に感じることができ関心と理解が深まった。利用者には地域住民と繋がるきっかけとなり、見守られる安心感や安否確認を兼ねることで孤立予防になっている。一方コミュニティカフェは、世代を問わず様々な人が気軽に立ち寄れる居場所として開けた窓口となった。その特性を活かしたイベントや交流会を通じて他団体との繋がりが広がり、多世代にも情報発信ができるようになった。

【考察】
今後益々高齢社会が進展していく中、高齢者や介護者を取り巻く多様な問題に取り組むには、地域での柔軟な対応が必要不可欠になる。長年続けてきた住民参加型の配食サービスならではの役割を改めて見つめなおし、またコミュニティカフェを拠点とした地域ネットワークを構築することで、地域力をさらに活性化させていきたい。

【課題】
配食サービスは、飲食業界の参入が盛んになり存続が厳しい状況にある。またボランティアの平均年齢が６８歳と高齢化してきている中、次世代のボランティアが少ない。
コミュニティカフェは利用者が明確でないため安定した運営基盤を図るのが難しい。

テーマ：配食サービスとコミュニティカフェの取り組みと
　　地域協同の展開について
発表者：老人給食協力会ふきのとう　佐野有未

＜質疑応答＞
Q：コミュニティカフェの活動場所はどこですか。
A：上用賀です。

Q：コミュニティカフェと配食サービスは、どのような組織の位置づけですか。
A：コミュニティカフェと配食サービスは任意団体の自主事業として行っています。

Q：ボランティアは無給ですか。
A：１日の参加に対しては、４００円の謝礼が出ますが、昼食のお弁当代として４００円いただきますので、実質ゼロです。

Q：有給のボランティアはいませんか。ボランティアは集まっていますか。
A：いません。調理は集まりやすく、配達が少ない状況ですが、皆さん参加自体を楽しんでくださっています。



「世老研」福祉活動３３年の歩み

発表者：世田谷区老人問題研究会　森田睦子、芹田利夫

１.世田谷区老人問題研究会設立。
　昭和５２年１月世田谷区が老人会館を開設と同時に世田谷区老人大学設立する。
　第１期生が修了と同時に福祉コースの同級生が世田谷区老人問題研究会設立。
２.世老研１０年のあゆみ　…　昭和５５年２月～平成２年間の活動の記録。
　１０年間の老人なんでも相談の内容。
　「毎週１回金曜日電話と来所の相談・講演会・ボランティア活動」その他。
３.世老研２０年のあゆみ　…　平成２年～平成１１年間の活動の記録。
　１０年間の老人なんでも相談の内容「電話と来所の相談受付・会員の研修会
　公開講座・税金について北沢税務署・老人福祉の動向と国際比較について
　東洋女子短大講師・老いとどう生きるかについて朝日新聞客員」その他講演あり。
４.世老研３０年のあゆみ　…　平成１２年～平成２２年間の活動の記録。
　１０年間の老人なんでも相談の内容「電話と来所の相談受付☆会員の研修会
　☆講演会・介護問題・高齢者問題・あんしんすこやか業務について」その他
５.現在世田谷区老人問題研究会活動報告。
　★世老研推進部活動内容。
　　世老研主催による講演会・敬老会・せたがや区民祭り等参加…写真にて紹介。
　　旅行と勉強会と寄席は会員の親睦と交流の為…写真にて紹介。
　★世老研研修部活動内容　…毎月第４月曜日ＡＭ１０時～１２時まで
　　講師による勉強会・傾聴とコミュニケーション・聞き上手は話上手・食生活と
　　健康・成年後見制度・電話相談事例の実践的研修会等…写真にて紹介。
　★老人なんでも相談部活動内容…毎週　月・水・金曜日ＰＭ１時～４時迄
　　ひだまり友遊会館１階入り口右の部屋…相談者当番表等写真にて紹介。
　　電話又は来所のお客に対して世老研会員３人体制で応対を写真にて紹介。
　★ハッピー（幸せ）サロン活動内容…毎月第２・第４月曜日ＰＭ１時～３時迄
　　フラダンス・歌の時間・お茶と語らい時間写真にて紹介。
　★サロン世老研活動内容…毎月第２・第４木曜日　ＰＭ１時～３時迄
　　健康体操・折り紙・七宝焼き・語らい時間写真にて紹介。
　★サロンひまわり活動内容…毎月第１月曜日・第３月曜日ＰＭ１時～３時迄
　　マージャンの時間写真にて紹介。
　★世老研出前サロン…世田谷デーホームにボランティアを写真にて紹介。
６.まとめ
　世老研はなんでも相談を始め各サロン活動の充実「介護予防」の為活動します。

テーマ：「世老研」福祉活動３３年の歩み
発表者：世田谷区老人問題研究会　森田睦子、芹田利夫

＜主な質疑応答＞
Q：相談の具体例には、どのようなことがありますか。
A：家族関係、住居関係、健康関係などです。同じ高齢者として相談にのるので、高い専門性が必要となる場合など対応が難しい場合は、関係機関につなげます。

Q：介護に関する相談はありますか。
A：あります。介護経験者としてお話しします。身近なあんしんすこやかセンターにつなげることも多いです。

Q：会員数は、どれくらいですか。
A：現在５０人前後です。



砧地域ご近所フォーラムのとりくみ
～医療・介護・福祉・行政そして地域の連携～

発表者：砧地域ご近所フォーラム 2014 実行委員会
桐原仁子、 安藤秀彦、 橋元晶子、丸山節子、山本恵理

砧地域では、平成２２年から「砧地域ご近所フォーラム」を開催している。このフォーラムを主催する「砧地域ご近所フォーラム実行委員会」は、砧地域の医師・歯科医師・薬剤師・社会福祉協議会・ケアマネジャー・介護サービス事業者・行政・あんしんすこやかセンターで構成されている。住み慣れた砧で安心して暮らし続けるには、職域を超えた連携が必要である。まずは顔の見える関係づくりを行うことがひとつの目標となった。今までに開催したフォーラムは以下の通りである。

日時・参加者数	テーマ	おもな内容
第１回 平成 22 年 9 月 18 日 約 250 名	認知症を地域で支える	・基調講演（長谷川和夫先生） ・寸劇「認知症の方を地域でどう支えるか」 ・参加者による意見交換と懇談 ・地域の取り組み展示
第２回 平成 24 年 2 月 18 日 約 225 名	災害時　高齢者を支える地域を目指して	・基調講演（原昭夫先生） ・区・介護事業所・医療機関などの災害対策 ・参加者による意見交換と懇談 「自助」「共助」そして「ご近助」 ・災害対策関連展示
第３回 平成 25 年 3 月 16 日 約 230 名	災害時にこそ発揮される地域の連携	・砧地域の取り組み発表 町会の医療救護所訓練・町会と病院の協力・自治会と大学生の連携・介護事業所の災害図上訓練 ・参加者による意見交換と懇談 ・災害対策関連展示

今年度は平成 26 年 3 月 29 日（土）に「砧地域ご近所フォーラム 2014　高齢者を優しく見守る地域の“わ”　～顔の見える関係づくり～」を開催する。場所は今までと同じく成城ホールである。砧地域の町会自治会をはじめさまざまな機関が取り組んでいる見守りの発表や展示、恒例となった参加者同士の意見交換などを予定している。

医師会・歯科医師会・薬剤師会と、ケアマネジャーなどの介護事業者・社会福祉協議会・行政・あんしんすこやかセンターが連携し、地域の協力を得て発信する形は、砧地域ならではの特色である。フォーラムの回数を重ねるにつれ、「顔の見える関係」が深まったと実感している。砧地域が安心して暮らし続けることができるまちになるように、いろいろな立場の人々がそれぞれ頑張っているのだということを理解できたのである。

テーマ：砧地域ご近所フォーラムのとりくみ
～医療・介護・福祉・行政そして地域の連携～
発表者：砧地域ご近所フォーラム２０１４実行委員会
桐原仁子、安藤秀彦、橋元晶子、丸山節子、山本恵理

＜質疑応答＞
Q：一番苦労したことは何ですか。
A：お互いの分野の決まりごとの理解です。また、他地域でも盛り上がってほしいです。ライバル視する団体の登場を待っているところです。



第２ブース　　障がいの理解

	発表者	所属	テーマ
1	伊藤　伸二 阪本　英樹	区内在住定年退職者 区内在住重度障害者	在宅重度障害者介助のチームワークと情報共有化の重要性　～当事者と介助者が抱える問題点とその打開策～
2	中村　勘太	世田谷福祉作業所	「わいわい隊からはじまるチャレンジ」 ～行事運営ボランティアの組織づくり～
3	長見　亮太	世田谷区立下馬福祉工房	マイナスの現象に自ら振り回されるAさんの心情の受け止め
4	浅野　剛史	世田谷区障害福祉担当部障害者地域生活課	世田谷区障害者雇用促進協議会の取り組み
5	斉藤　由子	上町福祉作業所	″給料日″は買い物に行こう！ ～工賃の意義への考察～

在宅重度障害者介助のチームワークと情報共有化の重要性
～当事者と介助者が抱える問題点とその打開策～

発表者：伊藤伸二（区内在住定年退職者）／阪本英樹（区内在住重度障害者）

１．現状の問題点

１－１．　阪本のサポート人員構成及び問題点

- 地域の大学からの学生ヘルパー（２名）
- 社会福祉協議会のWebサイトから応募した区民（３名）
- 区から委託された業者サービスの派遣（常時２名　｜　予備３名）
- 医療機関からの訪問→　ホームドクター（１名）、マッサージ師（３名）、PT/OT（２名｜予備１名）

現在、阪本宅に通うサポート人員間のつながりは希薄なものである。そのため、阪本が自ら必要な介助を各人に割り振り、依頼し、調整しなければならず、負担が大きい。また、一対一の閉塞的な関係は、介助を長期的に続ける上で支障ともなりうる。特に、予備要員が全くいないため、いったん介助者が病気など止むを得ない事由（例えば、実習や就職活動）により来られなくなると、代わりを探すことは難しく、介助の空白が生じて、生活の質が低下することになる。

１－２．　２種類の介助の関連性と問題点

A)　生活上必須の介助→　家事／入浴／治療（マッサージや在宅リハ訓練など）

B)　社会的活動で必要な介助→　１．資料・文献の整理／２．学会等で遠方へ出かける際の付き添い／３．外泊時の日常的介助

在宅障害者の自立生活を維持・促進する上で「家事援助」と「社会参加」は共に重要であり、当事者と介助者は二人三脚、一心同体でその実現を目指すのが本来の姿である。しかし、現実的に業者は生活必須の介助しか参入できない。

２．問題解決に向けて

介助者同士、所属・出自の違いを超えて横のつながりをもち、チームとしてのサポート体制を築くことで、現在阪本にかかっている負担を減らしていくことができると考える。そのために、チームメンバー内で情報を共有するための体制づくりが必要である。

- 定例会の開催：まずは顔見知りになること
- メーリングリスト等の活用：チーム内の連絡手段
- カルテの作成：介助の方法等をメンバー全員で共有
- チームリーダーの創出：全体のアドバイザー（＝下記「ベテラン介助者」）

３．区の行政側への要望

- ベテラン介助者による定期的に巡回・指導・助言する制度の創出

介助者・当事者・アドバイザー向けの共有掲示板をネットで創設

テーマ：在宅重度障害者介助のチームワークと情報共有化の重要性
～当事者と介助者が抱える問題点とその打開策～
発表者：区内在住者　伊藤伸二、阪本英樹

＜質疑応答＞
発表の冒頭、「今日予定していた発表テーマ以前の切実な問題として、緊急介護人がこの４月から大幅に減り、３年前の暮れ、この学会で初めて発表した際の「人手不足」に再び直面しています。」との現状説明があった。

Q：緊急介護人になるのに資格は必要ありますか。
A：特に必要ありません。

Q：緊急介護人をやってみて良かったことはありますか。
A：人それぞれ得るものがあるのではと思います。違う視点で物事を見ることができます。たとえば、次のようなコメントがありました。
・授業では学べない経験をしたり、障害者の生の声を聞いたりすることができ、”思いやりの心”の芽生えや”社会人としての心構え”を知るきっかけとなった。
・あらゆる人は何らかの障害をもっており、それは個性に包摂されることに気がつくことができた。

Q：緊急介護人の人手不足や継続性が深刻ならば、福祉業者のサービスを増やせば済むのでは？
A：福祉業者のサービスは障害者総合福祉法によるもので、緊急介護人は世田谷区独自の制度です。利用時間数も行政によって予め決められています。両者の相互乗り入れはできない仕組みとなっています。私の場合、利用時間の上限ギリギリになっているため、現状ではこれ以上増やせません。また、利用時間が残っていてもヘルパーが見つからない場合があります。（現在の問題点）





「わいわい隊からはじまるチャレンジ」
～行事運営ボランティアの組織づくり～

発表者：世田谷福祉作業所　中村勘太

はじめに

毎年11月3日(文化の日)に開催している世田谷福祉作業所主催行事「わいわい祭り(まつり)」は、「障害者理解の浸透と地域交流」「すべての人が分け隔てられることなく、お互いの個性を尊重し合う社会の実現」をコンセプトとしている。平成23年度には、従来の作業所主体の行事運営から地域の人々とともにつくりあげる祭をめざして、わいわい祭実行委員会「わいわい隊」を結成した。

1．わいわい隊の活動

わいわい祭の企画初期段階から作業所関係者にくわえ地域住民や地域団体、学生、ボランティアが参画し、作業所内外でおこなうさまざまな行事準備をともにおこなった。同年度は、計20名がわいわい隊として参加し、5月を初回として以降、定期的に企画連絡会をおこなった。そして、わいわい祭開催後におこなう反省会をもって隊としての活動を終了している。次年度はあらためてメンバーを募り、活動開始する。今年度で結成3年が経過したが、例年、前回から引き続き参加しているメンバーに、新たなメンバーも加わった体制で活動している。

2．わいわい隊による活動の成果

わいわい隊を結成し、多彩な顔ぶれで企画連絡会をおこなったことで職員の打ち合わせでは出なかった、隣接公園や道路を占有して開催エリアを拡大すること、大型の子ども向けアトラクションを出展する団体を招聘するといったアイディアがあがり、実現させることができた。作業所へ通所する利用者にとっても、準備を通じて地域の方々と交流する機会や、開催エリア拡大にともなう諸手続きをわいわい隊員と一緒におこなうことで社会活動への参加機会を増やすことにつながった。平成23年度開催当日は、来場者が前年度比で300人以上増加した(総来場者数では24年度が600人、25年度が800人)。必ずしも来場者数がわいわい祭の成功に直結するわけではないが、来場者からも地域団体の参画や祭の規模の大きさに共感される声があり、わいわい隊の結成や取り組みがわいわい祭で掲げるコンセプトの実践につながったと考える。当作業所としても、福祉系学部・学科所属ではない学生等のボランティア参加があり、微力ながら地域福祉の推進に貢献することができた、とも考えている。

3．今後の課題

規模が大きくなり、参加団体が増えたことによって、当日手伝いとして参加するボランティアも含めて、連携の取り方や進捗・情報共有が大きな課題となっている。

当作業所を含めた都営下馬二丁目団地の建て替えにともない、地域コミュニティが再構築されることが考えられる。わいわい隊は結成間もない組織であり、盤石でない部分もあるが、古くから住む住民にとっても新しく迎えることとなる住民にとっても良い交流の場所である「わいわい祭」となるよう、わいわい隊の活動をますます洗練させていきたい。

テーマ：「わいわい隊からはじまるチャレンジ」
～行事運営ボランティアの組織づくり～
発表者：世田谷福祉作業所　中村勘太

＜質疑応答＞
Q：わいわい隊の将来について。地域でつくるお祭りになっていく過程で、わいわい祭本来の趣旨とは離れたものになっていく可能性があると思います。
A：障害理解の浸透と地域交流という元々の趣旨が含まれるコンセプトになれば良いと考えます。“せたふく”（注：世田谷福祉作業所のこと）として引き続き関わっていく中で、そのことを伝えていきたいです。

Q：“せたふく”の利用者さんの役割とは。
A：わいわい隊の一員です。もてなす側のスタッフとして働く経験を積むことにつながります。

Q：お祭りを通じて、“せたふく”のあり方は変わってきましたか。
A：地域に住む多くの方々と関わることで、今までよりも開かれた施設になってきたと考えます。今後も…“せたふく”が取り組んでいる事業や製品を発信していくことで、地域の皆様の中に浸透していってほしいと思います。



マイナスの現象に自ら振り回されるAさんの心情の受け止め

発表者：世田谷区立下馬福祉工房　　長見亮太

1．はじめに

Aさん（30代女性、知的障害、体の弱さ、視力の弱さがある）は随所に行動に乗れない場面、引っかかりを見せる。身体的コンディションに気持ちが大きく左右されながら、加えて支援者の存在を意識した顕示的な振る舞いを見せる。付き合い、試行錯誤しながら誘いかける5年の中で、Aさんの心情をどう解釈し、受け止めてきたかを振り返る。

2．エピソードから行動を解釈する

作業や日中活動ではその都度の誘いに「行かない」「やらない」の返事となる。「じゃあこっちの作業はどう？」「見学するって言いに行こうか」と回り道的に誘うことで態度が柔らかくなり、徐々に参加に気持ちが向けられていく。「やらない」は「やりたくない」のではなく、自信がないから「できない」と心配な気持ちを表現しているようである。自信のなさ＝自己肯定感の低さ、と感じる。

3．自己肯定感の低さに留意して関わってきたこと

誘い、促しながら参加しやすい出番、役割を設けた。一つ一つが成果を上げている訳ではないが、仕組みを意図して作っていった。

・気の向く作業を探る（チャンスを作る）・体操（関心を活かして）

・ファイトマネー（次の日に期待を持つ）

4．Aさんの求めているものは

お世話される存在ではなく、よりよく生きたい、私に関わってほしいと一所懸命アピールしている。出来たことの快適さ、認められた時の快、関心を向けてもらえた快、期待に応えることの快…によって気持ちが満たされていくもの。

5．あるべき付き合い方

具体的な付き合いの中身は試行錯誤。考え方としては、マイナスも含め懐深く「よし」とすることだろう。ただし頭では分かっていても、現実はどうしても「本当はこうだったらいいのに」との思いが勝ってしまうこともある。実践上の難しさである。

6．現在の環境の中でAさんの暮らしを考える

作業、仲間の存在を活用して個々の育ちを考えていく。集団への支援が目的ではなく、個に添って支援することが大事となる。Aさんが今できないことは×とせず、それもよしとすることで周囲から安堵感をもらう。できることは誘われて参加し、定番の役割で自分を表現する。仲間と支えあうことができれば十分な○。自信がなく、できなくても立ち直ることができれば立派に◎だろう。

気持ちが乗らないことも、「やらない」ことも、今の彼女の主体のありようとして受け止めていくことになる。受け止めてもらう安心がバネになり、本人の「こうなりたい」に向かっていくことを承知し、長期的な視点で付き合っていくことだろうと感じている。

テーマ：マイナスの現象に自ら振り回されるＡさんの心情の受け止め
発表者：世田谷区立下馬福祉工房　長見亮太

＜質疑応答＞
Ｑ：就労支援施設として、働くことが難しいＡさんへの役割とは？
Ａ：個別支援と、施設の役割（位置づけ）との葛藤があります。



世田谷区障害者雇用促進協議会の取り組み

発表者：世田谷区障害福祉担当部障害者地域生活課　　浅野剛史

＜はじめに＞

障害のある方が安定・自立した地域生活を継続するにあたり、「はたらく」ことは大きな支えとなる。平成25年6月現在、企業の障害者実雇用率は過去最高の1.76%となり、障害者雇用は年々進んでいる一方、特に中小企業では、採用と採用後の職場定着に相当苦労している現実もある。

一層の雇用促進には、企業の理解はもとより多分野の連携が欠かせないことから、福祉・産業・教育・行政など26団体で構成される世田谷区障害者雇用促進協議会は11年間にわたり、区民や企業の障害理解促進と雇用促進の啓発活動を続けている。

＜実践内容＞

「障害者雇用を進めたいが、どうしたらいいか分からない」という企業の不安や疑問を解消するため、障害者施設や特別支援学校の見学会、障害者雇用に積極的な企業による事例発表会などを“障害者雇用支援プログラム”として体系化し、平成22年度から年間を通じて実施している。

＜実践結果＞

開始から4年が経過し、プログラムが少しずつ企業に認知されてきた。プログラム参加をきっかけに支援機関と関わりを持ち、障害者雇用を実現した企業も出てきている。こうした企業が好事例として発表側に回ることで、後に続く企業へさらなる応援と啓発になると期待している。

＜考察＞

いかに有意義なプログラムであっても、企業に参加してもらえなければ意味が無い。そのためには、以下の2点が特に重要と考える。

①企業のニーズをとらえた企画・・・毎回アンケートを実施し、参加者の声を反映させるよう努める。

②幅広い企業を呼び込む工夫・・・ハローワーク渋谷の「雇用研究会」と共催で行うことで、雇用率未達成企業の参加を促す。東京商工会議所世田谷支部や東京青年会議所世田谷区委員会など構成団体とも連携し、多くの企業への案内に努める。

＜課題＞

「身近な地域で働きたい」と思うご本人やご家族が多い一方で、世田谷区には中小企業が多く、障害者雇用の輪をどのように区内中小企業まで広げていくかが課題である。一つの手法として、事業主としての学校法人、社会福祉法人、医療法人等との連携を深めていくことを提案したい。

テーマ：世田谷区障害者雇用促進協議会の取り組み
発表者：世田谷区障害福祉担当部障害者地域生活課　浅野剛史

＜質疑応答＞
Q：プログラムに参加した企業へのフォローアップには、どのようなものがありますか。
A：プログラムを通して、企業に、施設や就労支援センターなどの支援機関やハローワークなの支援体制を知っていただくことを重視しています。支援機関やハローワークも協議会のメンバーですので、具体的な障害者雇用の相談には、支援機関やハローワークが関わりながら進めていきます。

Q：発達障害者に対する支援については、どのような対応をしていますか。
A：個々のケースに合わせて、就労支援センター「すきっぷ就労相談室」と「しごとねっと」が連携して対応しています。成人期の発達障害者の支援事業「ゆに」を試行しており、来年３月には本格事業として、専ら発達障害者を対象として就労支援センターが立ち上がる予定です。



”給料日”は買い物に行こう！　～工賃の意義への考察～

上町福祉作業所　斉藤由子

１．誇らしさを意図して

日々の作業により給料を得るということを、働く意欲や、それぞれの充実感にいかに繋げられるのか、給料を使うということは、どのような意味を持つのか、当知的障害者就労事業での「給料日買い物」という行事を通し考えたい。

２．給料日・買い物の留意点

【給料（工賃）支給】下馬福祉工房では、社会的評価、教育的視点、福祉的な配慮という点から、それぞれの能力、作業具合を職員で合議し、働きがいに応じて毎月固定日に現金で支給している。

自分が作業をして得るものだと実感できるよう、お一人ずつ個室で手渡しをし、一緒に中身を確認、そこから、自分の口座への積み立て分（納涼会や忘年会等の行事時に引き下ろし）、買い物分、持ち帰り分と分けている。買い物分は、自分の給料で買い物をする、ということが分かるよう、給料から自分で財布に入れている。

【買い物】給料は使わなければ実感に繋がらないと考え、自分の欲しい物、ご家族への物等、支給日には必ず買い物をプログラム化して行っている。

３．「給料日買い物」を通して育っていくもの、意図するもの

①自分の欲しい物を自分で買う

欲しい物を自分で買う経験が、次の働く意欲や、自己実現といった感覚に繋がる。

②人のために使いたい

人のために何かを買い、それを喜ばれることが、自分の喜びになる。保護されるだけの対象ではない、家族の一員としての思いや、大人としてのプライドにも繋がる。

③肯定しやすい状況をつくる

誰かに何かを買って帰るということ、本人が買ったものが食卓に並ぶ、家族で食べるという場面は、周囲の人が、自然と感謝したり、すごいね、がんばったね、と言いたくなる状況となる。

④人からプラスを注がれる、プラスを受けやすい機会となる

肯定しやすい状況により、人からプラスの言葉、表現を受け取ることで、自己肯定感を得られる。この自己肯定感がベースとなり、安定感や次のステップへの力となる。

４．「給料日」への期待

利用者の一人が、「給料日」という詩を書いている。

「１０日は給料日だ　むねがワクワクだね　もらったら　なんだか　金持ちになった感じ　つみたてに1000円　買い物に1000円　すごいでしょ　買ったものはみんなで食べる　ミックスフルーツとジュース　それから　お父さんにカッパえびせん　わたしはこの日がいちばんいい」

「給料日」が、こんな特別な思いを感じる日、自分が認められていると直接感じられる日、家族からありがとうと感謝され、誇らしく思える日、そんな安心感や自己肯定感が得られる機会となることをきちんと意識していきたいと思う。

テーマ：“ 給料日” は買い物に行こう！～工賃の意義への考察～
発表者：上町福祉作業所　斉藤由子

＜質疑応答＞
Q：積み立てたお金で何をしますか。
A：忘年会や大きな行事で使います。

Q：お金を、他人のために使う難しさがあると思いますが、いかがでしょうか。
A：仲間やグループなど、みんなで使うこと、あるいは家族のために使うことは、自分のために使う喜びにつながるようです。



第３ブース　　子どもの発達／人権

	発表者	所属	テーマ
1	田淵　かおる	子どもの生活研究所めばえ学園	発達障害のある子どもとの関わり ～食事場面を通して～
2	菊地　悠介 小野寺　健	福音寮	福音寮・性教育の取り組みについて

発達障害のある子どもとの関わり　～食事場面を通して～

発表者：子どもの生活研究所めばえ学園　　田淵かおる

食べることへの緊張や抵抗が強い自閉症（５歳児）Ａくんが、自発的に食事をするようになるまでの過程で、支援者が心がけて関わったことについて報告する。

＜Ａくんの食事場面での特徴的な様子＞

家庭においては、好んでよく食べている物であっても、学園においては食べることはもちろん、給食の状況にすら参加できなかった。しかし、本児は、遠目から給食をじっと見ているなど、明らかに食べたいのに食べられない様子がうかがえた。

＜心がけて関わったこと＞

食事場面以外でも、やる気はあるのになかなか行動に移せずにいら立つ様子が見られた。その点も踏まえ、やる気はあるのに行動できない理由を細かく見取り、その都度療育者との間で解決し、やりたいことがスムーズにできた経験を積むことで、療育者との信頼関係を築けるように心がけた。

食べることが楽しいと感じられるようになること、又、食べることに対する意欲を強めることを目標として関わるようにした。その中で例えば、「食事とはこうあるべきもの」「食べ物を大切にする」といった食事の仕方やマナーなど常識にとらわれないように心がけた。

＜変化したこと＞

上記のような関わりを積み重ねた結果、食事場面にスムーズに参加できるようになり、コンスタントに食べられるようになった。また、あまり好んで食べなかった野菜も、好きな物と一緒であれば食べる様子が見られるようになった。更に外食など、環境が変わっても、ランチプレートの中から自分の食べられる物を選んで食べるなど、食事を楽しめるようにもなった。

テーマ：発達障害のある子どもとの関わり～食事場面を通して～
発表者：子どもの生活研究所めばえ学園　田淵かおる

＜質疑応答＞
Q：何年くらい在籍されたのですか。
A：4，5歳の時の2年間です。今回の発表は、最後の1年間のかかわりについてです。

Q：言語コミュニケーションについては、どのような様子ですか。
A：日本語でのやりとりをコミュニケーションの手段として、入園当初は認識していない様子がありましたが、状況にあわせた言葉で伝えていくことを積み重ねたことで、日常的に使うものであれば理解できる様子がありました。また、ほしいものや行きたい所などを、1単語で伝えたり、頭文字を言うことで伝えていました。

Q：運動については、どのような様子ですか。
A：概ね通常の5歳児と変わりない様子でした。トランポリンやプール活動が好きで、そういった場面を通じてスキンシップを図り、コミュニケーションを積み重ねました。

Q：成長される姿に、どのような思いでしたか。
A：喜びを感じました。



福音寮・性教育の取り組みについて

発表者：福音寮　菊地悠介、小野寺健

1．研究・活動の目的

児童養護施設に入所となる子どもの家庭状況は様々だが、人間関係の基本的な成り立ちを体得できずにいる子どもが多い。このような子どもは自己肯定感が低く、自分を大切に出来ない傾向がみられる。一方で社会の性にまつわる危険は増しており、子どもが簡単に危険な目にあってしまう可能性もある。そこで、子ども達がそのような社会の中で人間として豊かに生き抜ける自立の力を身につけることを目的とし、福音寮では、性教育をテーマにしたグループ活動を行なっている。

2．実践内容

現在の福音寮の性教育では担当者６名(男女3名ずつの指導員または保育士)が、小学５、６年生、中学生男子、中学生女子という３つのグループに、成長段階に合わせた性教育を年４回、高校生には年２回実施している。また対象とする子ども全員を男女に分けたグループでも年１回実施する。各回ごとに担当者がテーマを決め、教案の作成、ミーティング、実施後の評価（報告書）を行なう。

テーマの選択では子どものニーズを最優先し、発達段階に合わせ、興味関心を引きだす中で、学校では教えにくい実社会に出て役立つ内容を扱うようにしている。

3．結果と考察

小学校から継続して性教育に参加した子どもには、成長段階に合わせた性教育が実施できている。現在では子どもたちの性に関する意識が高くなり、性行動について慎重に考えられるように変わってきた。また性教育担当者職員も業務を担当する中で考え方や意識が高くなり、異年齢の男女が生活を共にするホームにおける性に関するリスクを施設全体で共有できるようになった。グループ活動を継続したことで、福音寮の全体の子ども達への生活支援の質が向上したと考えられる。

4．課題

7年間の実践から整理された現在の課題は次のとおりである。

・性的虐待などを受けた子どもは、性教育を受けることでフラッシュバックをするリスクがある。事前のアスセメントをしっかりしなければならない。
・小学生で性教育を受けてきていない中高生からの途中入所の子どもと、小学生から受けてきた子どもとの差を埋める働きかけが不十分である。
・知的、発達障がいに応じた性教育プログラムを考えていく必要がある。
・性教育の実施内容は全ホームに回覧し、職員間の周知、共有を図っている。しかしどのようにグループ活動を実施しているのか、直接見る機会は少ないので、担当以外の職員とのギャップができている。このギャップを埋め、性教育と生活支援の職員が連携して性の発達支援をさらに深めていくことが重要である。

テーマ：福音寮・性教育の取り組みについて
発表者：福音寮　菊地悠介　小野寺健

＜質疑応答＞
Q：何年くらい取り組んでいるのですか。
A：はい、７年間行っています。

Q：性教育を行うにあたって、人権については、どのように教えていますか。
A：人は一人ひとりが意見を持っており、一人ひとりの考え方を尊重することの大切さを、子どもたちに教えています。

Q：性教育を行う上でのルールはありますか。
A：はい、目標と「基本ルール」があります。まず、福音寮が目指す目標を、皆で読み上げます。また、会を進めるにあたっての「基本ルール」を、子どもたちと職員で読み合いながら、進めています。



第４ブース　　家庭生活支援

	発表者	所属	テーマ
1	高山　都規子 渡辺　公恵 斉藤　映子	かたよせ会	在宅介護家族の会の有様
2	佐藤　小百合	母子生活支援施設かわだ	母と子とかかわるということ ～自分の子育てを通して～
3	前田　佐知子	母子生活支援施設 パルメゾン上北沢	子ども家庭支援の現場から ～関わることの難しさ　関わることの　その力～
4	井口　直樹	子どもの生活研究所おおらか学園	家庭訪問支援を通じて学んだこと

在宅介護家族の会の有様

発表者：かたよせ会　高山都規子、渡辺公恵、斉藤映子

目　　的　　平成６年（１９９４年）主人が脳梗塞で倒れ寝たきり状態となり３年後、平成９年（１９９７年）在宅介護家族会を１２名で発足し、今年で１８年目を迎える。突然やってくる介護に関する情報交換や介護者の精神的、肉体的な負担を軽減することを目的とする。

実践内容　　毎月第３木曜午後１２時３０分から午後４時まで上北沢ふれあいの家で活動している。会員は３２名、看取られた介護経験者が多く、介護に関する体験など現役の方々の相談相手になっている。介護者の心の癒しとして落語・音楽コンサート・フラバンド・会食会・体操　等イベントをしている。

結　　果　　最後まで在宅介護するにはどうしたら良いか「世田谷福祉１００人委員会」から長谷川先生の講演をしていただいたり、あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）の所長等　専門の方々のお話を聞き、看取られた方達も家族会があって大変助けられたと感謝の言葉をいただいている。

考　　察　　全国６００万人位いる認知症の方々を介護する家族会はあるが、一般的な病気の家族会は少ない。

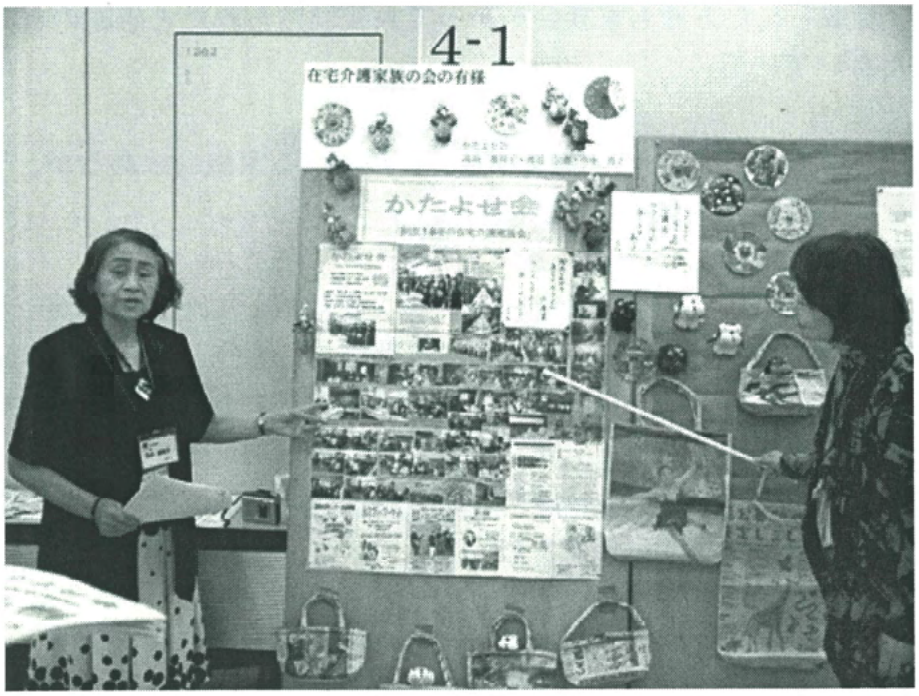
課　　題　　世田谷区で家族会の一覧のリーフレットを作成して下さったが　世田谷区では、２８ケ所あるが認知度が低いのでもっと周知してほしい。在宅で介護している人はなかなか家族会に参加できないが、かかりつけ医師　看護師　ＰＴ　ＳＴ　ケアマネジャー等　連携プレーを良くとり、介護者の負担の軽減に協力してほしい。地域の支えも切望する。介護の癒し空間を作りたい。

テーマ：在宅介護家族の会の有様
発表者：かたよせ会　高山都規子・渡辺公恵・斉藤映子

＜質疑応答＞
Q：かたよせ会の皆様は、新聞紙で作ったバッグ、ネクタイで作るポシェットやネックレス、タオルの仔犬など、いろいろな作品を作っていらっしゃるのですね。
A：物が大切にされない世の中、少しでもエコで作れるものを考え、作っています。

Q：コマの材料にCDを使うという工夫は？
A：長く回ることができます。また、回る時にきらきら光り、きれいです。材料としては、画用紙ではない方がよいです。

Q：相手が子どもさんの場合の工夫は？
A：キャラクターのシールや車を取り入れると喜ばれます。



母と子とかかわるということ
～自分の子育てを通して～

発表者：母子生活支援施設かわだ母子支援員　佐藤小百合

1．母子生活支援施設とは
- ・母子生活支援施設は「生活の場」
- ・仕事の内容
- ・職員の役割

2．職員としての姿勢
- ・人の思いや考え方を理解する前に知ること
- ・相手が「頼んでみようかな」「話してみようかな」と思える存在、関係になること
- ・相手に「自立」を問う前に、自分に「生きる」ことを問う

3．母子生活支援施設の仕事と自分の子育て
- ・退職か産休か
- ・母子支援とは
- ・今の自分ができること

4．子育てと社会
- ・社会とかけ離れた生活のように感じる育休
- ・子どもがいて働くということ
- ・子どもも育ち親も育つ

テーマ：母と子とかかわるということ　～自分の子育てを通して～
発表者：母子生活支援施設かわだ　佐藤小百合

＜質疑応答＞

Q：子育ては人それぞれで、何が正しいか、一概には言えないところがあるかと思います。母親が変わらないと、ということがあるかと思いますが、どんな気持ちで向き合っていますか。

A：子育てにもその人それぞれのやり方があるので、肯定、否定でなく、その人のやり方を知った上で、他の方法や工夫を提案します。その中で、どの方法をとるのが自分にとってやりやすいかを自分で考えて選んでもらうようにしています。

いつか、「そういえばそのように言っていたな」、「この人の言うことならやってみようかな」と思ってもらえるような相手になれるよう心がけています。



子ども家庭支援の現場から
～関わることの難しさ　関わることの　その力～

発表者：母子生活支援施設パルメゾン上北沢　　前田佐知子

はじめに

「子ども一人育てるのは村中の人の協力が必要」というアフリカのことわざがある。そのとおりと思う。子どもには多くの大人の愛情が必要であるし、親も多くの人の温かな見守りや協力がなければ、その子育ては辛いものとなる。今日の子育て家庭には、母と子に生きづらさをもたらす生活課題が数多くあり、愛情や協力を必要としている親子ほど、それらを受け取れずにいる現実がある。

発表の目的

困難な状況にある親と子に、いま、社会が出来ることを考える。

関わりの難しさ

子育ての最中に、離婚、ＤＶ、経済困窮、親の依存の問題や心身の疾病など、養育を困難にする生活課題に直面することがある。このような状況の中では、親の自己肯定感は下がり、生活の余裕のなさは親の苛立ちや、ときに子への無関心を生む。子ども時代に虐待や不適切な養育の中で育ち、十分な手当を受けずに育つと、親となったときに同じことを繰り返すと言われる。

こうした親子には、何より支持的な関わりが大切なのだが、実践はとても難しい。困難な状況にある親や子は、困っていることを、攻撃的に又は他者の愛情や理解を得難い方法で表して、親身になる者を困らせる。

それでも、そうした特性に応じて温かく関わり続けると、親も子も変わっていく。これは理論的にも証明されているし、これまでの経験から実感している。

関わることの　その力

子ども達が心身ともに健康に育つためには、親と子への温かな関心と協力が欠かせない。「子育ては大変なことも多いよね」と、親には温かな労いの言葉をかけてほしい。事あるごとに親や子の良いところを見つけ、意識して伝えることが大切。褒められることで、親子は勇気づけられる。「おはよう。行ってらっしゃい。お帰りなさい」などの声かけも大きな力となる。たいていの場合返事は戻らないが、言葉は届いている。温かなメッセージを送り続ける、その見返りを求めない行為に意味がある。

子をひどく怒鳴るなど不適切な場面に出会った時も、親にまず「大丈夫ですか」と声をかけると、親は冷静さを取り戻せる。キレる子どもにも同じ。「どうした。何かあったの」と伝え、温かく見守り続けていく中で、子どもは徐々に荒さを鎮めていく。

幾重にも重なる困難な状況を抱えた親と子に、他者とつながる力を取り戻し、生きかたの軌道修正をもたらすものは、人の温かさであろう。社会が出来ることは、とても多い。

テーマ：子ども家庭支援の現場から
～関わることの難しさ　関わることの　その力～
発表者：母子生活支援施設パルメゾン上北沢　前田佐知子

＜質疑応答＞
Q:子どもからきつい言葉をうけても、感情的にならない為の方法はありますか。
A：人間ですから腹が立つこともありますが、深呼吸して落ち着き、お香を焚いてダメージを受けたであろう自分の心のケアをしています。方法は人それぞれと思います。

Q：今までの経験の中で、相手が今大変なことはわかっていても、母や子に厳しくしてしまうことはありませんでしたか。
A：あります。良かれと思ってしたことが、あとでもっと良い方法が分かることがあります。それでも、その時の自分の「行為」が悪意（腹立ちや怒り）から生まれたものでなければ、謝ることも分かりあうことも出来ると、そう実感しています。

Q：職員間の考え方が様々ある中で、共通認識をもつための方法は何か。
A：日々の申し送りや、様々な場面で認識共有に努めますが、それでもそれぞれの家族観や価値観があり、思いの温度差も生じます。話し合い、その差を縮めていくこと。地道に行い続ける事かと思います。



家庭訪問支援を通じて学んだこと

発表者：おおらか学園　　井口直樹

１．はじめに

Ａさんは、知的障害を伴う自閉症で、多くのこだわり行動がある。例えば、行動を始める際にブロックサインのように体の色々な部分を触ったり、自分が決めたことをやり切らなければその先に進めないなど、周囲の人や状況との折り合いをつけることが難しい。そのことから家庭生活が大きく乱れてしまう。家族が時間の都合などから行動を早めようとすると怒り、時には他害行為に至ることもある。逆に本人の行動のままにしても、堂々巡りのように行動を進められず止まってしまう。結果Ａさん自身も家族も困り、疲弊してしまう。そのような中、朝、学園への登園までの時間帯、母親との間で行動をスムーズに進めることができず、送迎バスに乗り遅れることが続き、母親と園長が相談を重ね、支援員が朝の時間帯に家庭訪問を行うことになった。

２．家庭訪問支援でのＡさんの様子

初回は先輩支援員が行い、引き継ぎを受けて私も家庭訪問をすることになった。先輩支援員が訪ねた際にはＡさんは笑顔で待ち構えていて、すぐにトイレなどの朝の日課を進めた。排便にこだわり便意はないのに無理に力むなどあったが、「Ａさん、無理にしなくてもいいですよ。」と、支援員がＡさんの気持ちを汲んで排泄をやめるように促すと、抵抗なく沿い、自発的に行動を先へ進めることができていた。支援員はＡさんの「こだわりをやめたくてもやめ難い気持ち」「抵抗はするが後押ししてほしい気持ち」などを母親に向けて代弁しながら支援を進めた。母親は支援員の関わりやＡさんの様子をみながら、一つ一つ納得している様子だった。

私の訪問当日、「いつもの学園とは違う状況で本当にＡさんは私の支援を受け入れてくれるのか」と不安があったが、Ａさんは笑顔で自発的に動き出すことができた。私とＡさんの関わりも、母親は安心してみている様子だった。そして、その後母親も支援員と同じようにＡさんに関わる中で、Ａさんは母親の促しを受け入れる幅が広がり行動もスムーズになってきた。

３．家庭訪問支援を通して考えること

家庭という異なった状況でも私の促しで自発的に行動できたのは、施設の中で積み重ねてきたＡさんと私との関係性によるものと考えられた。Ａさんにとって私は、「困った時に促してくれる人、助けてくれる人」として受け入れられていた。人が関わることが安心感や安定感を与え、人が求める行動を自発的に行う気になることが重要だと思う。これ以降、母親のＡさんへの対応が変化してきた。具体的には、それまで母親は余程困らなければＡさんのこだわりを尊重する考えだったが、Ａさんが行動を進められず、かえって苦しんでいる時には後押ししたりこだわりを止めるようになり、Ａさんもそれに応じるようになった。そこには、母親が、園長達との話し合いの中でＡさんの困っている状態を知り、実際にＡさんを見て気づき、家庭訪問支援での支援員の関わりを見て、「やってみよう」と気持ちを動かされたという、本人を取り巻く、家族、支援員の関係性の深化もあったと感じている。

テーマ　　家庭訪問支援を通じて学んだこと
発表者　　子どもの生活研究所おおらか学園　井口直樹

＜質疑応答＞

Q：施設内での支援では、常に１対１というわけにはいきません。支援するべき時というのは、状態が良い時、悪い時などでいうと、どのような時だと考えていたのでしょうか。

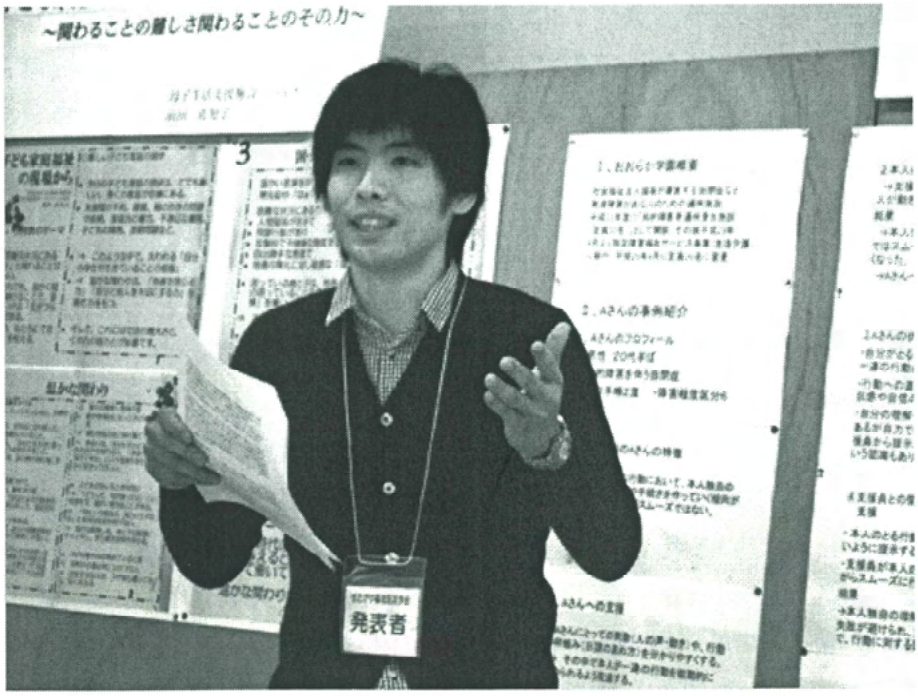
A：必ずしも状態の良し悪しで関わる時を決めていたのではなく、１日の生活の流れの様々なところで関わっています。特にＡさんが行動を始めにくかったり、停滞してしまいがちなところでは重点的に関わっています。

Q：今までうまくいかなかった時は、ありますか。

A：はい。事例の中でお話ししましたが、自発的な行動をとることを求める支援を行ったときは、行動の停滞を招いてしまい、うまくいきませんでした。

Q：自閉症で言いたいことが伝えられない子どもと付き合いがありますが、コミュニケーションがとれているのか心配です。

A：言葉はなくても、やり取りがかみ合って、リラックスしている様子が見られたり、笑顔が見られているのであれば、その子は気を許してくれているのではないでしょうか。



第５ブース　　認知症ケア

	発表者	所属	テーマ
1	鹿野　幹子 横山　香織	深沢あんしんすこやかセンター	認知症と医療連携
2	千葉　優雅 大森　和江	優っくり小規模多機能介護喜多見	生活習慣病と認知症予防にむけて 『物語（ナラティブケア）』が認知症高齢者を支える
3	長谷部　希恵子 高木　英樹	グループホームももちゃん	日常の外出ケアによる認知症症状への効果
4	相田　有紀 小泉　佳志美	等々力の家居宅介護支援事業所	認知症高齢者の社会貢献を可能にする「彼も誰かの社会資源」
5	八重樫　亮一	優っくりグループホーム鎌田	素晴らしき特技をもう一度

認知症と医療連携

発表者：深沢あんしんすこやかセンター　鹿野　幹子、　横山　香織

＜目的＞

医療未受診で認知症の症状が悪化し、本人や家族が困ってから相談にいらっしゃるケースが多くなっている。その理由としては、認知症の初期では日常生活への影響が小さく困りごとに気付きにくいことや自分が認知症であると認めたくないという心理状態になることが挙げられる。

世田谷区で認知症初期集中支援チームモデル事業が始まったことをきっかけに、認知症初期の対応について考察を行った。

＜実践内容・結果＞

・世田谷区における認知症に対する取り組みについて
・認知症初期集中支援チームモデル事業について
・深沢あんしんすこやかセンターの取り組み
　Aさんの相談事例（モデルケース）
　Aさんのケースの振り返り

＜考察＞

認知症になっても、地域で生活を続けていくためには、主治医やあんしんすこやかセンターによるタイムリーであり地道なアプローチが重要になる。そのために、初期の集中的な支援が有効。

＜今後の課題＞

・認知症初期集中支援チームモデル事業が、機能性を上げるために必要なこと。
・認知症の初期対応が重要なことが、周知されていないことについて。

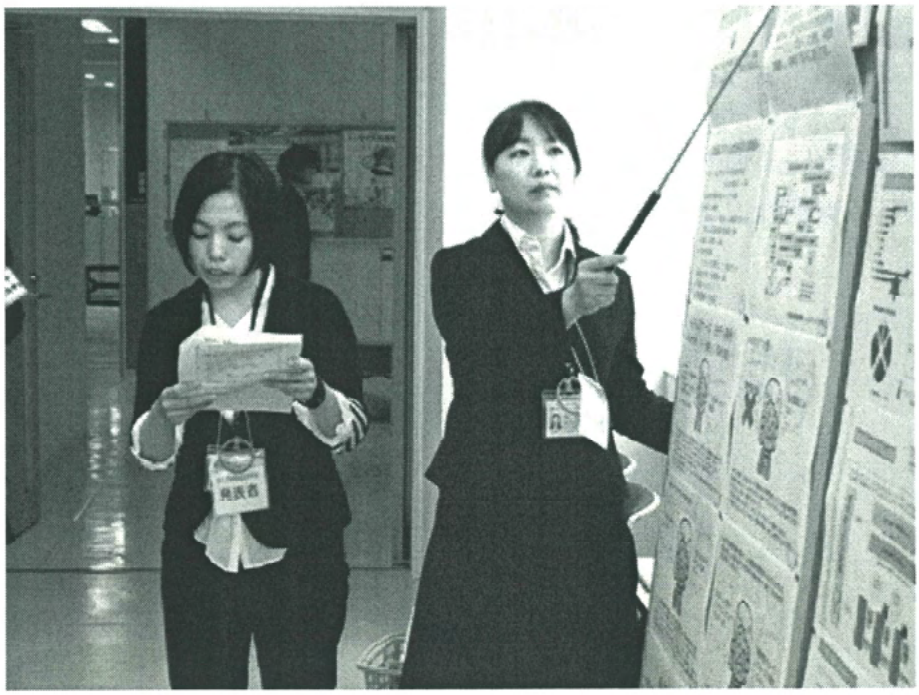
テーマ　認知症と医療連携
発表者　深沢あんしんすこやかセンター　鹿野幹子、横山香織

＜質疑応答＞
Q：認知症初期集中支援チーム モデル事業の月１回の訪問の際に、あんしんすこやかセンターは毎回同行しますか。
A：初回訪問の際は同行して、チームを紹介します。その他は必要時同行します。

Q：モデル事業終了後は、あんしんすこやかセンターはどのように関わるのですか。
A：６ヶ月間の訪問終了後は、その方の状況によって、あんしんすこやかセンター職員やケアマネジャー、介護サービス事業者、かかりつけ医等に引き継ぎます。

Q：月１回の訪問に、あんしんすこやかセンターは同行しますか。
A：１回目は同行して、チームを紹介します。

Q：それ以降は、あんしんすこやかセンターはどのように関わるのですか。
A：介護保険サービスの担当者などと連携しながら進めます。



生活習慣病と認知症予防にむけて
『物語（ナラティブケア）』が認知症高齢者を支える

優っくり小規模多機能介護喜多見　千葉優雅、大森和江

人口の高齢化に伴い、認知症高齢者は、ますます増加しております。その予防法や治療法の開発が緊急課題となっています。更年期は臓器の加齢を背景に、全身に種々の疾患はおこってきます。生活習慣病に代表される中高年期からの慢性の病態が中枢神経機能に影響を与え、認知症発症のリスクを高め病態を修飾している可能性が指摘されていますが、裏を返せば、生活習慣病の治療に用いる薬剤、食事や運動などの生活習慣などが認知症に予防的に動く可能性も示唆されます。我々は、こうした全身疾患、生活習慣と認知症の関連についての認識をもちながらカラダ（疾患）の予防だけではなくココロのケアと二面で取り組むことがミッションと考えています。

今回の事例を通して、何十年という生活習慣をすぐに変えることは、たいへん難しいこと、また認知症状のある方であれば、なおさら難しい支援でもありました。利用者のペースをみながら、ココロとカラダに向き合う時間を共有していくことで新たな支援方法がみえたり、健康面からアプローチを行う事の大切さに気付くこともありました。そんなに早く改善するものではない事を職員が理解し焦らず関わっていくことが今後も必要だと思います。

また、私たちがケアするうえでもっとも大切な事とし、ルール化した事があります。それは簡単に、拒否している人を線引きしたり判断をしないよう職員内で、話し合いを何度も繰り返し、統一したケアを目指しました。○○してください…　○○をしましょう…との声掛けではなく、利用者自身に選択してもらいながら、こちらからのアプローチを続け、その結果、少しずつ利用者に変化が生まれてきたことを実感しています。みなさまには、ぜひきめ細やかなケアへの取り組み、またナラティブケアにより利用者自ら納得し実行していく取組みにぜひ着目していただきたいと思います。

テーマ：生活習慣病と認知症予防にむけて『物語（ナラティブケア）』が認知症高齢者を支える
発表者：優っくり小規模多機能介護喜多見　千葉優雅、大森和江

＜質疑応答＞
Q：ナラティブとは、どのような意味でしょうか。ポイントはありますか。
A：自分の人生について、自身の物語として語ることです。その人の関心が向く先を大切に、回想法なども使って思い出していただくことも大切です。

Q：事例の方は、その後どのような変化がありましたか。治療は受けていらっしゃいますか。
A：とても前向きな活動もできるようになりました。ホームページにも載せていますので、ぜひご覧ください。

Q：スタッフは、認知症について評価はどのようにしていますか。
A：しっかり個別プランを立ててケアを行うようにしています。



日常の外出ケアによる認知症症状への効果

発 表 者：グループホームももちゃん　長谷部希恵子、高木英樹

《目的》

■当グループホームでは入居者の外出を大切なケアの一部として考え取り入れている。外出が認知症の入居者にとって、日常生活動作に、どの様な改善効果があるか、多様な角度から分析し実証する。

《データ収集》

■過去３年間における外出のデータを収集し、下記の項目で分類した。
外出先、人数、歩行能力（徒歩 or 車椅子）、外食状況、外出中・帰所後の入居者の状態

《分析》

環境変化の事例	新たな刺激受容や機会	良好な生活動作効果
①外気に触れる	視覚・聴覚・嗅覚への刺激	表情の多様化・季節の体感 BPSD の発症も軽減される
②体を動かす	運動刺激	脳・身体の活性化
③外食する	普段と異なる摂食刺激	食事量増加や嚥下機能改善
④見ず知らずの人達と出会う	よそ行きの態度・緊張・自分を良く見せたい気持ち	社交辞令や敬語を使う
⑤職員との会話と接触	職員が入居者の事だけに向き合える時間が得られる	外出の共有で親近感が増す
⑥ご家族の参加	入居者とご家族そして職員がリラックスした環境で時間を共有	家族と一緒で嬉しい・職員が居て安心、皆が共感でき意外な一面の情報取得などが可能

《結論》

■外出すると、普段と異なる刺激や適度なストレスと注意力が増え、プラスの感情（笑い、喜びなどの快い感情）を引き出し易くなっているように思われる。
また、職員は外出した入居者だけと向き合える時間となり、認知症ケアに重要な個別対応が自然と行える環境を得られる。
外出しない日は、居眠りが増え、他入居者や職員の言動・行動が気になり、マイナスの感情（怒り、イライラ、落胆などの不快な感情）が表出され易いと思われる。また、職員は生活介助・身体介助を行いながら、その他の業務も遂行するので、個別にゆっくり会話をする時間が少なくなりがちである。従って、外出行動は認知症ケアに重要な改善要素で、個別対応と自立支援のケアプランにおける有効な環境提供であると思われる。

《課題》

■職員の意識は外出ケアの効果を感じているが、一方、①余裕の人員配置や②リスク対応スキルが必要となる。この様な事から③健全な採算性と安全性を検証しながら、常時無理なく実現できる様にチーム全体で努力して行かなければならない。

テーマ　　日常の外出ケアによる認知症症状への効果
発表者　　グループホームももちゃん　長谷部希恵子、高木英樹

＜質疑応答＞

Q：外出を続けてほしいです。外出が日常になっているというグループホームはすごいです。ぜひ他のグループホームにも伝えていただきたいです。

A：９人の入居者に３人のスタッフです。外出には、車の運転と介助で、最低２人のスタッフが必要ですから、３人中２人が外出してしまうと、残るスタッフは５～６人の入居者を一人でみることになり、無理が生じます。外出を断念せざるを得なくなります。しかし、当ホームは２ユニットあるので、各ユニットから１人ずつの計２人のスタッフと、入居者４人の外出が可能です。また、家族が参加し外出することも提案したいです。外出は、本人の有する能力を自然と発揮できる環境を作ります。外出が特別でなく毎日大切であると実感しています。

Q：外出するとよく眠れますか。

A：情報が過多になってしまい、人によっては興奮し眠れなくなってしまいます。その人を良く知り、外出先を選ぶことが大切です。トータルすると、よく眠れる人がほとんどです。



認知症高齢者の社会貢献を可能にする「彼も誰かの社会資源」

発表者：社会福祉法人奉優会等々力の家居宅介護支援事業所　相田有紀、小泉佳志美

現役時代の得意分野を活かし、要介護者になってもボランティア活動を続ける男性利用者。
年齢や病気のためボランティア活動が行なえなくなった。
支援を受けることによってどう変化があったか、支援する側でいるために必要なことは何かを研究した。

大学時代に外国語を学び、卒業後、海外旅行会社経営を始めたが、バブル崩壊後は会社経営が悪化し、会社は倒産、妻とは離婚。子供には恵まれなかったため、独り暮らしとなる。
海外旅行会社は失ったものの、「外国との接点を持ち続けたい！」との思いから、銀座や六本木の街角へ行き、困っている外国人観光客の方に、英語で話しかけて案内などをするボランティア活動を開始。
気が向いたときに出掛けて行ってボランティア活動をしたり、大学時代の同級生との同窓会を開催したり、気ままな生活を送っていたが、次第に少ない年金生活では苦しくなり、生活保護受給者になった。将来への不安から生活は荒み、自宅内はゴミ屋敷化。大家から立ち退きを迫られているとの妄想に苛まれるようになり同級生とも疎遠、ボランティア活動へ出掛ける回数が激減した。

ヘルパーによる掃除支援の導入、同世代の人との交流の機会を持つためにデイサービスの利用、姉からの支援、コンビニの店員による協力、ヘルプマークやヘルプカードの利用など、フォーマルやインフォーマルサービスを利用していくうちに、ボランティア活動へ出掛ける回数が、支援開始前後では大幅に増える結果になった。

在宅介護における自立支援の最終目標は、本人の社会参加や社会的貢献を可能にすることにあると、私たちは考える。
「その人らしい暮らし、望む暮らし」の実現のために、人の手を借りたり社会資源を活用したりして、日常生活を自分の意志で成立させ、それを継続することが大切だ。個性を導きだし、さまざまなニーズを満たせるような環境づくりが必要になる。

高齢になっても、認知症になっても、いつまでも誰かの役に立っていたい…。
「目下の夢は、7年後の東京オリンピックで通訳をすること」
これからも心身ともに元気でボランティア活動が続けられる環境を整えていくために支援を続けていきます。

テーマ　　認知症高齢者の社会貢献を可能にする「彼も誰かの社会資源」
発表者　　等々力の家居宅介護支援事業所　相田有紀・小泉佳志美

＜質疑応答＞
Q：すべて介護保険サービスの範囲ですか。ボランティアが入っていますか。
A：周囲の方々の支援や見守りがあります。少しずつですが、周囲で見守る環境が整ってきました。

Q：一番気にされたことは何ですか。
A：薬の管理です。目が悪く、薬を取り出せないため、出しやすいよう工夫しました。また、友人の影響で薬を服用したがらない点については、姉やヘルパー、デイサービスと連携し指導しました。

Q：ゴミ屋敷というのは、どの程度の状態でしたか。
A：ミルフィーユ型ほどではなかったです。しかしゴミなのか必要な物なのかわからない状態で、まず掃除から行いました。

Q：片付けに、本人の拒否はありませんでしたか。
A：何とかしたいという姉の気持ちが強かったです。またヘルパーの来訪に、「誰かが来るから綺麗にしておこう」という本人の意識の変化もありました。



素晴らしき特技をもう一度

発表者：優っくりグループホーム鎌田　八重樫亮一

グループホームに入居し施設という特性上、制限のある共同生活の中で少なからず生活に対する意欲が低下していきました。

男性利用者Ｙ様を対象に、長年仕事として行ってきた調理技術や知識を実践してもらい施設での楽しさや役割などを発見してもらうことが目的です。

2 月に入居され、5 月に鼻腔癌の治療のため入院。約１ヶ月後に退院され戻ってくると歩くことに自信をなくされ部屋にこもりがちになっていきます。
調理の仕事をお願いするも「料理と惣菜は違うから･･･」「あなた方の仕事をとってはいけないから」と消極的。なぜ特技である料理をされないのか？
いくつかの仮説を立て取り組みをしていきました。

8 月の夏祭りに焼きそばの調理をお願いし、慣れないホットプレートでの作業でしたが多少無理されながらも喜んでやっていただきました。

途中、ボランティアとして来てくださった中学生や専門学校生に料理の楽しさややりがいなど熱心に話されていました。

9 月に入り、元ホテルシェフＹ様に本格料理を作って頂くために理由付けを考え職員の子供の誕生日に向け、カニクリームコロッケの作り方を教えて頂くことになりました。

当日はＹ様が中心となり作業し、専門的な知識から家庭で作るものと商売で作るものとの違い、細かなセンスなどいろいろと教えていただきました。

完成したカニクリームコロッケを他の入居者様と一緒に召し上がり、全員で本格コロッケを堪能することができました。
Ｙ様も慣れないキッチンでの作業で「もう少し良くできるんじゃないか」と再度挑戦する意欲が湧いてきたようでした。

クリスマスのご馳走や正月のおせちを作ったり、別フロアに入居されている奥様の誕生日や二人の結婚記念日にご主人の手料理でお祝いなど、調理という特技を活かしてＹ様のグループホームでの生活を自ら楽しいものにできるようお手伝いしていこうと思います。

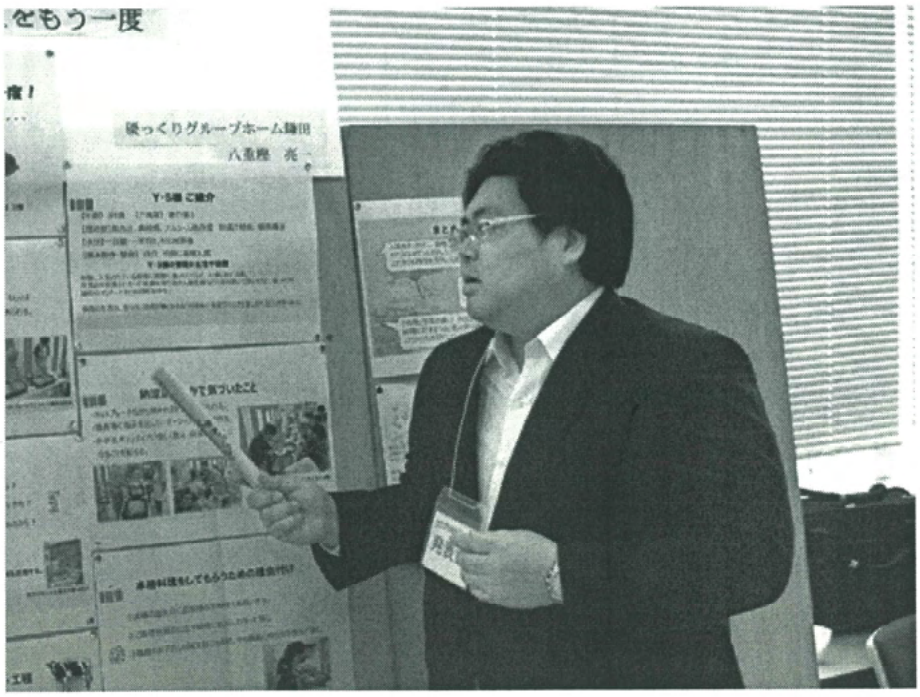
テーマ　　素晴らしき特技をもう一度
発表者　　優っくりグループホーム鎌田　八重樫亮一

＜質疑応答＞
Q：毎日の食事は、どのような感じですか。
A：３食とも、一（イチ）から作っています。朝食は職員、昼と夕食は入居者も協力します。

Q：その方も、参加していますか。
A：この頃、徐々に参加してくださいます。日常の食事でないときには、よくやってくださいます。忙しい時や不慣れな職員が作っている時は自然と作る側にきてくれます。

Q：プロの方ということですが、普段の食事には満足していますか。
A：おいしいとも、まずいとも、素直に感想を言ってくださいます。

A：このご本人のレシピで作ってみてください。（ハンバーグステーキ）ラードがポイントです。ソースもトマトベースで本格的です。



第６ブース　　高齢者支援

	発表者	所属	テーマ
1	木谷　哲三	世田谷区立特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	地域包括ケアの推進と特養の役割（考察）
2	瀬戸　麻里絵	優っくりグループホーム鎌田	転倒リスク=車いす？～歩くことをあきらめない～
4	小林クリスト ファー太	世田谷福祉専門学校卒業生	カレンダー製作を通して、利用者の主体性を引き出せるような関わり方を考える

地域包括ケアの推進と特養の役割（考察）

発表者：世田谷区立特別養護老人ホーム上北沢ホーム　木谷哲三

【目的】都市部における高齢者は団塊の世代が後期高齢者を迎える中で大幅に増え、必然的に高齢者福祉・介護分野に大きな負担と施策の再構築を求める。国は 2025 年を目途に地域包括ケア体制を構築しようとしているが、多機能高集積の特別養護老人ホームが地域の一員としての役割を果たすことで地域の「介護力」が飛躍的に高まる。一方、世田谷区内の特養も 18 カ所になり、区が進めてきた地域行政の枠組みの中で地域資源として活用できる社会資源となってきた。世田谷区社会福祉事業団が主催し平成 25 年 10 月に開催したシンポジウムを基に「これからの特養の役割」について考察する。

【内容】全国高齢者福祉施設協議会(以下「老施協」という)は、これからの特養は「5つのゼロ」（①おむつゼロ②転倒骨折ゼロ③胃ろうゼロ④拘束ゼロ⑤褥そうゼロ）と「４つの自立支援」（①認知症ケア②看取りケア③リハビリテーション④口腔ケア）で高機能特養を目指し、目指すべき方向は「地域復帰型、地域循環型機能」であるとの報告があった。また、専門的機能や介護経験を蓄積し２４時間３６５日対応型の特別養護老人ホームが地域包括ケアシステムの中核的役割を果たすことで、システムが有効に機能するとしている。このシンポジウムでのアンケートを集約すると、区民からの特養に対する期待は高く、地域との関わりや在宅支援など幅広い要望があることが示されたのでその内容を報告する。さらにこれらをもとに世田谷区の進める地域包括ケアの構築について、特養の具体的取り組みを通じてその枠組みについて考察する。

【考察】「この地区には特別養護老人ホームがあるから安心だ」といわれるような世田谷区の地域包括ケアの具体的システムは何かという観点から考察を進めた。そのひとつが２４時間３６５日安心を届けるシステムの具体的な形である。世田谷区が進める地域行政は福祉の「三層展開」を目指しており、その具体的な形としてあんしんすこやかセンターが各まちづくりセンター管内ごとに設置されているが、在宅生活を支援するケアマネージメントの統括機能が弱いという指摘がある。家族がこれ以上在宅での継続は困難と判断する重介護の高齢者を支える地区単位の包括ケアシステムの具体像は何かを提起し、パネル展示をもとに発表者と参加者の双方向での議論を行う中で、２０２５年を目指した世田谷区の地域包括ケアの具体的姿について考察を展開していきたい。

【課題】（１）地域包括ケアシステムの焦点は医療と介護が具体的に連携するシステムである。この報告は特別養護老人ホーム側からの考察であるため医療側の視点が反映されていないという欠陥がある。
（２）特養は介護報酬で運営されており、その基準も国の制度的枠組みの中で決められているため、制度的制約という課題が存在している。これらを克服する運営側の努力とともに制度の枠組み変更を求めるという大きな課題がある。

テーマ：地域包括ケアの推進と特養の役割（考察）
発表者　世田谷区立特別養護老人ホーム上北沢ホーム　木谷哲三

＜質疑応答＞

Q：今まで、特別養護老人ホームについて、政府は終の棲家と言ってこなかったが、実際には、いかがでしょうか。

A：社会福祉事業団が運営する施設では、特養での看取り介護を重視しています。都市型の特養として、家庭の延長として特養を活用していただき、ご家族の皆様と最後までケアしていきます。

Q：地域協働活動について、具体的な案はありますか。

A：在宅要介護者の支援、学校との交流、各種団体との交流、認知症カフェなど、地域の介護の拠点として、様々な取り組みを考えていきたいです。

Q：地域の食事会というのは、いかがでしょうか。

A：地域主催の食事会がありましたが中止になりました。施設側から呼びかけたいと思います。

Q：「シンポジウムアンケート」では、どのような意見がありますか。

A：「自分たちは施設には入れないだろう」という意見が多く、特養の持つ機能を在宅者にも還元してもらいたい、そういう施設であってほしいとのご意見は多数ありました。



転倒リスク＝車いす？～歩くことをあきらめない～

発表者：優っくりグループホーム鎌田　　瀬戸麻里絵

【目的】

グループホームにおける歩行困難者はもう歩くことが出来ないのだろうか。介護施設では転倒リスクがまず懸念され、安易に「車椅子使用」になっているのではないか。ご本人の強い歩きたい思い、医療関係者からのストップ、ご家族の葛藤を目の当たりにした介護職員に出来る事は何かを、「歩行支援」という視点で検討した事例。

【実践内容】

① 転倒状況の分析、転倒のリスク、万が一転倒した時何が困るのかを考え、その危険因子を最小限におさえるためにソフト面、ハード面ともに環境整備を行う。
② 対象者に最も適している福祉用具の選定
③ 職員、家族の意識変革

【結果】

① 転倒回数が激減した（取りくみ前は月２～３回の転倒、取組後現在まで転倒なし）
② 対象者の意欲が増し、職員主体ではなくその方が主体となって１日の生活リズムが構築された
③ 歩くことが出来るようになった事で自信がつき、外出や他入居者とのかかわりが増えた

【考察】

入居者の転倒リスクが高い場合、まっ先に車椅子の提案をしているのは実は介護職員なのではないかと思った。そして今回、最初に車椅子にしてしまっていたら見る事のできなかったであろう対象者の笑顔、やる気、体力を再発見することが出来た。

「車椅子を使う事=悪い事」と言いたいわけではなく、介護士=専門職として必要とされている事は、あらゆる場面で複数の選択肢を考えられる知識、工夫をしなくてはいけないという事である。本当にこれなのか、これしかないのか、一人一人の入居者の性格、生活史、既往歴などから最もベストな方法を模索しなくてはいけない。そして日々変わる状態の中でその適切なケアの見極めをし続けていかなくてはいけない。それこそが「有する能力に応じ自立した生活を送る」と言う事だと考える。

テーマ：転倒リスクニ車いす？～歩くことをあきらめない～
発表者：優っくりグループホーム鎌田　瀬戸麻里絵

＜質疑応答＞
Q：９月以降の取り組みは、どのようになりましたか。
A：杖なしで歩けるようになりました。また、一人で、施設周囲も休まず歩行できるようになりました。

Q：今回はうまくいった事例でしたが、医学的根拠や助言はありましたか。
A：医学的根拠はなく、本人の気持ちにより行いました。

Q：カーペットの負担はどのようにしましたか。
A：まず施設にあったカーペットで試行し、その後に、職員からご家族へ、品物の金額や、色や素材などの状態を写メールなどで伝え、その上で、ご家族負担で購入しました。

Q：Ｎ様を見て、自分もやっていきたいという方はいましたか。
A：１名いらっしゃいました。あの人でできるなら私も、と意欲的です。

Q：発表の補足はありますか。
A：Ｎ様はせっかちな性格のため、コンパル使用時にブレーキをかけないことがあります。



カレンダー製作を通して、利用者の主体性を引出せるような関わり方を考える

世田谷福祉専門学校　小林　クリストファー太

介護実習において、介護過程の展開を行い、学んだことを報告する。

対象者は、特別養護老人ホームで生活をする女性利用者A氏であった。A氏は、認知症は無く、ADL は比較的自立されている。余暇活動の時間は、塗り絵、百人一首といったことを行っていた。もともと、社交的で明るい性格であり、施設内では、他に会話のできる利用者がおらず、日中を一人で過ごすことが多かった。こうした場面を見て、A氏に対して余暇の時間をより充実させ、本人の主体性を引出すことはできないだろうかと考えた。日中楽しめるレクリエーションとして、本人の趣味である塗り絵と百人一首を同時にできる作業はないか考えた。また、活動を通して、コミュニケーションをするきっかけを作ることができる、カレンダー製作を考案した。

活動には塗り絵、字や絵を描く作業、話をする時間をそれぞれ設けた。活動時間は1回60分前後、計12回行い、本人の体調に配慮するように心がけた。

実践が始まるとA氏は、塗り絵に没頭し、意欲的な様子が見られた。また百人一首の句を自分から書く姿も見られた。活動中盤より、学生時代の頃を思い出したA氏は、「当時の思い出を絵に描きたい」と話し、自分から絵を描くようになった。さらに、活動後半では実習生とA氏が共同で絵を描くこともあり、徐々に活動を自由に行っていた。一方で体調の変動もあり、体調を崩し活動が進まなかったこともあった。

活動全体を通して、A氏には意欲的な姿が多く見られた。高齢者に対して行われるカレンダー作りの効果として、季節感を味わうことができる、季節の話題やそれに関係する思い出を話すきっかけを作ることができる、日常的に馴染みが深く抵抗なく活動できる、完成したものは居室などに飾れ、それをきっかけにさらに他人との会話も広がるといったことが挙げられる。

そして、活動の参加の有無は、介助者が体調確認を行い、本人が意欲的なときのみ活動を行うなど、配慮した。こうしたことも、効果的な活動をするためにも必要であることが分かった。

テーマ：カレンダー製作を通して、利用者の主体性を引き出せるような関わり方を考える
発表者：世田谷福祉専門学校卒業生　小林クリストファー太

＜質疑応答＞
Q：実習というのは、何日くらいでしたか。
A：約１ケ月です。

Q：百人一首を書くということは、初めから決めていたのですか。
A：想定はしていたが、その時々の体調等に合わせて行いました。元々書道の先生だったので、字にもハネがあったり、絵も凝っていらっしゃいました。結果として、時間になると、腰が痛くても、起きてこられ、楽しみにしていらっしゃいました。

Q：実習として、指導者には何と言われましたか。
A：本人につきっきりで支援できるわけではないので、自分でできることを提供できたことはよかったです。あとは体調面に気をつけて、と言われました。作ったものが部屋にあるので、思い出せることも効果だと気づきました。



第７ブース　　人材育成／チームケア

	発表者	所属	テーマ
1	林　秀幸 鈴木　浩二	等々力の家デイホーム	歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」の3つの目的設定と効果について
2	鳴海　弘将	社会福祉法人奉優会 等々力の家	胃ろうゼロを考えるⅡ ～多職種で支える経口栄養・私達の「STOP！胃ろう」～
3	辻本　きく夫	世田谷区介護サービスネットワーク	介護サービス事業者団体のこれまでの活動と今後の課題

歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」の３つの目的設定とその効果について

発表者：等々力の家デイホーム　林秀幸、鈴木浩二

《１．研究前の状況と課題　》

平成２１年３月に歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」を立ち上げて５年目。登録数約８０名、一日数メートル歩くことを目指す方も、２キロを目標に歩いている方もいれば、距離ではなく歩き方がテーマの方もいらっしゃいます。登録者一人一人にとって、歩行訓練が在宅生活にどのように役立っているのか・・・チームを作って取組み、「在宅生活をサポートするデイ」における歩行プログラムの可能性を考えました。

《２．研究の目標と期待する成果・目的　》

歩行訓練実施者の目的と成果を３つに設定し、それぞれのレベルでの訓練により在宅生活が継続できることを成果と仮定しました。

①体力維持のための歩行訓練

②歩き方改善がテーマの歩行訓練

③生活動作維持向上のための歩行訓練

《３．具体的な取り組みの内容　》

★対象者：歩行訓練目的３グループよりそれぞれ約１名を研究対象者として選定。計４名。

★取り組みの手順：　・目的の設定　・訓練実施と記録
・ご自宅訪問・ご家族ヒアリングによる生活状況把握

★取り組み時間や期間：一回約２０～３０分、週１回～週５回

★取り組んだ職員数や構成
訓練は全職員（介護職１３人　看護職５人　理学療法士１人）にて実施
効果検証はチームにて実施（チーム員：生活相談員１、介護職３、理学療法士１）

★必要とした道具や費用：訓練時、ボール・スポンジ使用。

★活動の成果を出すポイントになった点
・歩行訓練継続の意欲向上施策
遊歩カード　　定期的な表彰式実施　　ホームページ活用

《４．取り組みの結果と考察　》

・歩行距離を維持し、日常生活における活動範囲を狭めず在宅生活を継続出来ている方１名。持病が糖尿病であり、歩行による５～６kgの体重減少も成果と考える。
・体重により歩行訓練での膝痛・腰痛が懸念される方についてはセンター内でもご自宅でもU時歩行器を使用。痛みは消失し、負担なく歩行訓練を継続。転倒なく日常生活動作を維持している。
・歩けるようになることを目標設定した方については、距離を伸ばしたことに加え、ご家族の介助量減少が見られている。

《５．まとめ、結論　》

この取り組みにて活用した歩行訓練の３つの目的は、研究対象者においては概ね仮定通りに達成したと考えます。

今後この考え方を全遊歩倶楽部登録ご利用者に展開し、事業所として在宅生活サポートデイという大きな目標に向かって取組んでまいります。

テーマ　歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」の３つの目的設定と効果について
発表者　等々力の家デイホーム　林秀幸・鈴木浩二

＜質疑応答＞
Q：リハビリ指導は、主に誰が行っていますか。
A：理学療法士と介護職が行っています。

Q：歩行訓練を行う基準は何ですか。
A：まず第一に、本人や家族が希望するかどうかです。

Q：希望者が多いのですか。
A：多いです。外で歩行練習というよりもある程度職員の目があり、安心して利用できるというお気持ちもあるようです。

Q：今までに事故はありましたか。
A：現状、事故等はありません。
希望者が増えてきていることから、今後は転倒事故等のリスク管理が重要になるかと思います。



胃ろうゼロを考えるⅡ～多職種で支える経口栄養・私達の「ＳＴＯＰ！胃ろう」

発表者：社会福祉法人奉優会等々力の家　鳴海弘将

【目的】
当法人では「一人ひとりのその方らしい暮らしを大切にする」を基本理念とし、“口から食べる”事はその方らしい暮らしを守る重要な要素であると考え、入所者の生活質向上のため、病状・嗜好・栄養状態に合った食事を工夫し、更に誤嚥の有無の評価、嚥下訓練の介入、口腔ケアを実践して、現在様々な面から良好な効果を得る事が出来ている。
その中から胃ろうで入所され、「もう一度口から食べたい」とのご希望がある方に対し、経口摂取が可能になるまでを取り組んだ一例を報告する。

【症例紹介】
77歳女性　身長149㎝　体重35.3　BMI15.9　[病歴]脂質異常症、糖尿病、統合失調症。脳梗塞により嚥下障害となり、入所前の3年間は経管栄養のみであったが本人、また家族も経口摂取に対する希望が強く、嚥下テストを頻回に行い実施可能と診断。

【結果】
スプーン３口程度から開始し、摂食状態が良好であったため徐々に摂取回数を上げてゆくことが出来た。
可能な限り本人の希望を聞いていろいろな味を試したり、日常的な話題にしたことで意欲が生じ、摂取量の増加に繋がったと考えられる。
途中尿路感染症による入院もあったが、体調と本人のペースを考慮した事で引き続き経口摂取で満足感を満たす事ができ、本人も食に対する意欲を持続し、結果的に生活質を向上できた。

【考察】
対象者は統合失調症を有していた為、信頼関係を築きながらきめ細かくケアを行った。
経口摂取を始めるにあたり口腔内状態を改善し、嚥下テストの結果から多職種が統一した方針でサポートをし、本人が食に対する意欲を持続できるように努めた。
「自分の意志で食べるものを選び、自分の手で食べる。」食べたい気持ちを叶えることは本人の精神面、訓練への意欲にも影響を与える事を再認識した。
今回の症例は歯科医師、看護師、介護スタッフ、管理栄養士、理学療法士が綿密な情報交換をしながらサポートを続けた結果が大きく、多職種によるチーム介入をしてゆく重要性が示唆された。
現在はまだ摂食・嚥下の訓練段階にあるうえ、経口移行の対象者が少ないため、今後は可能性のある対象者をスクリーニングし検討を進め、より個人に対応したアプローチを実施し、症例数を増やしたい。

テーマ：胃ろうゼロを考えるⅡ
～多職種で支える経口栄養・私達の「STOP!胃ろう」～
発表者：社会福祉法人奉優会等々力の家　鳴海弘将

＜質疑応答＞
Q：海外と比べても、日本は胃ろう術が多いが、どのように考えますか。
A：日本の場合、高齢者、特に、９０歳代半ばの方々に多いように思います。胃ろうがないと栄養摂取が難しく、一度つけた胃ろうをし続けるという現状があります。しかし、「食べたい」という強い意欲がある方には科学的に調査して、今回の事例のような取り組みを試みを今後も実施し、食べる喜びを感じていただきたいと思います。



介護サービス事業者団体のこれまでの活動と今後の課題

発表者：世田谷区介護サービスネットワーク代表　辻本きく夫

設立から現在までの活動

世田谷区介護サービスネットワークは、介護保険法が施行された平成 12 年に世田谷区の支援のもとで「介護事業者連絡会」として発足しました。平成 17 年度からは会費制に移行し、世田谷区社会福祉事業団(現在は世田谷区福祉人材育成・研修センター)が事務局を務めていますが、運営委員中心に自主運営を行っています。平成 25 年末で世田谷区をサービス地域とする 400 超の事業所が加盟しています。

本団体は介護サービスの質向上を最大の目的としており、これまでに研修や講演会などを多数企画運営してきました。介護サービス事業所は中小規模のものが大多数を占め、事業所独自に十分な研修を企画できない状況下では世田谷区の介護サービスの質向上に大きな役割を果たしてきたと自負するところです。

研修や講演会に取り上げたテーマは、移乗・移動、調理、歩行介助、更衣介助、オムツ交換などの介護技術、認知症への対応、高次脳機能障害、リハビリテーション、高齢者に多い病気と薬、ADL 体操、記録の書き方、コミュニケーション技術、接遇、災害対策など多岐にわたります。研修グループ、通所連絡会、訪問介護連絡会、経営部会、災害対策小委、全体会検討小委、広報小委、渉外小委などの部会によって企画運営した研修等の活動は、77（平成 24 年度）を数えました。また、平成 23 年度からは区民を対象とした講演会や映画上映会なども企画運営しております。

良質の介護サービスを提供するということ

高齢者介護に特別な思いをもった事業者と従業者が共にサービスの質向上を目指すために本会は存在します。質向上には従業者のモチベーションを上げるための賃金アップが必要ですが、介護報酬を主な財源とする中で従業者の賃上げは極めて困難な状況です。3 年ごとの制度改正ではとりわけ訪問介護を目の敵にしているかのように、改正の度に報酬を引き下げられ、サービス時間を減らされてきました。平成 24 年度の法改正では通所介護の報酬も引き下げられました。このような事業環境の中で年々介護職員の確保が困難になっています。平成 27 年度の法改正では要支援者へのサービス見直しが検討される中、事業者、従業者は固唾を飲んで行方を見守っています。

事業者団体としての課題

会員数が 400 を超えて区内事業所の約半数を組織するようになりましたが、多くの課題を抱えています。①訪問介護、居宅介護支援、通所介護以外の業種の加盟が少ない。連携のためには他の業種の参加が不可欠です。②運営委員は無報酬であることから、活動は個人の犠牲によって成り立っています。正当な報酬の支払いがないと継続性を保つことは困難です。③将来は公益団体などへの法人化が必要になると思われます。そのためには会費の大幅増が必要ですが、低い介護報酬の中では会員が減ってしまう危険があります。事業者団体として成長を続けるためには、会員に明確な参加メリットを示すことが求められています。

テーマ：介護サービス事業者団体のこれまでの活動と今後の課題
発表者：世田谷区介護サービスネットワーク　辻本きく夫

＜質疑応答＞

Q：介護の現場で人材不足だということですが、現状を説明してください。

A：人材不足は地域によって大きな差がありますが、特に不足しているのは大都市です。東京全体でみると常勤介護職の有効求人倍率は 2.6 倍を超えています。パートでは 7 倍を超えています。世田谷区を管轄するハローワーク渋谷の数字でみると、常勤は 7 倍、パートは 30 倍を超えています。訪問介護などでは同じ時間帯にサービスが集中するのでパート労働者が必要です。現状では 1 人の介護職を 30 以上の事業所が奪い合う状態です。

Q：原因は何ですか。

A：最大の原因は制度から出る介護報酬が低いことです。賃金を上げれば当然にして求職者が増えますが、介護事業所は介護報酬を財源としており、賃上げには限界があります。現在の給与水準は採算割れぎりぎりであり、介護報酬を見直さない限り人材難を解消することはできません。

Q：現在、介護の現場で働いている人たちには不満はないのでしょうか。

A：給料の点では不満があると思いますが、現場の士気が下がることはありません。訪問介護などでは離職率は低く、ネットワークで実施している研修にはいつも大勢の受講生があります。仕事に意義とやりがいを感じている介護職は多いと思います。私達はただ無条件で報酬引き上げを要求しているのではなくサービスの質向上が介護職の社会的地位改善の条件だと思っています。



第８ブース　　スポーツと福祉・健康

	発表者	所属	テーマ
1	中山　進	世田谷区民	バイオリズム表を活用した思いやり対話
2	大河原　裕迪	日本体育大学体育学部健康学科福祉支援専攻	障がいのある人とない人のスポーツ・レクリエーション交流事業 ～世田谷における実践～
3	豊田　キヨ子	あめんぼう	ハダカのおつき合いと地域社会 ～水泳を通して～
4	村上　奈央子	地域栄養サポート自由が丘	地域で活動する訪問管理栄養士の活動紹介とその効果
5	鬼塚　正徳 泉谷　一美	NPO法人せたがや移動ケア	もっと自由に外出を楽しむために/世田谷区福祉移動支援センターの「外出相談」から見えるもの

バイオリズム表を活用した思いやり対話

発表者：世田谷区民　中山進

1．バイオリズムの概要説明

2．バイオリズム表の見方
　　個別表とグループ管理表

3．バイオリズムの利用方法

4．現在の活用対象
　　知的障害の方の教育とリハビリの個別指導と家庭での対話と変化の参考

5．活用の効果
　　双方が「知性」「感情」「身体」の状況を察して優しさと思いやりと
　　愛情を持って対話する効果は大変あります

6．今後は職場での利用を促進して「一日でも長く働き」
　　自立自活することを期待しています

　　（職場全体のコミュニケーションに役立てばありがたい）

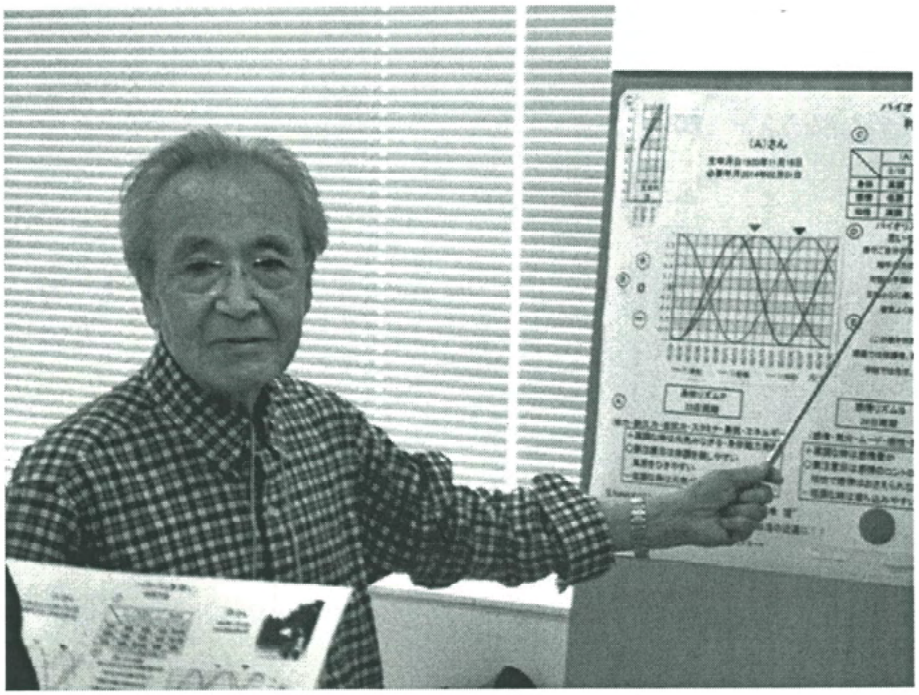
資料（当日配布）　①概要説明書
　　②バイオリズム表とグループ管理表

テーマ：バイオリズム表を活用した思いやり対話
発表者：世田谷区民　中山進

＜主な質疑応答＞
Q：なぜ、バイオリズムを活用しようと思ったのですか。
A：目の不自由な人には点字、耳の不自由な人には手話があります。知的障害の方を支援する道具としてバイオリズムを使いました。

Q：要注意日は、どこになりますか。
A：0に交わっているところです。自動車事故に顕著に出ています。
効果のポイントは、「ゆっくり」が重要です。ゆっくり書く、ゆっくり話すなど、大切なことです。

Q：この表は、どのような所で活用され、またどのくらいの方が活用していますか。
A：全国の生命保険や損害保険会社に、専用のコンピューターを入れていた時期があります。今は気軽に、スマホなどでも活用できます。インターネットで検索し、自分自身のバイオリズムを測ることができます。



障がいのある人とない人のスポーツ・レクリエーション交流事業
～世田谷における実践～

発表者：日本体育大学体育学部健康学科福祉支援専攻　大河原　裕迪

1．目的

障がいのある人とない人のスポーツ・レクリエーション交流事業とは、障がいのあるなしに関わらず、地域で生活を共に過ごす人々が、スポーツ・レクリエーション活動を通じて、共に楽しみ、共に喜びを分かち合い、それを基盤として交流を深め、継続的に集いを続け、日常的にスポーツ・レクリエーション活動を楽しむ仲間作りへとつなげる事業である。

こうした活動が全国で取り組まれることにより、誰もがスポーツ・レクリエーション活動を通じて幸福で豊かな地域社会生活を営むことのできるという、スポーツ基本法の理念を実現することが可能となる。さらに、この理念を通して、共生社会にも寄与できることが期待されている。

2．実践概要

①　参加者

世田谷区に在住・在学の方（年齢、障がいの有無に関わらず）

全5回の集いにおいて、述べ85名（内障がいのある人26名）、スタッフ101名が参加。

②　募集方法

チラシ配布が主、配布先は、日本レクリエーション協会、特別支援学校、特別支援学級、社会福祉協議会、児童館、昭和女子大学、世田谷区教育委員会など。他に参加者による口コミやラジオ（世田谷ＦＭ）による宣伝も行った。

③　プログラム

全5回からなる「集い」の中で障がいのあるなしに関わらず参加できるスポーツ・レクリエーションプログラムを実施し、参加者同士の交流促進を図った。プログラムはその時の参加者や集いの回数により内容や目的を設定。

3．今後の課題

スポーツ・レクリエーション活動は、初対面同士で相手のバックグラウンドを知らなくても時間や場所、楽しさ、喜びを共に分かちあうことができるツールとして有効だと思われる。しかし、集いをただ「楽しかった」で終わらせずその後も継続したお付き合いに発展するためには、お互いのバックグラウンドを知るための仕掛けや工夫、スポーツ・レクリエーション活動以外の活動も併用して実施できると更なる効果が期待できると思われる。

また、これらの活動がより多地域で実施されるために、広報啓発も重要な課題として挙げられる。

テーマ：障がいのある人とない人のスポーツ・レクリエーション交流事業
～世田谷における実践～
発表者：日本体育大学体育学部健康学科福祉支援専攻　大河原　裕迪

＜質疑応答＞
Q：今後の課題を聞かせてください。
A：スポーツは相手を知らなくても楽しめるものですが、自主的継続的に行うには、相手をよく知る必要があります。

Q：上肢に障がいのある人や高齢者が楽しめる種目はありますか。
A：そのスポーツの中でどうしたらその人ができるか考えるので、種目ありきではありません。

Q：馴染みの種目を使わなかった理由は？
A：アイスブレークだけには使用しようと思いましたが、知っているつもりの種目では飽きてしまいます。知らないものには、わくわくします。

Q：ゲーム後に、みんなでのフォローはしますか。
A：毎回作戦タイムを行います。



ハダカのおつき合いと地域社会
～水泳を通して～

発表者：あめんぼう　豊田キヨ子

区立太子堂中学　温水プールで、３歳から高齢者の方々までの泳力別水泳教室を１９８２年から実施し、３０年以上が過ぎた。
誰でも気軽に参加出来、安全で楽しいコミュニティづくりをめざした会で、保護者も運営に協力し、子どもたちの自立への手助けをしながら、生涯スポーツへと三世代でかかわっている方たちもいる。

毎週１回のレッスンと年２回の記録会などを行い、家族、コーチ、スタッフなどが励まし合いながら、コミュニケーションの場ともなっている。子どもも大人も心身ともにバランスのとれた人間づくりをはじめ、そしていじめのない明るい社会づくりも心がけている。子どもの時から運動不足を解消し、足腰をきたえる人、或いはリハビリをするなど　医療費の削減にも寄与しているのではないかと思う。

過去には指導員の養成もし、社会福祉などの施設へは必要とされるお金、衣料品、お米などの寄附もしてきた。

これからはリハビリ、体力づくりのために水中ウォーキングなど他のスポーツもとり入れて、いろいろな方のニーズに応えていければとも願っている。「あめんぼう」で泳いだり、知り合った仲間がたまに集う場が出来れば、地域社会の輪も老若男女を問わず拡がっていくと思われる。

さらに不要品で使える物を持ち寄り、分かち合う「もったいない広場」をつくればエコなくらしに役立つことになると期待している。

又、身体の不自由な方達のリハビリとしての水中運動を研究したり、幼児の水泳指導の研修などについても国の内外から資料、勉学の機会を得たいとも願っている。

残念なことに最近世田谷区が施設使用料の値上げをした。シニアと子どもが多い私たちの会では、個人利用の倍の料金を払わなければならない現状に苦慮している。社会情勢の変化で、民間のスポーツ施設が増え、口コミのＰＲだけでは限界を感じている。今後は官民が協力し合ってよりよいコミュニティづくりのための方策を打ち出せればと切に願うものである。

テーマ：ハダカのおつき合いと地域社会～水泳を通して～
発表者：あめんぼう　豊田キヨ子

＜質疑応答＞
Q：今、何人くらいが来ていますか。
A：火曜夜と水曜で、合わせて１００人くらいです。元あめんぼうのお母さんもコーチの資格をとったりして活躍しています。コーチの研修とかを、日体大などとコラボレーションできるといいなと思います。

Q：３０年以上続けるというのは、すごいことですね。教え子が母親になって、また子どもを連れてくるように、地域のつながりってすごいですね。認知症の方にとっても、いろいろな方とのコミュニケーションは大変重要だと思います。今後の予定はありますか。
A：この他にも、" もったいない広場" 的なこともしてみたいです。水着でもなんでも持ち寄り、ご自分が不要な物で他人が必要とする物を、お金を介在させずに、地域の方とのコミュニケーションが図れたらと思います。



地域で活動する訪問管理栄養士の活動紹介とその効果

発表者：地域栄養サポート自由が丘　　村上奈央子

１．はじめに

在宅で医療・福祉のサービスを必要としている方の中で糖尿病や腎臓病、脂質異常症など食事療法を必要とする人は少なくありません。また、気付かぬうちに食が細くなり低栄養状態になる事もあります。毎日の食生活を正しい栄養サポートのもとで楽しいものにしていく事は在宅で生活を続けていく方々にとって大変重要な事です。

本発表では、訪問栄養食事指導を専門とする居宅療養管理指導事業所「地域栄養サポート自由が丘」の紹介と、地域活動に管理栄養士が関わる事によって住民のQOLが改善した事例を発表します。

２．活動内容

奥沢にある木下皮フ科医院内に事業所を構える「地域栄養サポート自由が丘」では地域で暮らす方の食生活や健康状態がより良いものになるよう、以下のような活動を行っています。

・介護保険の訪問サービス「訪問栄養食事指導（管理栄養士による居宅療養管理指導）」
・地域のクリニックへ出向いて行う「外来栄養食事指導」
・地域の高齢者を対象に行う「介護予防教室講師」や「いきいき講座講師」
・地域の住民を対象に行う「食育講座講師」

３．活動評価

主な活動である訪問栄養食事指導では、食事療法を必要とする疾患をお持ちの方や様々な理由で低栄養状態になってしまった方のお宅へ訪問して、ご自宅での生活をしっかりお伺いして嗜好や食べる時間、食べられる量も考慮し、完全オーダーメイドで食事に対するお困りに対して提案をします。栄養指導というと“制限”されるイメージがある人も多いのですが、その人らしい生活を重視した提案を行いますので『食べられるものが増えた』『家族と外食へ行けるようになった』『入院の頻度が減った』といった在宅療養生活のQOL改善へと繋がっています。また、地域に住む高齢者や住民を対象にした栄養教室の講師では栄養に関する情報が溢れている中で介護予防や疾病予防になるよう正しい知識を身に着けていただくための講話をしています。参加者の方からは『新しい事を知ることが出来たわ』『出来ていると思っていたけど違ったのね！』『間違って覚えていたよ』など好評をいただいています。

４．今後の課題

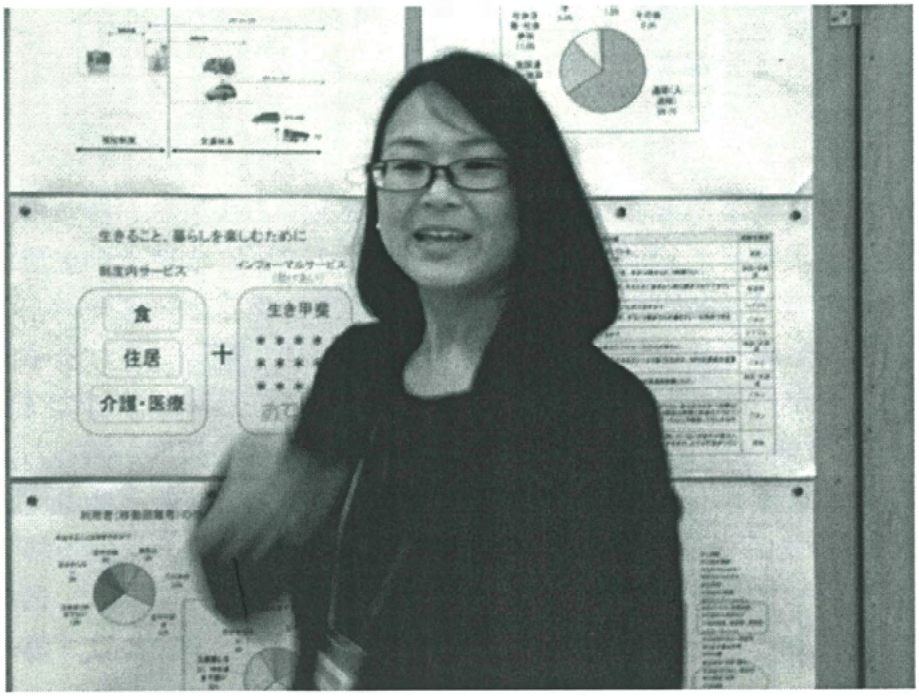
地域で活動する管理栄養士の存在は人数が少ない事もありまだあまり知られていません。管理栄養士に食事の相談をする事で、より楽しく在宅療養をしたり地域でより元気に暮らしたりできる事を多くの方に知っていただきたいです。

テーマ：地域で活動する訪問管理栄養士の活動紹介とその効果
発表者：地域栄養サポート自由が丘　村上奈央子

＜質疑応答＞
Q：食べる意欲を無くした方への対応は？
A：お話を十分に聞き食べられなくなった原因を探りながら、提案をしていきます。

Q：嗜好などに対する指導はしますか。
A：嗜好を考慮した上で、食材を含めて状態改善のための提案をします。

Q：嫌いなものがあったときは、どのように対応しますか。
A：嫌いなもの以外で、必要な栄養が摂れるよう提案します。



もっと自由に外出を楽しむために／
世田谷区福祉移動支援センターの「外出相談」から見えるもの

発表者：NPO 法人せたがや移動ケア　鬼塚正徳、泉谷一美

1．はじめに

世田谷区福祉移動支援センター（運営：せたがや移動ケア）は、外出に困難を抱える方々からの車を使用したおでかけの相談を受けています。相談の大半は、命を守るための通院や入退院に関する送迎サービスに関するものですが、今回はこれらの中から、福祉・健康の視点で外出のニーズやサービスの様子を報告します。

2．そとでるの相談業務

いままで元気に普通に暮らしていたお年寄りが急に歩けなくなった時、居室から屋外へ、そして病院へ行くのにどうしたらよいか、外出に困難を抱える家族と一緒に温泉や、遠くの親族のところへ出かけるには、どんな方法があるのか、どんなサービスがあるのか等の問い合わせに対して、現在の制度や担い手のサービス内容、料金などの情報を提供し、おでかけをサポートしています。また、利用した送迎サービスの事業者（介護タクシーやＮＰＯ）から思ったより高額な料金を請求されたとか、乱暴な運転をされたとかの苦情を受け止めながら、その内容を検討し、事業者に改善を求めながら送迎サービスの向上を目指しています。

3．おでかけと健康

都市環境のある世田谷区でも、心身の状況から外出に困難を抱える方々は、通院やデイケアなどの外出を除けば、友達に会ったり、会合やお祭りイベントなどのいわゆる社会参加の機会が極端に少なくなっています。心身を健康に保ち、家族とともに豊かに暮らすためには、居宅に籠ることなく、買物や散歩、知人に会うことなど、おでかけを主体的に楽しむことが必要です。そのおでかけを容易にするためにそとでるでは、相談をはじめ様々な外出支援に取り組んでいます。

4．今後の課題

健康を持続するためのおでかけを促すために、そとでるでは受け身の相談対応だけでなく、制度施策を含めた外出環境の改善整備や、積極的にお出かけを促す事業活動が必要と考えています。

- おでかけを支援する情報提供力の向上
- おでかけを促す積極的な情報提供、ＰＲ
- おでかけの目的となるイベントの開催（ex：日帰りツアー、クリスマス会）
- おでかけ支援の新しい担い手の育成
- おでかけに困難を抱える方々の意識，ニーズ調査

誰もが自由に外出し移動できる
世田谷にするために

そとでる
世田谷区福祉移動支援センター

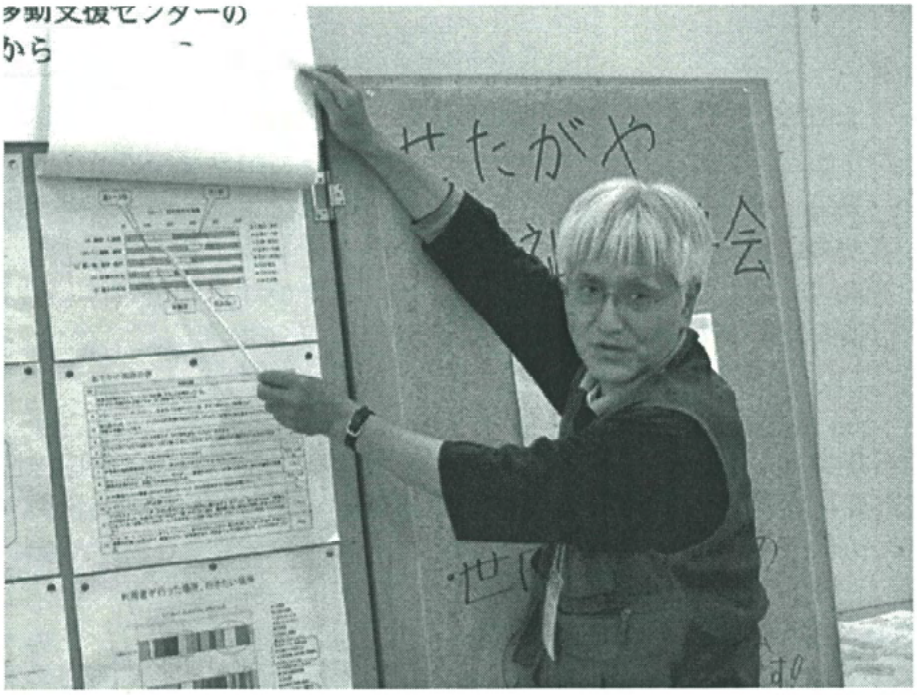
〒156-0056　世田谷区八幡山 1-7-6
TEL：03-5316-6621
FAX：03-3329-8311
info@setagaya-ido.or.jp
http://www.setagaya-ido.or.jp/htdocs/

テーマ：もっと自由に外出を楽しむために／
　　世田谷区福祉移動支援センターの「外出相談」から見えるもの
発表者：NPO 法人せたがや移動ケア　鬼塚正徳、泉谷一美

＜主な質疑応答＞
Q：外出が困難な方々の理由には、どのようなことがありますか。
A：ご本人の身体の状態や、介助者の確保、経済的な理由などです。

Q：外出時の介助はどの程度必要とされていますか。
A：区内ではバリアフリーの家が少ないこともあり、介助が必要な場合は、見守りも含めて外出送迎全体の４０％以上です。

Q：送迎付きおでかけイベントは、どのような料金設定になっているのですか。
A：「みんなでＴＶを見ながらのサッカー観戦」は、送迎付きで千円。イベント毎に料金を決めます。



資料掲示一覧

1　人と人とのつながり・福祉文化			
	展示発表者	所属	テーマ
ア	遠藤　慧 西堀　圭介	世田谷区社会福祉協議会	東日本大震災による区内避難者への支援で見えてきた現状と課題 ～世田谷区社会福祉協議会が実施する「避難者の孤立防止事業」をとおして～

2　障がいの理解			
	展示発表者	所属	テーマ
ア	田坂　知樹	サポートステーションさいとう	感情表現を促すためのAAC(補助代替コミュニケーション) ～脳性まひによる肢体不自由者の事例～
イ	甲斐　実	世田谷区立下馬福祉工房	立ち直る姿を導く
ウ	村瀬　精二	社会福祉法人樫の木会	新しい価値に気づく
エ	下國　君子	世田谷区立下馬福祉工房	身勝手に見えるAさんの心情理解の視点

3　子どもの発達／人権			
	展示発表者	所属	テーマ
ア	田邉　仁重	世田谷区社会福祉協議会	世田谷区社会福祉協議会が提案する切れ目のない支援について ～あんしん事業・成年後見制度・任意後見契約～

5　認知症ケア			
	展示発表者	所属	テーマ
ア	瀧村　悦久	デイホーム三宿	デイサービスに通うことにより生活に意欲が持てるようになった事例

6 高齢者支援			
	展示発表者	所属	テーマ
ア	谷　義幸	デイ・ホーム松原	利用者の声から始まった新たな試み
イ	関　勝之 中島　和子	デイ・ホーム奥沢	地域開放事業の展開 ～元気な奥沢街づくりClub For　優～
ウ	長島　正明 相内　五十美	優っくりデイサービス喜多見	その介護と医療「明日への架け橋」
エ	渡辺　孝行 内藤　麻里	奥沢あんしんすこやかセンター	地域の社会資源を活かした介護予防の取り組みについて ～介護予防強化推進事業を通した取り組み事例～
3	三友　一仁	世田谷区立特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	生きる力の支援の取り組み『外出会』編 ～入所者の「思い」に応える外出会～

7 人材育成/チームケア			
	展示発表者	所属	テーマ
ア	田島　和美	世田谷区立下馬福祉工房	自己覚知の点から親の思いを考える

東日本大震災による区内避難者への支援で見えてきた現状と課題
～世田谷区社会福祉協議会が実施する「避難者の孤立化防止事業」を通して～

世田谷区社会福祉協議会　遠藤慧、西堀圭介

1．事業目的

東日本大震災により避難されている方々の身近な地域での顔の見える関係づくりの促進や、生活ニーズの把握および相談対応、地域イベントや福祉サービスの情報提供等を通して、世田谷で少しでも安心して生活できるような環境づくりを行う。

2．避難者の現状

（1）区内避難者数の推移　※平成２５年９月時点で社協が把握している数

	全数	社協把握数
平成２４年３月	４００人（260 世帯）	９９名（47 世帯）
平成２５年９月	３０５人（195 世帯）約 25%減	８９名（43 世帯）約 11%減

※社協が把握している個人情報のほとんどは、都が実施しているアンケート調査で情報提供に同意した方。

（2）出身地【社協把握数の内訳】　《約８割が福島からの県外避難者》

福島７１名（80.5%）　宮城９名（10.1%）　岩手３名（3.1%）　茨城２名（2%）　未確認４名（4.3%）

3．事業内容

○ 個別訪問・電話等による生活ニーズの把握と相談対応
○ サロン・地区社協事業等地域活動への参加促進、福祉サービス等情報の提供
○ 避難者同士および区民との交流の場づくり

4．見えてきた課題

（1）避難者の抱える課題

避難生活の長期化に伴い、孤立、借金、ＤＶ、就労、住居の問題や、賠償問題等により住民票を移せない方は、一部区民としての福祉サービスが受けられない（シルバーパスなど）など、様々な生活課題が出てきている。

（2）社協の抱える支援上の課題

避難者が区内に点在しているため、日常的な当事者同士の交流機会作りが困難。また、情報開示を受けていない方々の中にも、特に一人暮らし高齢者の場合は生活状況の悪化が懸念されるため、実態把握をどう進めるか。

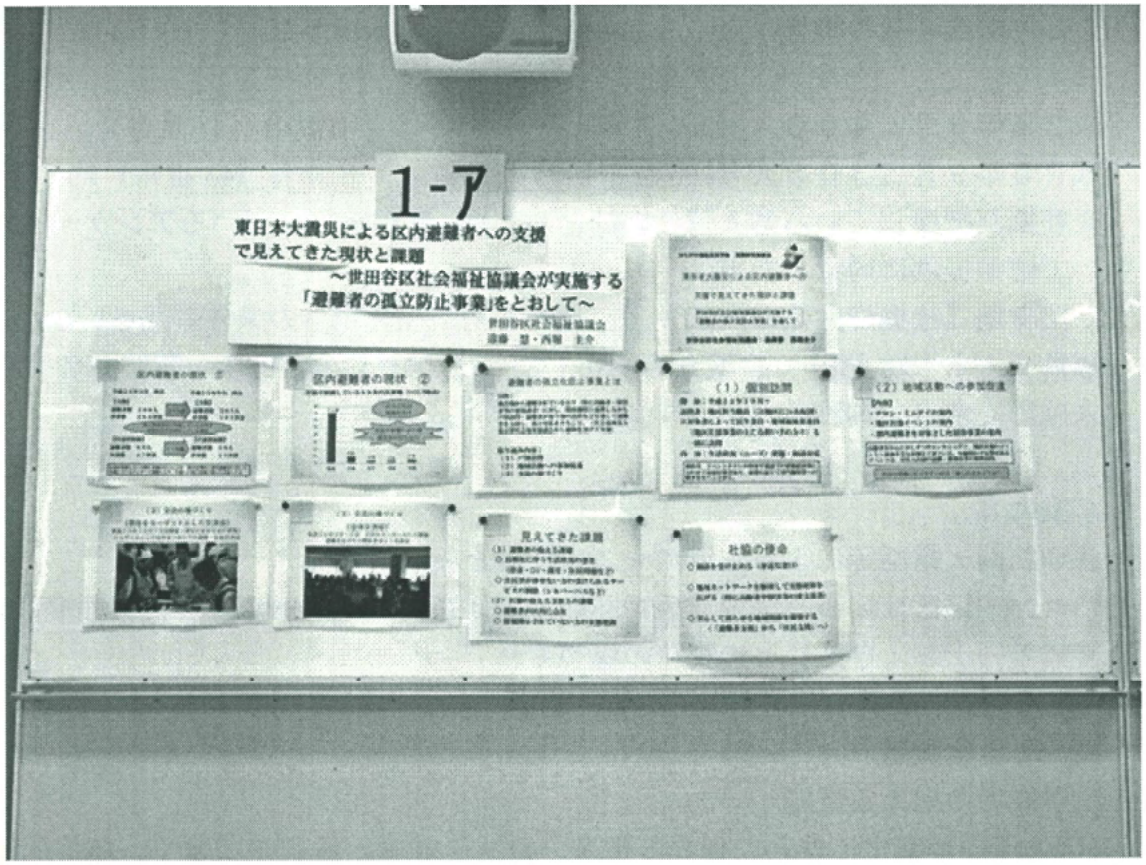
5．社協にできること（しなければならないこと）

○ 安心して相談を寄せられる、身近な相談窓口になる
○ 地域ネットワークを駆使して避難者の実態把握を広げる
○ 避難者と区民のつながりを作り、安心して世田谷で暮らせる人間関係を構築する

資料掲示　1ーア

テーマ：　東日本大震災による区内避難者への支援で見えてきた現状と課題
～世田谷区社会福祉協議会が実施する「避難者の孤立防止事業」をとおして～

展示発表者：世田谷区社会福祉協議会　遠藤慧、西堀圭介



感情表現を促すためのＡＡＣ（補助代替コミュニケーション）
～脳性まひによる肢体不自由者の事例～

サポートステーションさいとう　　田坂 知樹

はじめに

言語障害や認知障害によりコミュニケーション（以後 COM）に支障がある場合、AAC を用いる。著者の担当するＡさんは文字盤などの AAC を用いての短い発語があるものの数字と名詞を組み合わせたものが多く、言葉で感情表現をすることがなかった。Ａさんには泣く、笑うなど様々な表情があるのにもかかわらず、それを言葉で表現できないために気持ちを伝えることができなかった。そこでＡさんの COM をさらに充実させる為には言葉による感情表現が必要であると考えた。

目的

Ａさんの言葉による感情表現を促すことにより、Ａさんの COM をさらに充実させる。Ａさんの使用する AAC は文字盤とトーキングエイドである。比較的自由度の高い文字盤を工夫することにより、Ａさんの言葉による感情表現を促すことができると仮定する。

方法

対象者：Ａさん。脳性麻痺による四肢体幹機能麻痺（1 種 1 級 区分６）。理解・計算・学習などの分野において認知機能が低いため成年後見制度を利用している。両側感音性難聴。50 代前半。

期間：2010 年 8 月～現在。

方法：文字盤を工夫する。

① 文字盤に形容詞と絵文字を加える。
（2010 年 8 月～2011 年 6 月）

② 文字盤に形容詞と形容動詞、未来形や過去形の形容詞、擬態語、絵文字を加える。
（2011 年 6 月～2011 年 10 月）

③ 文字盤の裏側に絵文字盤を配置。絵文字盤に Droplet Project にて配布されているドロップスといわれるシンボル（絵文字）を 91 個使用。
（2011 年 10 月～2012 年 8 月）

④ 絵文字盤のドロップスを 42 個に減らし、ポジティブ・ネガティブで色分けをし、さらに使用例を穴埋めの問題のように配置した。
（2012 年 8 月～2013 年 2 月）

⑤ 絵文字盤の使用例を無くし、ドロップスを 78 個使用。
（2013 年 3 月～現在）

結果

①の文字盤を使用している期間、『嬉しい』と何度か話した。②の期間では会話の中で『楽しかった』『面白かった』と話した。③の期間では新たな感情表現は生まれなかった。絵文字盤をジーッと見つめることが増えた。④の期間では新たな感情表現は生まれなかった。使用例も使わなかった。⑤の期間では『懐かしい』を使うことがあった。『**さん 嫌い ダメ』『お茶 不味い』『〇〇さん 好き 美女』と自発的に話すことがあった。

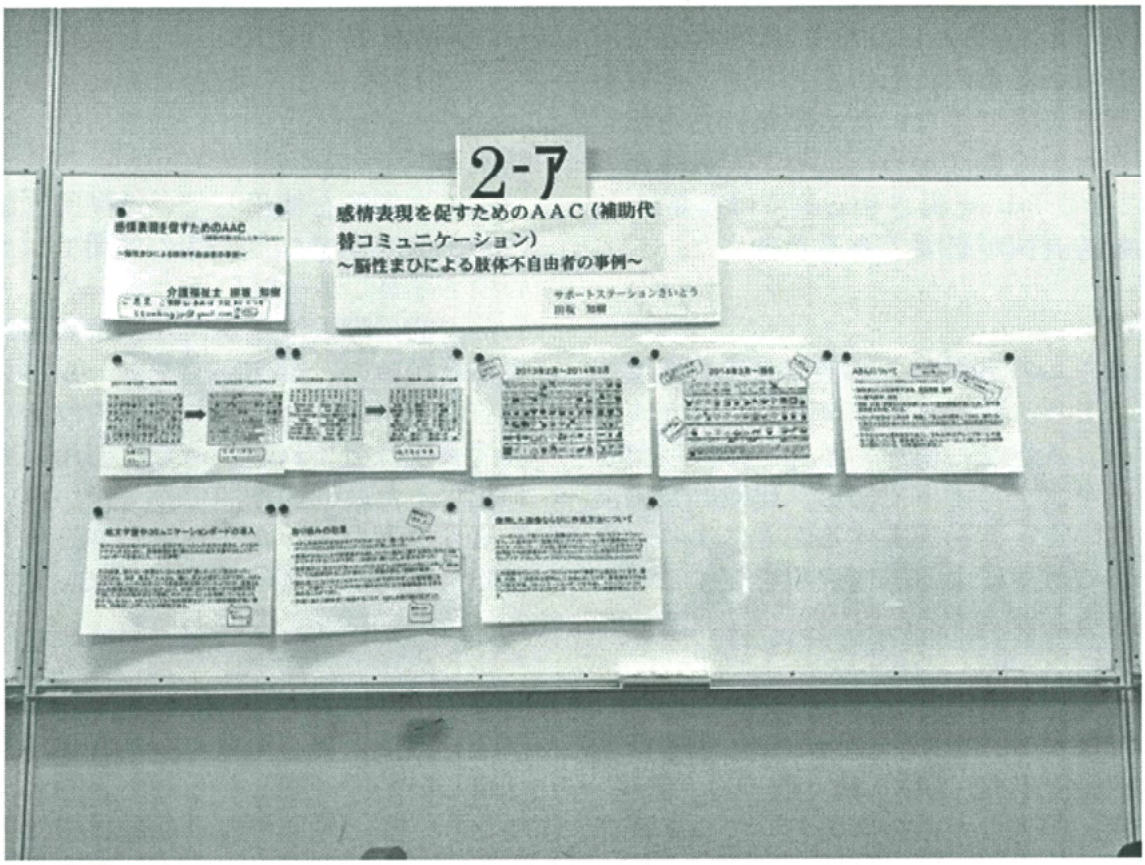
考察

全く感情表現をしなかったＡさんが『嬉しい』や『楽しかった』と話すようになり、⑤の期間では自発的に感情表現することもできた。以上のことから文字盤を工夫し絵文字盤を使用することにより、Ａさんは以前に比べ感情表現ができるようになったと言える。

結論

数字と名詞の組み合わせによる会話ばかりだったＡさんが、『嬉しい』や『好き』など感情を伴う会話をするように変化したことは、Ａさんの COM を充実させるための一歩となった。今後は継続的に絵文字盤の工夫を行っていくことと、より適確な AAC の工夫を行うための ST など専門職との連携が課題としてあげられる。

資料掲示　２－ア
テーマ：　感情表現を促すためのＡＡＣ（補助代替コミュニケーション）
　　～脳性まひによる肢体不自由者の事例～
展示発表者：サポートステーションさいとう　田坂知樹



立ち直る姿を導く

世田谷区立下馬福祉工房　　甲斐　実

１、はじめに

意に沿わない指示へのふて腐れ、反発の強さからくる周りとのトラブル。また、高校生から喫煙習慣があり、生意気さを示していた。深夜型の生活リズムで、出勤の遅れ、居眠りが常であった。

一方で、分からないこと・苦手なことに対しては消極的だが、好きなことに対しては、積極的に楽しめ、弁えがなくなる程の子供っぽさもみせていた。

２、事例プロフィール

20代、男性　愛の手帳２度　知的障害

３、基本的な支援方針

（１）反発を誘発しない　（２）青年期心性を理解する

この二点を基本に、受容的な対応をしていくことで「関わりにくさ」を誘発しない。

４、支援の経過

４月から担当が変わる。誰にでも気さくに話しかけ、気のいい青年の姿を見せる一方、新しく出会う担当に対して拒否、反発、折り合えなさ、頑なさを不思議に思う。前担当と同じ内容の事柄を同じような伝え方をしても、受け止められない彼の姿があった。前担当からの方針を踏襲して付き合ってきた。

５、エピソードから彼の心情を洞察する

（１）①「相手にされず、怒るが・・・」(H25.11.1)

朝アイサツをしたいと思い、声をかけにいった仲間が面談中でばっさり断られる。また、昼食中に声をかけた別の仲間は機嫌が悪く、怒鳴られてしまう。午後からの作業には、約束の時間に間に合わず、担当に「アウト」の宣告をされてしまい、受け止めきれずに怒り出してしまう。大声を出し、椅子を投げる、壁を蹴る。作業室の隅の床に、腕組みをして座り、怒っているポーズを見せる。間合いをとることで、ほどなく、仲間に次々と「大丈夫？」「そんなに怒らないで」と声をかけられ、少しずつ表情も和らいでいく。周りでは、いつものメンバーがいつも通り、楽しそうに仕事をしている姿をみて、はじめに声をかけてくれた仲間の隣で作業を開始する。

②エピソードの解釈

相手の立場を考えず、自己中心的な面を見せる今の姿。反発を見せるが、深追いをしない、間合いをとることでエスカレートせず、仲間の支えを受け入れて立ち直っていく。プライドという青年期心性を尊重することがポイントであった。

６、立ち直る土壌とはなにか

（１）深追いしない

課題を課題として突きつけられることを避ける

（２）時間経過を大事にする

性急に結果を求めない

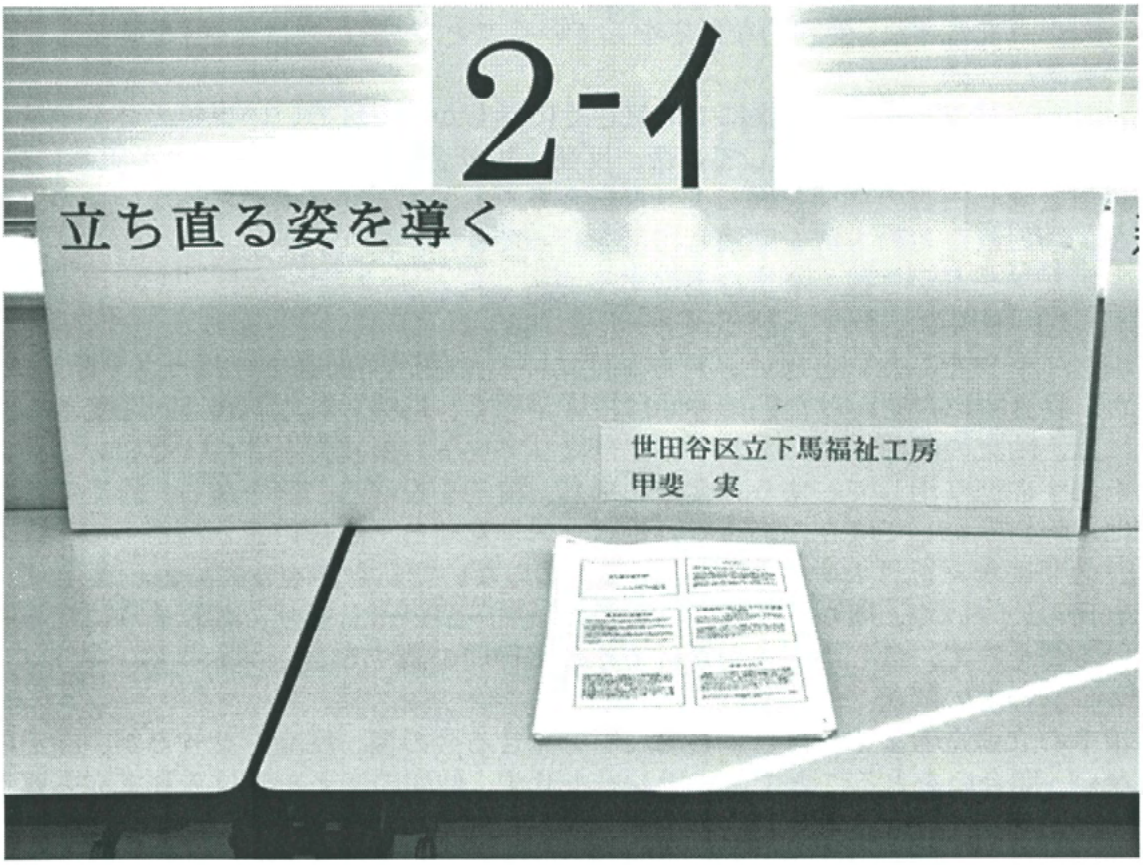
（３）仲間関係を持つ

周りからの応援

（４）自覚を促す

自分のするべきことが明確になる

資料掲示　２－イ
テーマ：　立ち直る姿を導く
展示発表者：世田谷区立下馬福祉工房　甲斐実



新しい価値に気づく

社会福祉法人樫の木会　村瀬精二

支援がらみで気になっていることの一つに、障害があるからこそ生まれる価値がある、との思いだ。障害があることは生き辛い、大変だ、苦労だ、等マイナスの捉え方が多い。しかし、障害、できない、分からないことが社会的価値がないということではないだろう。

●いろいろな方と関わっている日々

Aさんは28歳、車椅子、障害程度区分6の方である。送迎バスの乗降車、施設に着いて身支度、トイレ、移動、朝のマット移乗でのストレッチ、通常プロのあれこれ、食事・ミキサー食、医療的ケア・水分注入等々、一日の中で多くの方と関わって、支援を受けている。担当職員に加えて受入やストレッチなどで幅広く職員が順次担っている。行き交いながらの声かけや、ちょっとした立ち話的なことも・・・。

●受動的だが周りに影響を与えている

これらはどの場面を切り取っても受動的な関係であるが、現実生活の中で、毎日こうした関わりが生まれている。彼女から見ると、いろいろな刺激を注ぎ込まれている、これが彼女の暮らしである。

振り返ってみると、彼女のコンデションによって喜怒哀楽が表現され、それを受けた周りは［機嫌がいいね］［疲れているのかな？］と感じ取り、関り方を加減する。一方で、周りの関り方によって彼女の受け止め方が違ってくる。手慣れた援助で気持ちよく安心感に浸れたり、上手にやってもらえないと苦痛であったりする。ここでも、そのリアクションを受けて、周りは［こんな感じでいいのかな？］と工夫する。

受動的に始まっているが、自らの喜怒哀楽により周りの気持ちに影響を与え、［こうしてみよう］との心配りを引き出している。自分に関与する周りを変えているのだ。

●いろいろな方との関りは社会性豊かな暮らし

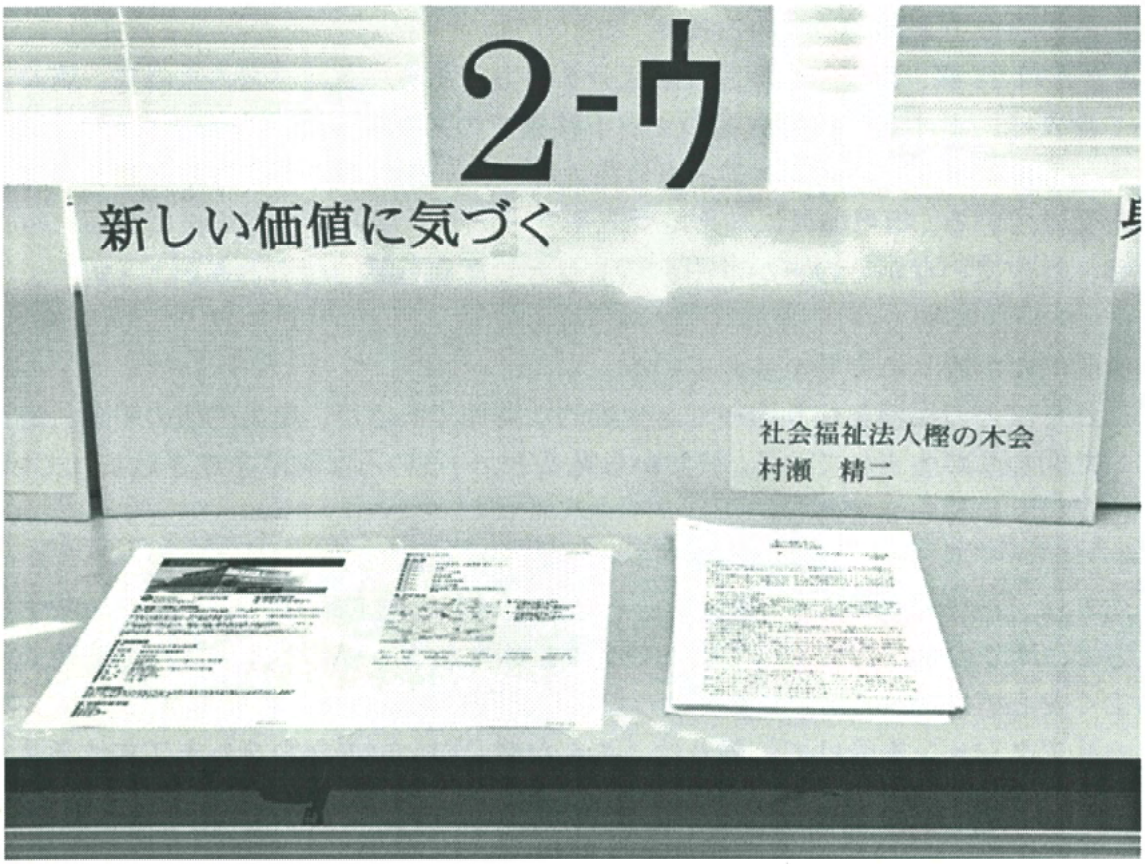
こう考えると、単なる受動的な暮らしではない。介助と言う濃密な関わりを媒介に援助者の心情を揺り動かしている。［これがイヤ、これがいい］と喜怒哀楽で自己表現し、それを受けて周りは［こうしてみよう］との関わりの工夫を促される心情になる。感情は本来的に関わる人に同様の感情を誘発させるエネルギーであるだけに関係の機微を引き起こす。その点で社会性豊かな暮らしといえる。

喜怒哀楽は私の今を表わす自己表現であるから、この点に着目すると本人の主体に気づけ、主体性の実現という本人の暮らし、また支援の質を高めることになる。

●新しい価値に気づく

私の気持ちは周りから注ぎ込まれて形作られ、一人ではなく関係のなかにある。だから、素朴な感情を媒介にして無意識的であろうが結果的に周りに働きかけて、その関係が生活を潤している。受動的に見える姿が実は能動的な姿に捉え直されてくる。

資料掲示　２－ウ
テーマ：新しい価値に気づく
展示発表者：社会福祉法人樫の木会　村瀬精二



身勝手にみえるＡさんの心情理解の視点

世田谷区立下馬福祉工房　　下國　君子

事例のプロフィール
１．４０代女性　　２．在宅　　３．知的障害　　４．愛の手帳３度

１．これまでの経緯

自分なりのべき論による正義感が強く、人に対して強く求め過ぎてしまう。加えて触覚過敏による付き合いづらさを背景にした自己防衛もあって、「嫌い、つまらない、くだらない」などの理由で行事を拒否する。

一見、身勝手と思われがちなＡさんと付き合う中で、これまで人から多くを求められ続けた結果なのでは・・と推測された。そこで、求め過ぎないことを前提に、「そうなんだね」と寄り添い、「それでよし」という姿勢で付き合っていくことで、素直さが生まれてきた。

２．　最近の様子

①工房で日常的に変わってきたこと

実習でお客様とのコミュニケーションの型が身に着いたこともあり、自ら会話を求めてくるようになる。

②積極性が出てくる

拒否的だった行事にも「このコーナーだけなら・・」「この発表だけなら・・」と消極的だが参加するようになる。また参加したことで上手くできた実感を味わえるようになる。

③チャレンジする気持ち

実習先に配慮してもらったことで実習が高評価で終われたこともあり、次のステップとして、自分が周りに合わせることを目標として実習することを決める。

３．変容の要因をどう考えるか

①求め過ぎないこと

常識的な視点に立つと、べき論が先行し、つい求め過ぎてしまうため、それが反発につながってしまう。そこで、求め過ぎないことを前提に肯定的な関わり方を徹底することで、付き合いやすさが高まってきた。

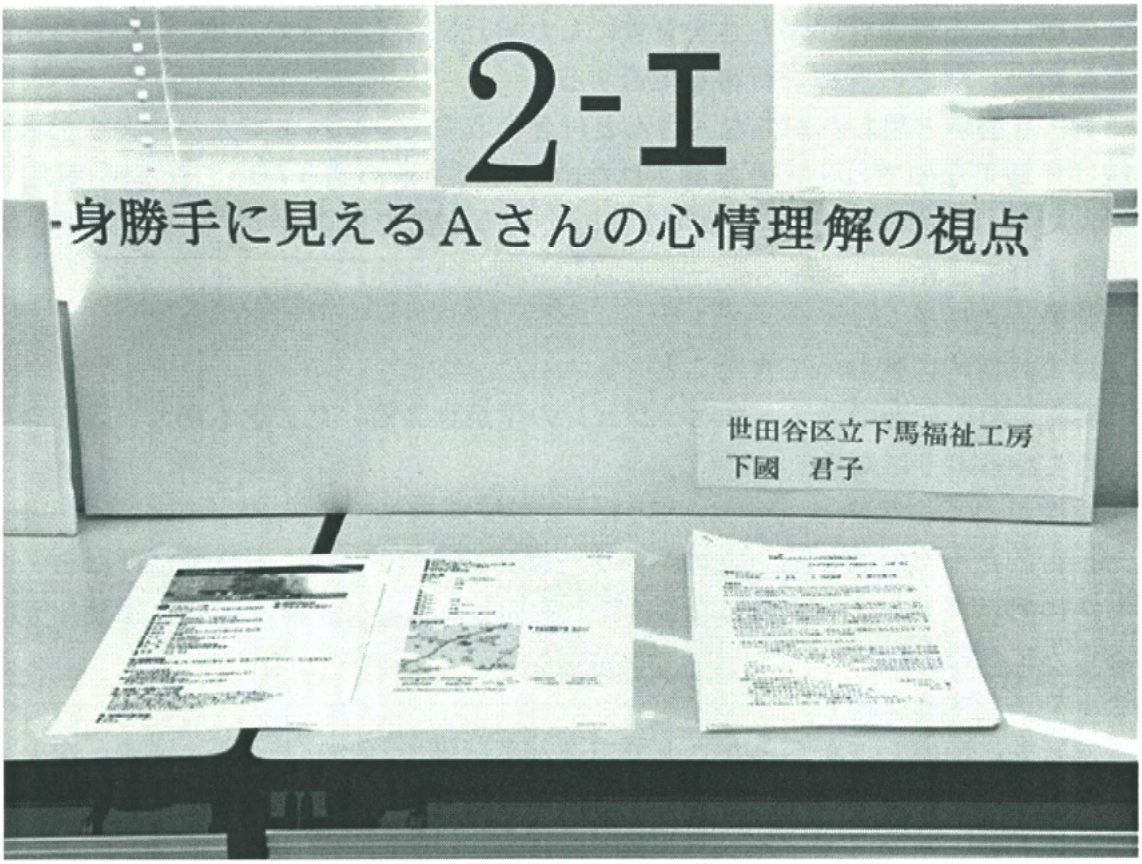
②日常会話等付き合い方の配慮

自分流のべき論が強く出てしまうこともあるが、それを指摘せず、「それでよし」とみとめるスタンスを続けてきた。相手に指摘されないことで安心感が生まれ会話もスムーズになってきた。

４．おわりに

人との関わりがスムーズになり、積極性も出てきたとはいえ、自分なりの「べき論」が強く、時にはトラブルになることもある。しかし、求め過ぎないことが重要であるため、これからも付き合い方の原則として踏まえていく。

資料掲示　２－エ
テーマ：身勝手に見えるＡさんの心情理解の視点
展示発表者：世田谷区立下馬福祉工房　下國君子



世田谷区社会福祉協議会が提案する切れ目のない支援について
～あんしん事業・成年後見制度･任意後見契約～

世田谷区社会福祉協議会　　田邉仁重

１．認知症、知的・精神的な障害を持つ方々の抱える生活上の課題

社会福祉協議会の成年後見センターが受けた相談から、次の課題が出てきた。

○高齢、認知症のために、自分で日常生活上の様々な手続きができなくなり、電気や電話、年金などのライフラインが止まってしまった。

○個人情報保護や振り込め詐欺など犯罪防止のために、金融機関等の本人確認が厳しくなり、本人が手続きできない場合は、成年後見人の選任が必要になった。

○日常のちょっとした手助けはもとより、人生最期の葬儀を託す親族がいない。

これらの課題解決のために、本人の人生に寄り添い、法的な権限を持って支援を行う公的な仕組みが、セーフティネットとして必要であることがわかった。

２．世田谷区社会福祉協議会が提案する切れ目ない支援

社会福祉協議会は、３つの制度で人生の最期まで寄り添う支援を実施している。

（１）あんしん事業（地域福祉権利擁護事業）：契約件数　延 216 件

高齢者や障害を持つ方が、自分ひとりで日常生活上の手続きをすることに不安を覚えたとき、金銭の払い出しが出来なくなったときなどの相談や支援を行う、社会福祉協議会が提供する第２種福祉サービス。症状が進行した場合は、法定後見制度へつなぎ、切れ目ない支援を行う。

（２）法定後見制度：受任件数　延４７件

自分で日常生活上の手続きや契約、財産管理などを行うことが難しいと医師に診断された方の成年後見人を、社会福祉協議会が家庭裁判所から選任され、受任している。家庭裁判所の監督を受け、法的代理権を行使して、本人がその人らしく安定した生活ができるよう、福祉サービス契約や財産管理を行う。

（３）任意後見契約：契約件数　延４件

予め、自分が認知症等になった時のことを想定して、将来の生活上の希望をまとめておき、任意後見人を社会福祉協議会に依頼したい方と公証役場で公正証書を作成し、任意後見契約を結んでいる。契約当初は、見守りのための定期訪問を行い、認知症等になった場合には、家庭裁判所が選任する任意後見監督人の監督を受けながら、任意後見契約に基づき支援を行う。

３．住民に信頼される事業実施体制の構築

個人の人生に深く関わる支援のため、畏れを持って確実に事業を実施しなければならない。あんしん事業は東京都運営適正化委員会、成年後見制度は家庭裁判所が、当社会福祉協議会を指導監督することが法に定められている。次年度には、当社会福祉協議会の第三者委員会を再編し、利用者の権利擁護の一層の強化を図り、セーフティネットとして住民が安心して利用できる事業実施体制を構築する。

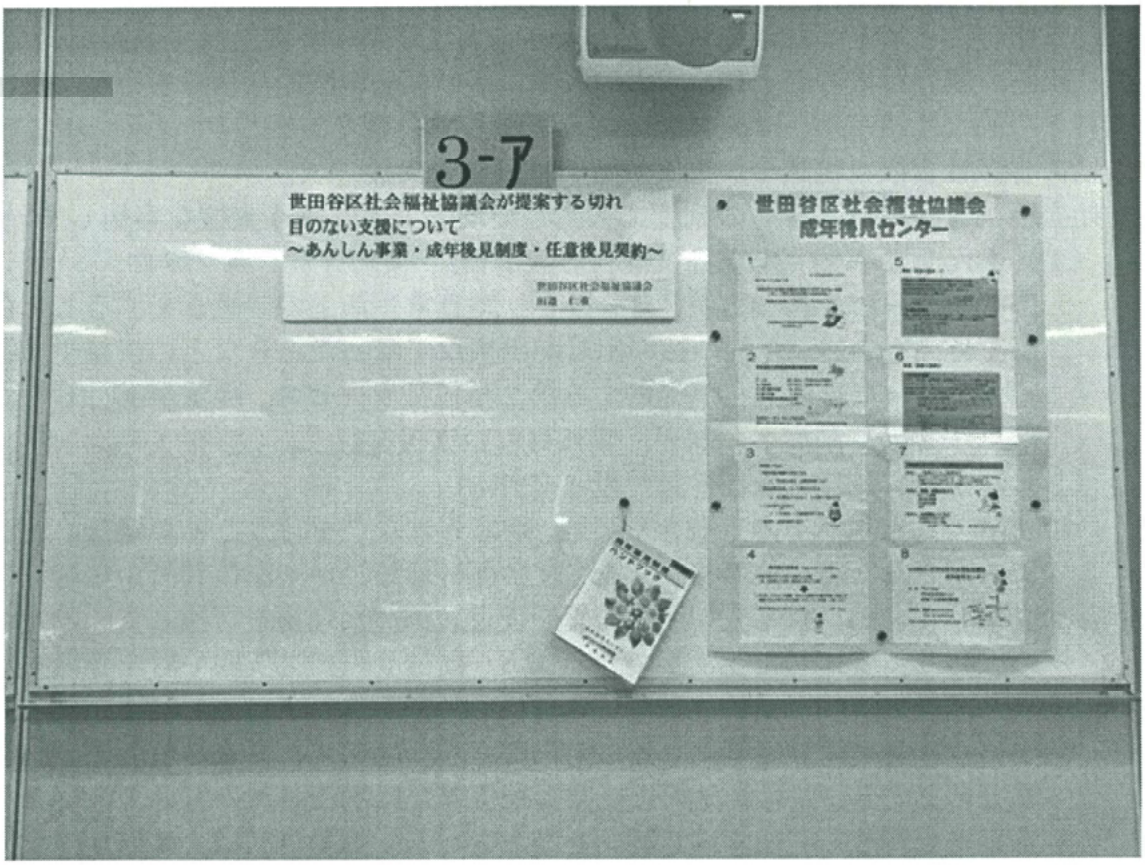
４．社会福祉協議会としての今後の取り組み

（１）制度の適宜適切な利用を促進するためのＰＲ活動

（２）利用者の早期発見、早期対応をすすめるための地域の見守り活動との連携

（３）社協版エンディングノートを通じ、安心に最期まで自分らしく生きることについて考え、そのための準備をしておくことの必要性を発信

資料掲示　3－ア
テーマ：世田谷区社会福祉協議会が提案する切れ目のない支援について
　　～あんしん事業・成年後見制度・任意後見契約～
展示発表者：世田谷区社会福祉協議会　田邉仁重



デイサービスに通うことにより生活に意欲が持てるようになった事例

デイホーム三宿　瀧村悦久

発表概要
デイサービスに通う事で、生活に変化をもたらし、意欲が持てるようになった高齢者について、事例を通して検討する。

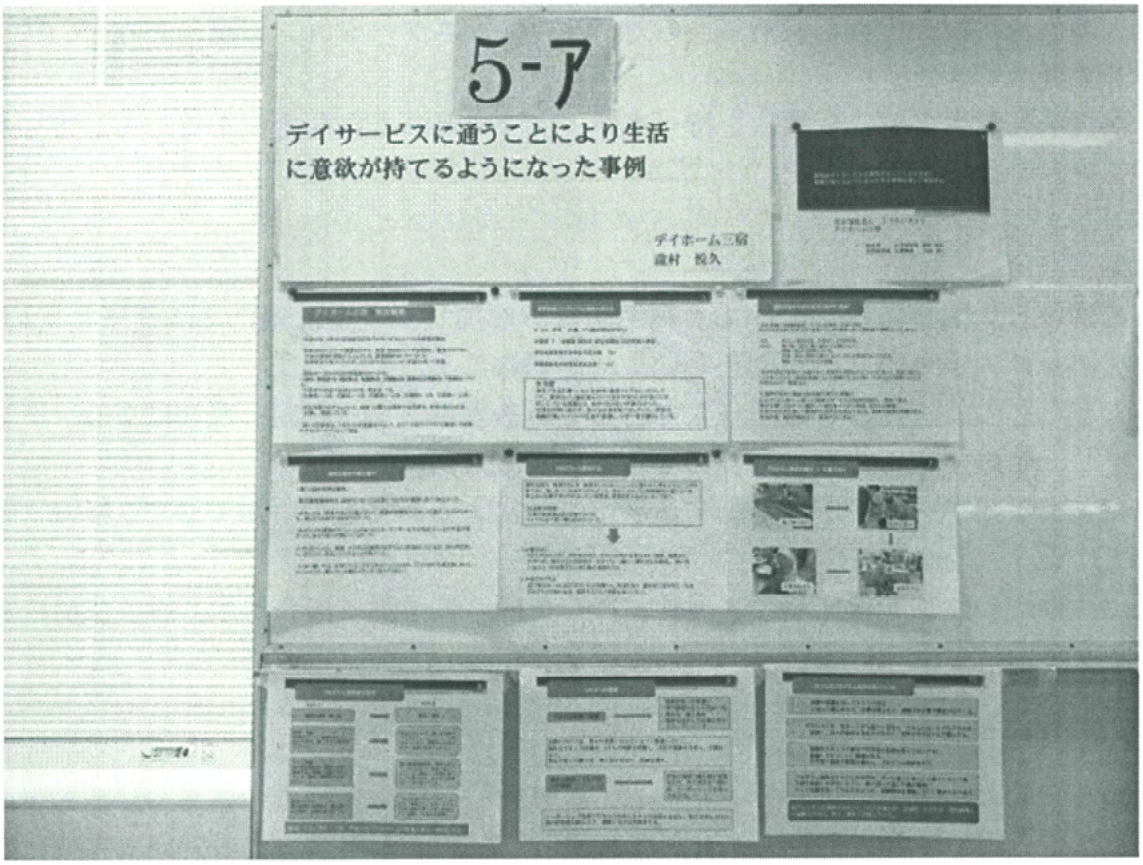
実践内容
本人の生活状況を把握し、病気への対応、コミュニケーションの取り方など、状況に応じて変えてきた。
また、本人が生きがいや意欲を持つ事が、生活にどのような変化をもたらしているのかを検討し、実践してきた。

結果
デイサービス開始当初に比べて、利用回数が増加し、現在は週に４回通所している。
生活にリズムがついて、規則正しい生活が送れるようになっている。
一人暮らしの為、食事も毎回一人で召し上がる事が多かったが、現在は昼食、夕食とデイサービスで摂るため、孤食になることが減った。
病気による妄想への対応も傾聴する事や文章による訴えを受け取る事で、軽減されてきている。
外出行事への参加を促す事で、目標・目的を持つ事がデイに来る楽しみ、生活における張り合いになっている。

考察
高齢者本人の生活をしっかりと把握し、必要なサービスを提供する事や、その対応を丁寧に行う事で、高齢になっても意欲を持って生活する事が出来るという事例になった。デイサービスの立場からは、集団的なプログラムの提供と共に、気持ちや思いを聴き、本人の生活を支援していくことが大切なことではないかと学んだ。

課題
今後も妄想の訴えが主に課題となる。現在は他の利用者さんへ話すことは無いが、どのような対応が必要になるのか想定し検討する必要がある。

資料掲示　５－ア
テーマ：デイサービスに通うことにより生活に意欲が持てるようになった事例
展示発表者：デイホーム三宿　瀧村悦久

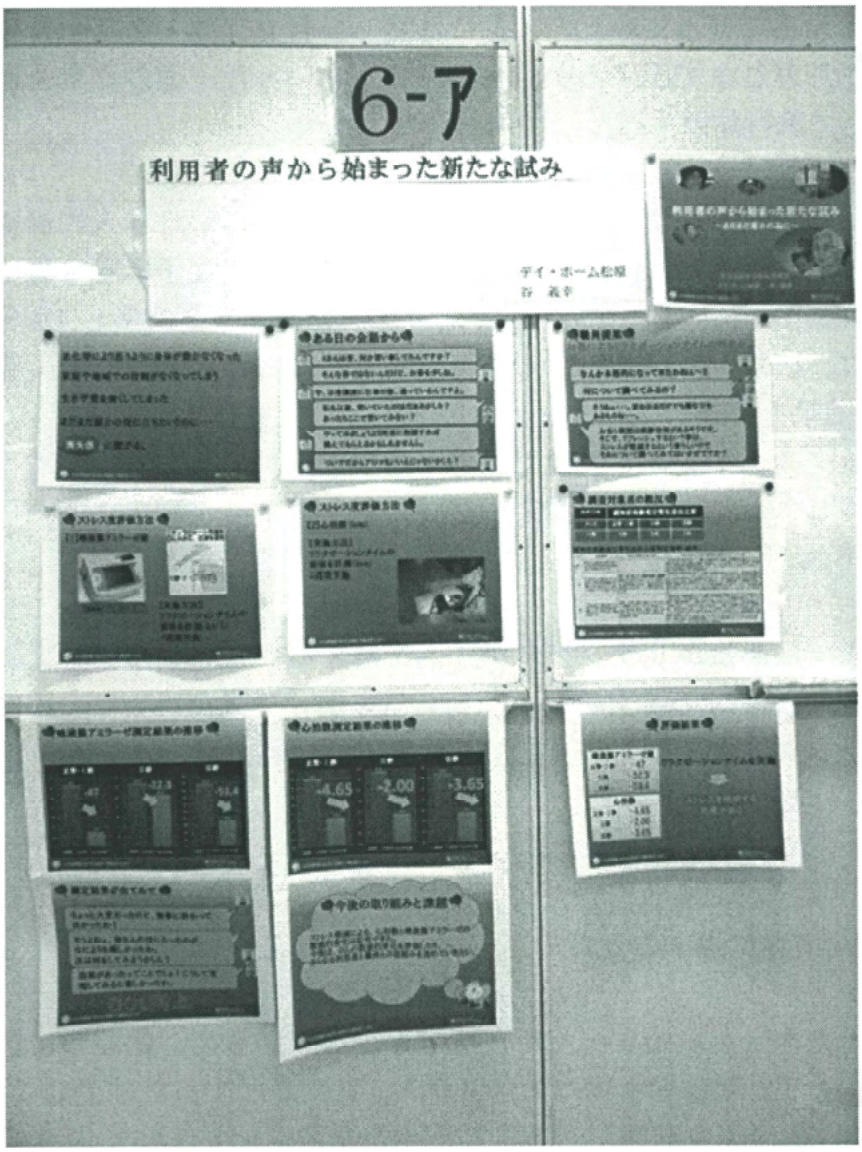


利用者の声から始まった新たな試み

世田谷区社会福祉事業団デイ・ホーム松原　　谷義幸

【はじめに】
日頃、利用者との会話の中で、『これをしてみたいわ。』『昔習っていたのよ！』等、聞かれると思います。我々介護職はそんな何気ない会話の中から情報を得たり、状態を察知したりしています。その“つぶやき”を何か現実に出来ないか？職員から発信するのではなく利用者主体で職員と一緒になって実現できないか？その中から『お香を習っていたのよ』に注目し、自立支援・生活の質の向上といった観点からどこまで出来るか、企画・立案といった一連の作業を通して職員と利用者とで試行錯誤する。
【具体的取り組み】
リラックス効果のあるアロマセラピー。フレグランス系が良いか日本人に馴染みのあるお香が良いか試行する。座禅は出来ないけど目を瞑り椅子に座る事は出来るので10分間瞑想するのはどうかしら？等々。一緒にネット検索し10分間瞑想の方法を確立。『気持が落ち着くわ』『気分が良くなるわね』等々の反響があり、『それでは効果を実証してみましょうか？』と発信する。
来所時とお香リラックスタイムとの前後でどのような効果があるか唾液腺アミラーゼ測定器を使用しストレス数値を測定。認知症高齢者日常生活自立度から【正常・Ⅱ・Ⅲ】群それぞれ5名を選択し4週間にわたり評価測定を実施した。
【効果】
始めは客観的な評価ではあるがリラックスタイムを終えると『心が落ち着くわよね』『今日が始まる感じがする』といった気持の切り替え効果があった。評価測定の結果からリラックスタイムの前後とでは数値的評価結果からストレスがわずかながら軽減される効果があった。
血圧・心拍数においても変動がみられた。リラックスタイム当初は、なかなか10分間という時間が長く感じられていたようで集中する事が出来ていなかったが、今では10分間を有効に過すことができるようになった。
【まとめ】
ちょっとした“つぶやき”から始まった新たな試み。自らが考え、創造し、試行錯誤しながら作り上げた利用者主体のプログラム。ただ通所するだけでなく、何かを考える力、創り出す力を発揮し、達成した時の満足感を引き出す。『まだまだ誰かの役に立つんだわ。』と利用者がつぶやいた言葉が一番印象的でした。職員も提供する側から、共に考え・共に創り出すことで、仕事の満足度・達成感を感じることができた。その点からも相乗効果があった。今では“つぶやき”をどのように実現できるか？まずは職員に“つぶやく”ことをする利用者が増えてきた。

資料掲示　６－ア
テーマ：利用者の声から始まった新たな試み
展示発表者：デイ・ホーム松原　谷義幸



地域開放事業の展開～元気な奥沢街作りClub　For　優～

社会福祉法人奉優会デイホーム奥沢　　関勝之・中島和子

地域の皆様の生活をより過ごしやすく、密着した活動を行なうことで元気な街づくりを目指し、奥沢あんしんすこやかセンター主催の体操教室のお手伝いをさせて頂くことで、地域に開かれた社会福祉法人として、認識していただくと共にデイサービスのご利用のない方々にも安心して必要な時にご利用していただけるような接点を持っていただく。
そんな流れの中で、お一人の方にスポットを当て地域の輪に入り、デイサービスの利用に繋がった方のご紹介をさせて頂きます。

資料掲示　６－イ
テーマ：地域開放事業の展開～元気な奥沢街づくりＣｌｕｂ　Ｆｏｒ　優～
展示発表者：デイ・ホーム奥沢　関勝之、中島和子



その介護と医療「明日への架け橋」

優っくりデイサービス喜多見　　長島　正明、相内五十美

優っくりデイサービス喜多見は、「認知症が進行しても住み慣れた環境で在宅生活が続けられるように、医療ニーズが必要になっても入院せずに、住み慣れた自宅で療養生活が送られるように支援します」をコンセプトに平成２４年１２月に開所しました。要介護度は３～５の方が大半を占め、平均介護度は3.6、胃瘻や吸引、常時見守りが必要な方たちが利用されています。

私たちは利用者・その家族の要望を最大限満たせるよう個別対応し、安心・満足して利用していただけるように日々努めています。今回取り組みの中の２事例を紹介致します。

【事例１】

Ａさんは進行性核上性麻痺で要介護５、咀嚼・嚥下不可で胃瘻、言語に支障あり意思疎通困難、身体全体の筋緊張強く車椅子で全介助、介護者は娘です。利用時から四肢の運動や口腔ケアを開始しました。利用２ヶ月後頃より発語が増え反応がよくなってきました。また、手もよく動かすようになり、ものを口に持っていく動作が見られるようになりました。本人が胃瘻の注入を手で払いのけ拒否することもあり、家族は「絶対食べられる」と思い、私たちも口の動きから「食べられるのではないか」という気持ちが強く、「食べるのは無理」という、ケアマネや訪問医師に内視鏡検査（略してVE）を提案、検査を実現させ、他職種がチームとなり支えあって摂食を開始することができました。

「食」は人が生きていく上で不可欠なもので、楽しみの一つです。胃瘻だから、誤嚥性肺炎のリスクが高いからと諦めず、ご本人の有する能力を見極め、VEを実施して、チームで協力し本人・家族の思いや要望に応えることができました。

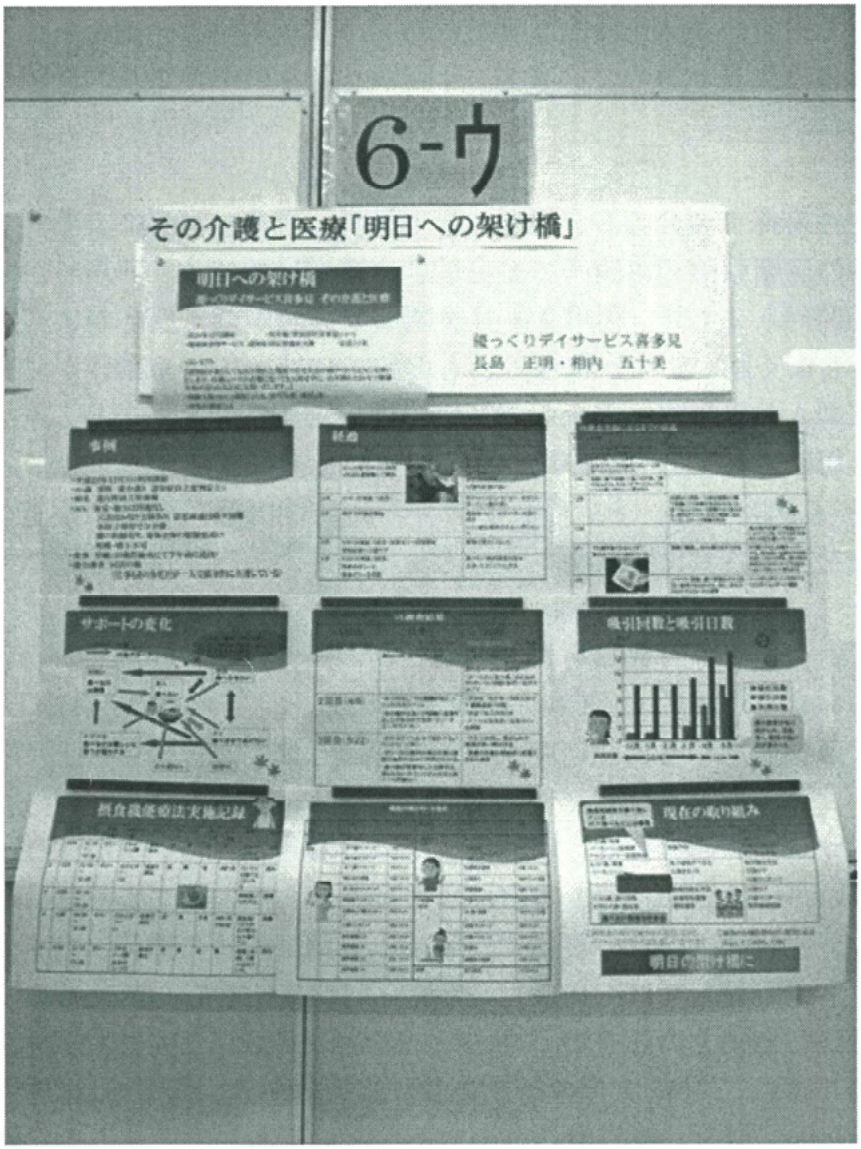
【事例２】

Ｂさんはアルツハイマー病で要介護４、意思疎通はほとんど不可で、普段は穏やかですが、意にそぐわない事には強い拒否、暴言、暴力行為があり、脅すような口調に急変する事もあります。介護者は内縁の妻です。家族の要望は毎日の散歩、食事、入浴でした。特に入浴は本人が好きではない為、１年くらい清拭で対応しているので、デイに慣れてからお願いしたいとのことでした。デイの生活に慣れた４ヶ月過ぎ、家族に提案し入浴を開始しました。が、衣類の着脱に強い拒否があり、職員対して暴言・暴力・殴る・蹴る・腕を強く掴む、噛み付こうとするなどの行為がありました。入浴前準備に色々な取り組みを行い、週１回入浴できるようになってきましたが、スムーズに入浴できるのは２０％程度です。今後も週１回入浴をパターン化させ、本人・家族の満足につなげたいと思います。

[優っくりデイサービス喜多見の今後の課題]

・ご利用者の有する能力を引き出しながらデイサービスでの生活を楽しんで頂く事
・ご家族の信頼を得ながら要望に応え安心してご利用して頂く事

資料掲示　６－ウ
テーマ：その介護と医療「明日への架け橋」
展示発表者：優っくりデイサービス喜多見　長島正明、相内五十美



地域の社会資源を活かした介護予防の取り組みについて
～介護予防強化推進事業を通した取り組み事例～

奥沢あんしんすこやかセンター　渡辺孝行、内藤麻里

◆市町村介護予防強化推進事業（予防モデル推進事業）

事業の目的：要支援者等に必要な予防サービス及び生活支援サービスを明らかにするために、一次予防事業対象者から要介護２までのものであって、ＡＤＬが自立又は見守りレベルかつ日常生活行為の支援の必要可能性のある者に対するサービスニーズの把握、必要なサービス（予防サービス及び生活支援サービス）の実施、効果の計測及び課題の整理。

◆奥沢あんしんすこやかセンターの取り組み

・「通所系のサービスを新しく作り出す」ことを課題に取り組み。
・奥沢地区の運動系社会資源を訪問、把握。課題の分析。
・対象者の抽出基準と期待する効果の整理。

「近所に体操教室があったら、外出機会が増え、日常生活を活性化することができるのではないか」

⇒筋力アップ教室を開催（平成２５年２月～8月　6か月間）

条件：①２つの町会会館で毎週定期の活動　②徒歩10分程度の範囲内に在住の要支援認定又は一次・二次予防事業対象者　③講師…理学療法士、協力員…デイサービス職員　④運動強度…区主催の介護予防体操教室と同等

成果：加齢や疾病により下肢筋力が低下したり、意欲が低下してしまった方に対して、自宅から徒歩１０分程度の範囲内で定期の運動や社会交流の場を提供することが出来れば、元気になれる方がいる！

課題：人材の確保や育成・講師料や会場費などの経費・定期的に利用できる場所の確保。

⇒体操教室の継続に賛同・協力して頂いた「デイホーム奥沢」で活動継続。

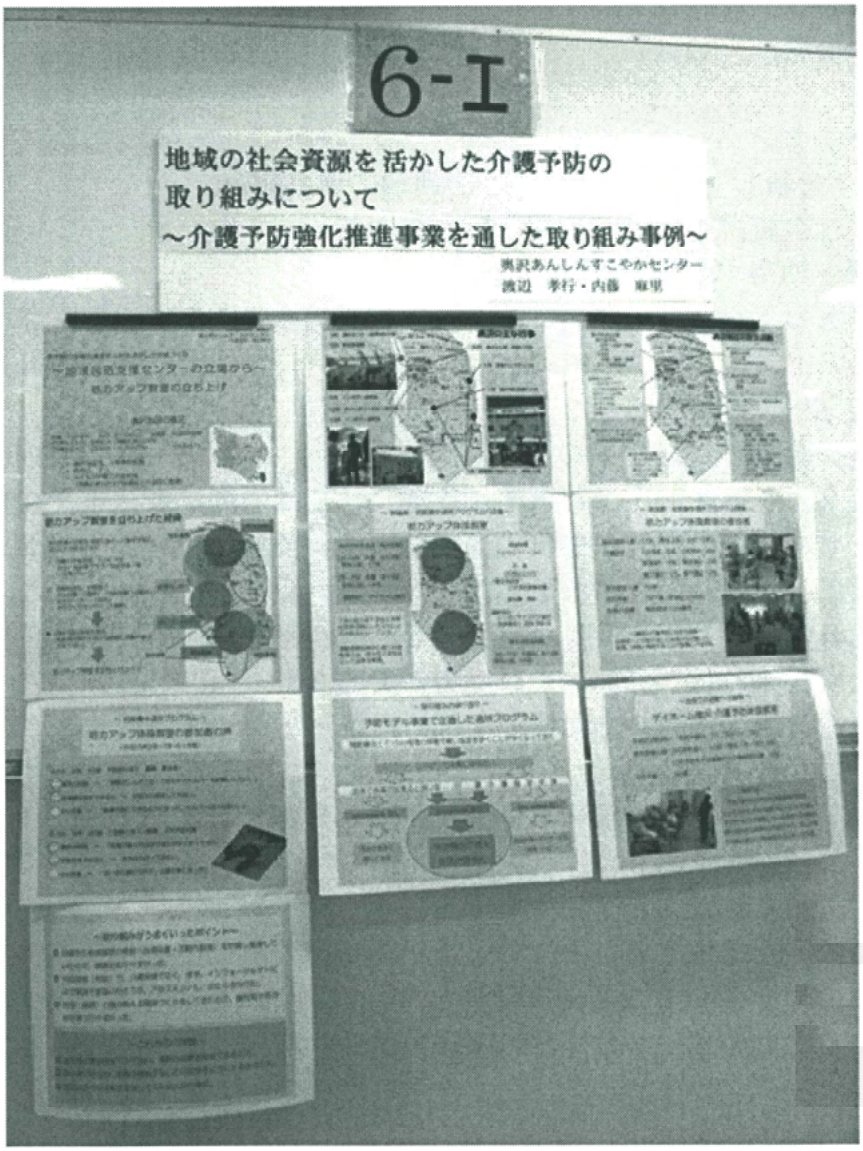
◆成果のあった事例から得られたこと

・身近で活動できる場所を提供することでの介護予防事業の有効性を確認。
・資源づくりに地域の力を活かすことの有効性と日々の関係構築の重要性を確認。
・新しいことを始めるためのきっかけ作りの支援方法を工夫する重要性を確認。

◆今後の課題

・参加者の意欲を継続させるための工夫。
・参加の成果を参加者にわかりやすく伝える工夫。
・会場の立地条件により送迎支援の工夫。
・地域との顔の見える関係のさらなる強化への取組み。

資料掲示　６－エ
テーマ：地域の社会資源を活かした介護予防の取り組みについて
　　～介護予防強化推進事業を通した取り組み事例～
展示発表者：奥沢あんしんすこやかセンター　渡辺孝之、内藤麻里



生きる力の支援の取り組み『外出会』編
～入所者の「思い」に応える外出会～

世田谷区立特別養護老人ホーム上北沢ホーム、三友一仁

上北沢ホームでは、「生きる力の支援」を基本方針として、全職員がチームで入所者へのケアを行っている。この「生きる力の支援」の一環として実施している「外出会」にテーマを絞り、各フロアで実践している様々な活動について、１事例ずつ発表する。

事例１：２階フロア発表事例『Ｆ様自宅に帰る』

- 目的
  住み慣れた自宅に戻り、夫ともに自宅で穏やかなひとときを過ごしていただく。
- 実践内容
  Ｆ様の看取りケア開始後、夫より「自宅に連れて行きたい。」との要望があり、各職種が検討を重ね、その４日後自宅への外出を実施する。
- 結果
  本人からの発語が増え、覚醒状態も改善された。そして、ご家族から感謝の言葉をいただき、信頼関係の構築につなげることが出来た。

事例２：３階フロア発表事例『そうだ！釣りに行こう！』

- 目的
  釣りが趣味という入所者を対象に、「釣りに行く」という目標を持ち、活気ある生活を過ごしていただく。
- 実践内容
  何気ない会話の中から、釣りに出かけることを計画した。車イスでも安全が確保できる釣り堀を選定し、入所者、家族、職員が釣りに出掛け、喜びを共有した。
- 結果
  釣りを通して、入所者及び家族との会話が増え、他のケアへの改善、向上につながった。「釣り」を目標に、意欲を持って生活される入所者に接することが出来た。

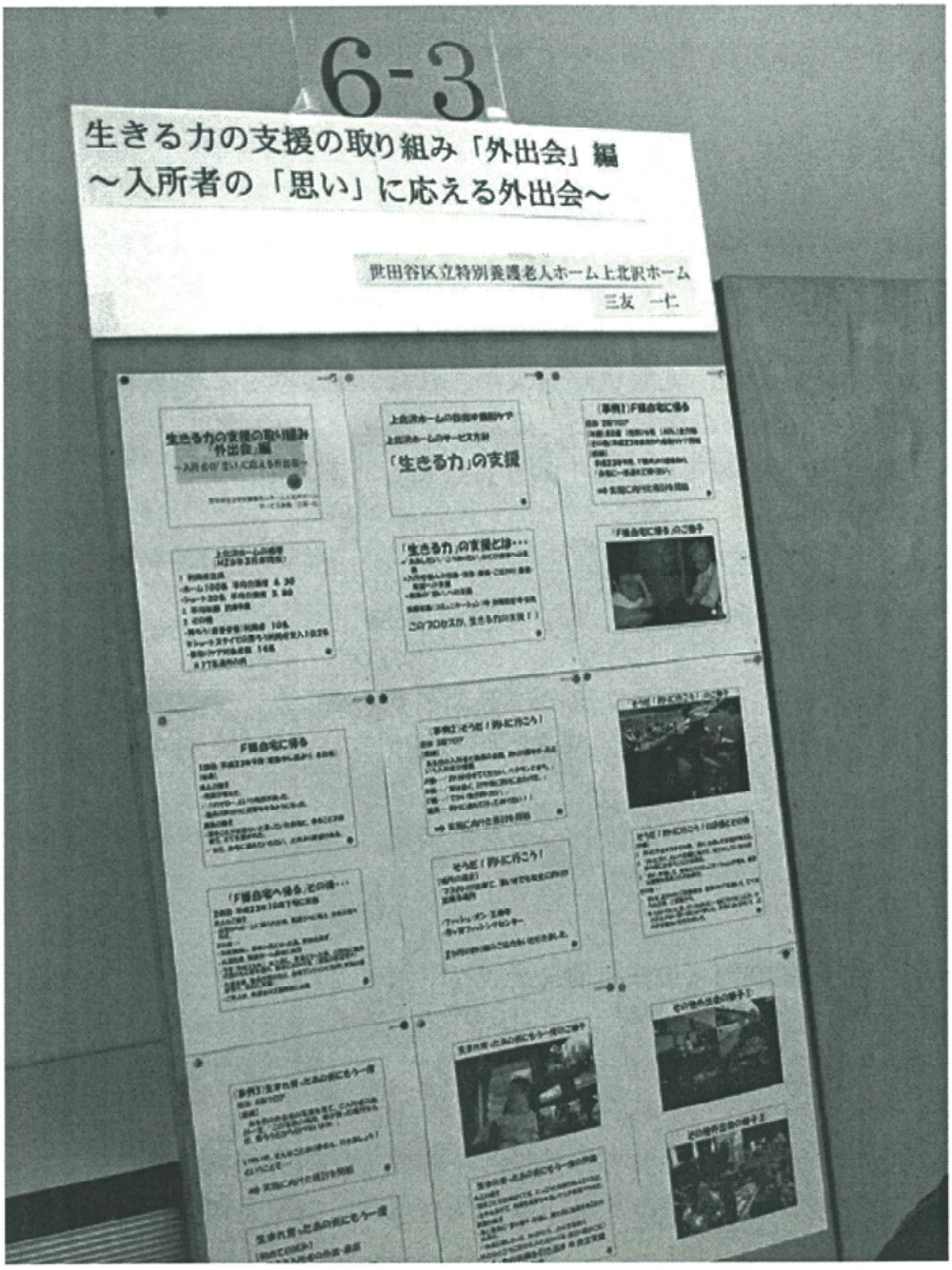
事例３：４階フロア発表事例『生まれ育ったあの街にもう一度』

- 目的
  生まれ育った街に出向き、懐かしい風景に触れ、昔を思い返す機会を提供する。
- 実践内容
  家族が諦めていた外出を実現するため、多職種が検討を重ね、ドライブ形式で生まれ育った街を回り、家族とともに昔を振り返り、会話を楽しむ。
- 結果
  入所者は、話すことが出来ないが、声かけに表情や手で返事をしてくださる。さらにその回数が増加した。また、夫と職員間の会話の機会が増加した。

考察　入所者の「思い」を叶えることが、本人及び家族の生きる力となることを確信した。

課題　日常のささやかな「思い」を叶えるケアの充実と実践

資料掲示　６－３
テーマ：生きる力の支援の取り組み『外出会』編
　　～入所者の「思い」に応える外出会～
展示発表者：世田谷区立特別養護老人ホーム上北沢ホーム　三友一仁



自己覚知の点から親の思いを考える

世田谷区立下馬福祉工房　　田島和美

はじめに

対人援助の仕事、高齢者入所施設４年、知的障害者通所施設 10 年になる。また、母親となり２年が経ち、感じていることをまとめる機会とする。対人援助の基本姿勢として自己覚知の点から振り返ることができればと思う。

１、親になる前の自分

この仕事にどう取り組んできたか

～考え方、感じ方、一所懸命、嬉しさ、面白さ、反省

２、母親となって我が子への思いと育て方

・この２年どんな思いで、何を注いで育ててきたか

・子供中心の生活、生活のリズムがガラリと変わる。大変さは大いにあるが、満足感がある。幸福感がある。存在を当たり前に全面的に受け入れる。

・それまで抱きにくかった感情も自然と抱けるようになる。「愛おしさ」。

・まわりが祝福してくれること、みんなが肯定してくれることに嬉しさを感じ、意識をしなくともプラスの面ばかりに着目する。

３、親として、ご家族・親御さんの気持ちを考える

・愛情をこの上なくかけて育てる

・まわりと比べてしまえば時にゆっくりの歩み、それでもわが子の愛おしさ、守りたいもの、守るべきものの責任感から、親もゆっくりとそれを受けいれていく、受け入れようとする。

・将来の不安、自立した生活を送れるのか、他人に迷惑をかけないか。

・親なきあとの心配、できることならば子を看取るまで元気でいたい。１日でも長く子を守ってやらなければ。

・障害があるがゆえ、親の思いが一層強くなる。

・親離れしがたい現実から、親の得体の知れない不安、心配の強さを感じる。

４、親になったことで感じたこと

・関係の違い、年齢の違いなどからわが子と同じように接することが求められていることではない。

・親の立場、支援員としての立場、共通する思いもあるが、決して同じではない。

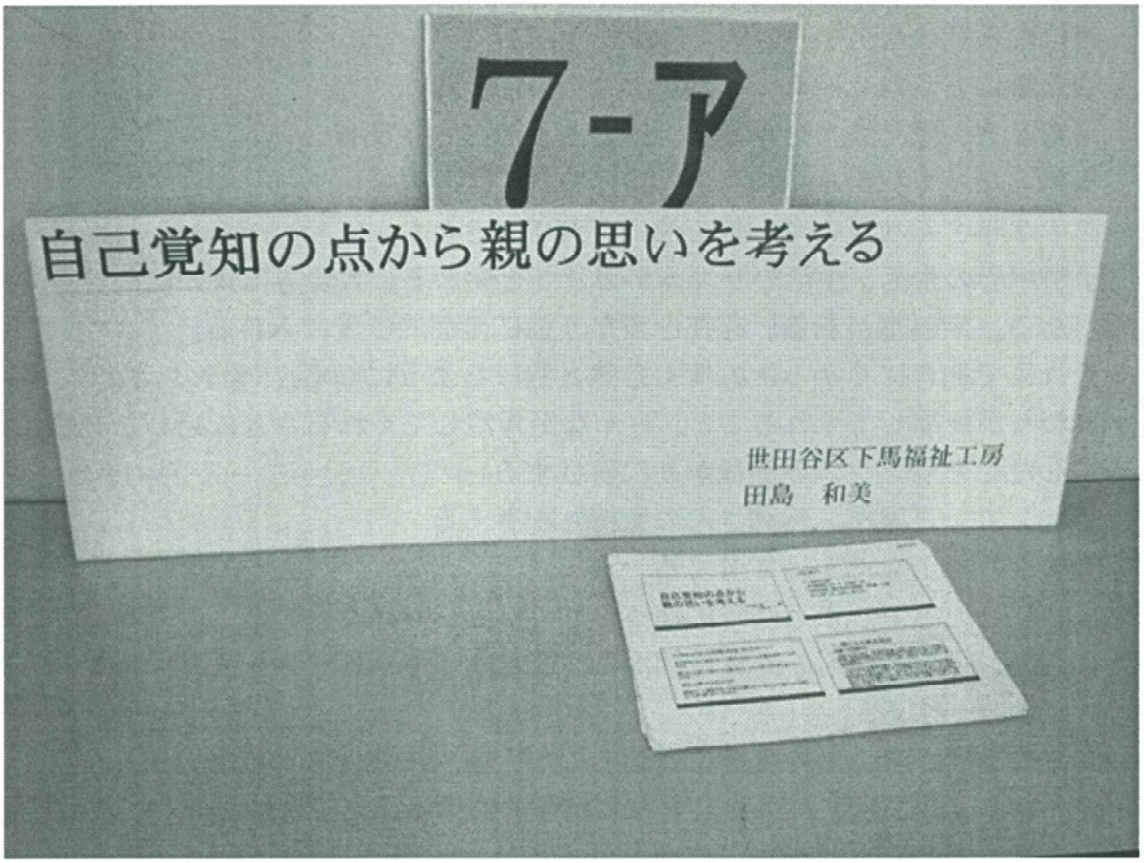
・気持ちのありよう、親への共感、人は思われて育つことを改めて実感する。

・時間の割き方、上手にライフワークバランスをとる。わが子を大事にできなくて、人を大事にできない。

おわりに

対人援助には自己覚知が大きく関わってくるが、自分を知ること、振り返ることは容易なことではなく、時に厳しい現実と向き合うこともある。しかしながら人は関わりの中で育つ。自分の関わり方を折々に振り返りながら、出来る出来ないということよりも、人との関係の持ち方を大切にしてゆける支援を大事にしたいと思う。

資料掲示　7ーア
テーマ：自己覚知の点から親の思いを考える
展示発表者：世田谷区立下馬福祉工房　田島和美



資　料　編

・実践研究発表会参加者数
・日本体育大学校舎配置図・会場見取り図
・せたがや福祉区民学会役員名簿
・団体会員名簿
・＜参考＞せたがや福祉区民学会
　第５回大会発表予定者一覧

せたがや福祉区民学会実践研究発表会　参加者数

平成２６年５月２４日（土）
１２時３０分～１５時３０分
日本体育大学世田谷キャンパス
（教育研究棟２階１２０１教室・１２０２教室）

参加者数　　１３３人

内）発表者　　４９人（３２組）

社会人ボランティア　２人

学生ボランティア　１５人

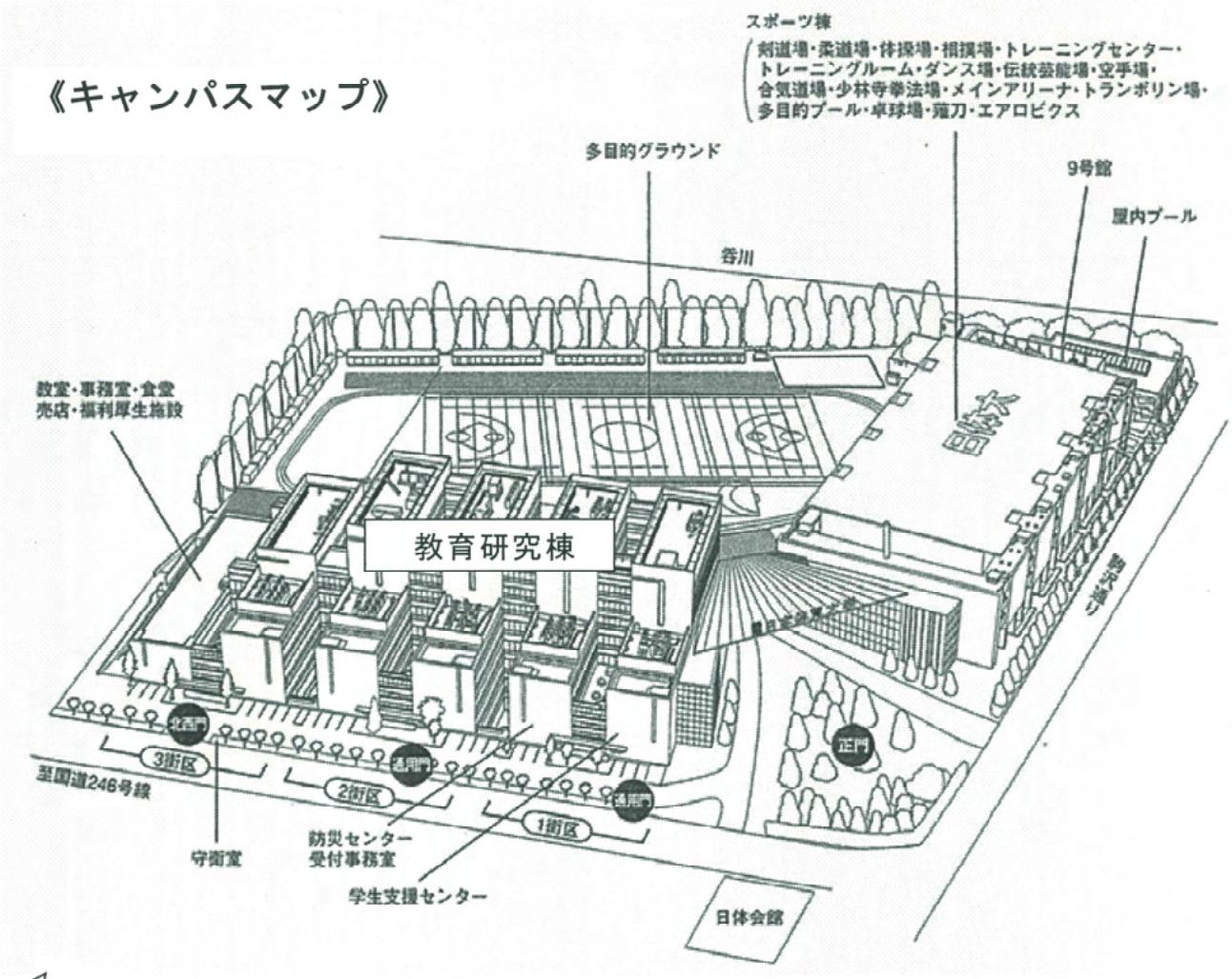
＜その他＞
＊当日は、日本体育大学はじめ区内大学の学生ら計１７人のボランティアの方々に、設営・会場案内・記録・写真撮影等の大会運営にご協力いただきました。

＊前日までの準備期間、せたがや福祉区民学会学生交流会メンバーの大学生延べ１８人に、会場看板やパンフレット作成など、開設準備のご協力をいただきました。

校舎配置図・会場見取り図

日本体育大学 世田谷キャンパス

《キャンパスマップ》



平成２６年５月２４日　実践研究発表会

集合場所：世田谷キャンパス教育研究棟２階１２０１教室

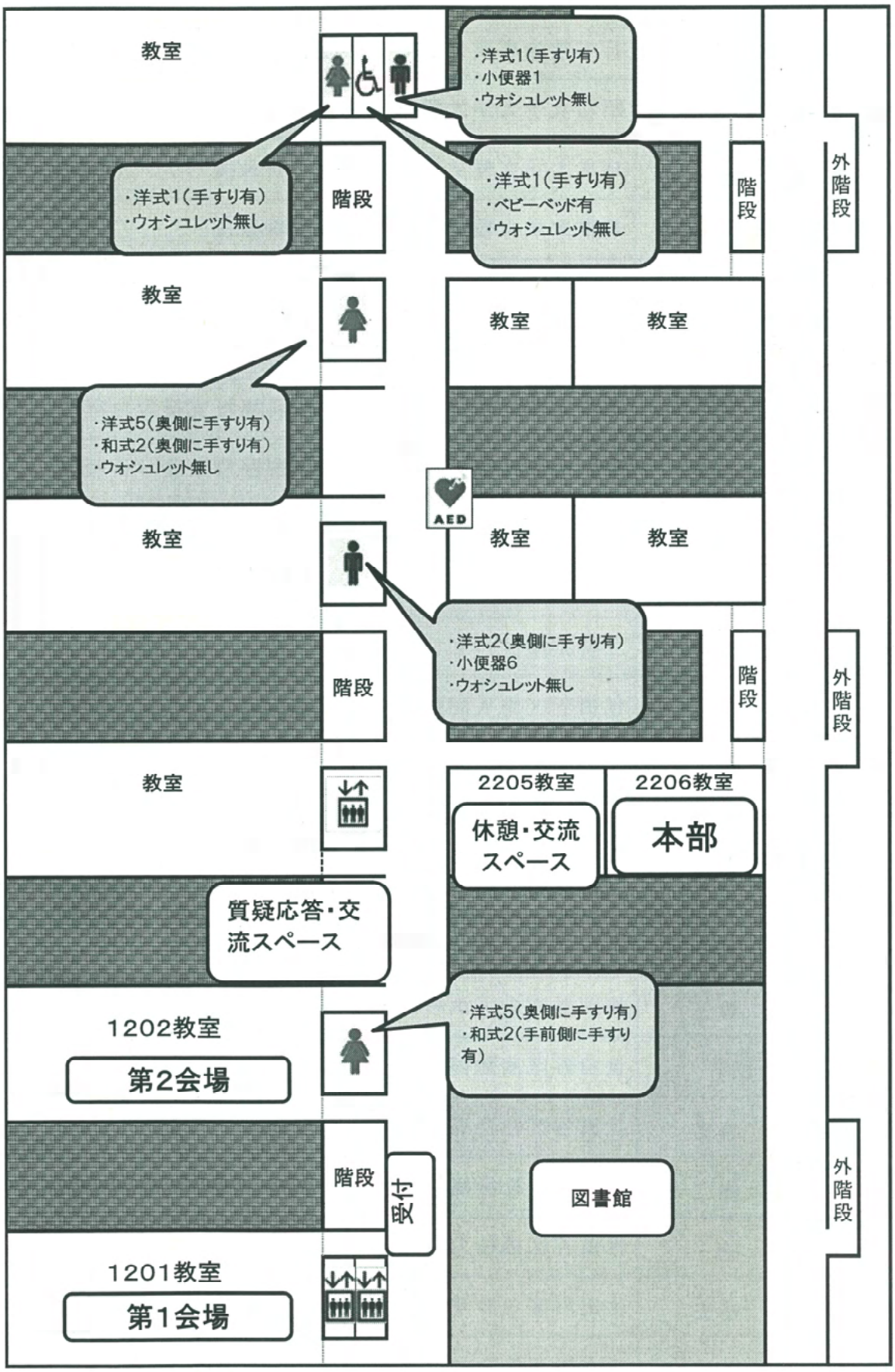
※教育研究棟正面入口を入って、すぐ左側にあるエレベーターで２階へ上がってください。

【順不同】　せたがや福祉区民学会役員名簿　　平成２６年５月１９日現在

役職	氏　　名	所　属／職　名
会長	石井（いしい）　哲夫（てつお）	日本社会事業大学名誉教授
副会長	永山（ながやま）　誠（まこと）	昭和女子大学大学院特任教授
理事	今泉（いまいずみ）　礼右（れいすけ）	日本大学文理学部社会福祉学科教授
理事	上之園（あげのその）　佳子（よしこ）	日本大学文理学部社会福祉学科教授
理事	長尾（ながお）　譲治（じょうじ）	駒澤大学文学部社会学科社会福祉専攻准教授
理事	近藤（こんどう）　雅雄（まさお）	東京都市大学人間科学部学部長
理事	横山（よこやま）　順一（じゅんいち）	日本体育大学体育学部健康学科福祉支援専攻准教授
理事	森本（もりもと）　修三（しゅうぞう）	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科教授
理事	竹内（たけうち）　孝仁（たかひと）	国際医療福祉大学大学院教授
理事	大熊（おおくま）　由紀子（ゆきこ）	国際医療福祉大学大学院教授
理事	長谷川（はせがわ）　幹（みき）	三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長
理事	加藤（かとう）　美枝（よしえ）	世田谷区老人問題研究会理事
理事	村田（むらた）　幸子（さちこ）	福祉ジャーナリスト
理事	石橋（いしばし）　悦子（えつこ）	東京都発達障害者支援センター主任支援員（センター長代行）
理事	植田（うえだ）　祐二（ゆうじ）	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
理事	辻本（つじもと）　きく夫（お）	世田谷区介護サービスネットワーク代表
理事	木谷（きたに）　哲三（てつぞう）	特別養護老人ホーム上北沢ホーム施設長
理事	田中（たなか）　文子（あやこ）	世田谷区高齢福祉部長
理事	福田（ふくだ）　督男（とくお）	世田谷区社会福祉協議会常務理事
理事	佐藤（さとう）　健二（けんじ）	世田谷区社会福祉事業団理事長
理事	阿竹（あたけ）　恵（めぐみ）	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
監事	河合（かわい）　岳夫（たけお）	世田谷区会計管理者
監事	牧野（まきの）　まゆみ	日本放送協会学園社会福祉コース教諭

第３期（H25.4.1～H27.3.31）

教育研究棟　2階


教室
・洋式1(手すり有)
・小便器1
・ウォシュレット無し
・洋式1(手すり有)
・ウォシュレット無し
・洋式1(手すり有)
・ベビーベッド有
・ウォシュレット無し
階段
階段
外階段
教室
教室
教室
・洋式5(奥側に手すり有)
・和式2(奥側に手すり有)
・ウォシュレット無し
AED
教室
教室
教室
・洋式2(奥側に手すり有)
・小便器6
・ウォシュレット無し
階段
階段
外階段
教室
2205教室
2206教室
休憩・交流スペース
本部
質疑応答・交流スペース
・洋式5(奥側に手すり有)
・和式2(手前側に手すり有)
1202教室
第2会場
階段
受付
図書館
外階段
1201教室
第1会場

せたがや福祉区民学会　団体会員名簿

会員番号	団体名
2103004	社会福祉法人大三島育徳会　博水の郷
2103006	東京都市大学人間科学部児童学科
2103008	社会福祉法人老後を幸せにする会　特別養護老人ホームさつき荘
2103010	子どもの生活研究所　めばえ学園
2103012	社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム　等々力の家
2103013	世田谷区高次脳機能障害連絡協議会
2103014	内閣府認証NPO法人　日本トラベルヘルパー協会
2103015	社会福祉法人　日本フレンズ奉仕団　フレンズホーム
2103016	特定非営利活動法人　語らいの家　グループホーム語らい
2103017	社会福祉法人友愛十字会　砧ホーム
2103018	医療法人社団慈泉会　介護老人保健施設　うなね杏霞苑
2103019	世田谷福祉専門学校
2203001	特定非営利活動法人　NPOはぁと世田谷
2203002	有限会社　ヘルパーサービス和知
2203005	世田谷区立きたざわ苑
2203008	社会福祉法人　世田谷区社会福祉協議会
2203010	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花ホーム（特養）
2203011	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花ホーム（短期入所）
2203012	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢ホーム（特養）
2203013	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢ホーム（短期入所）
2203014	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム世田谷
2203015	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム太子堂
2203016	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム大原
2203017	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム弦巻
2203018	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム松原
2203020	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム芦花
2203021	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム上北沢
2203022	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷一丁目介護保険サービス
2203023	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　北沢介護保険サービス
2203024	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花介護保険サービス

せたがや福祉区民学会　団体会員名簿

会員番号	団体名
2203025	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上町地域包括支援センター
2203026	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　太子堂地域包括支援センター
2203027	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　北沢地域包括支援センター
2203028	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢地域包括支援センター
2203029	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上祖師谷地域包括支援センター
2203030	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷ホームヘルプサービス
2203031	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　烏山ホームヘルプサービス
2203032	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションけやき
2203033	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション北沢
2203034	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション芦花
2203035	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションさぎそう
2203037	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　パルメゾン上北沢
2203038	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　総務課
2203039	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷区福祉人材育成・研修センター
2203040	社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム三宿
2203042	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科
2203043	社会福祉法人康和会　久我山園
2203044	社会福祉法人嬉泉すこやか園
2203046	駒澤大学　社会福祉学専攻
2203047	社会福祉法人嬉泉　おおらか学園
2203048	世田谷区発達障害相談・療育センター
2203051	社会福祉法人古木会 成城アルテンハイム
2203053	社会福祉法人世田谷ボランティア協会福祉事業部
2203054	世田谷区介護サービスネットワーク
2203055	日本大学文理学部
2203056	世田谷区
2303001	世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」
2303002	社会福祉法人　福音寮
2303003	株式会社桜丘在宅サービスセンター赤とんぼ
2303004	ハブネットせたがや

せたがや福祉区民学会　団体会員名簿

会員番号	団体名
2303005	世田谷区立千歳台福祉園
2303007	介護ラボしゅう
2303008	等々力共愛ホームズ
2403001	日本体育大学
2403002	社会福祉法人　大三島育徳会　世田谷区立玉川福祉作業所
2403004	砧自主研修グループ
2403005	砧ご近所地域フォーラム2014実行委員会
2403006	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区駒沢生活実習所
2403007	グループホームももちゃん
2403008	ベネッセスタイルケア
2403009	トラストガーデン桜新町
2403010	世田谷区老人問題研究会
2503001	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋
2503002	セントケアリフォーム等々力
2503003	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立世田谷福祉作業所
2503004	学校法人青葉学園　東京医療保健大学
2503005	社会福祉法人奉優会　等々力の家　居宅介護支援事業所
2503006	社会福祉法人奉優会　深沢あんしんすこやかセンター
2503007	社会福祉法人奉優会　奥沢あんしんすこやかセンター
2503008	社会福祉法人奉優会　通所介護　等々力の家デイホーム
2503009	社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢
2503010	社会福祉法人奉優会　優っくりデイサービス喜多見
2503011	ベネッセスタイルケア　成城歐林邸
2503012	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム鎌田
2503013	駒沢大学大学院
2503014	老人給食協力会ふきのとう
2503015	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　デイ・ホーム中丸

＜参考＞せたがや福祉区民学会第5回大会発表予定者一覧

【実践発表】

1.人と人とのつながり・福祉文化 進行役・助言者 加藤美枝（世田谷区老人問題研究会理事） （1201教室） 金安博明（世田谷区社会福祉協議会北沢地域社協事務所長）				
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	内山　隆嗣	深沢地区社会福祉協議会	深沢地区社会福祉協議会の取り組みについて ～住民同士の「知り合い・ふれあい・支えあい」を目指して～	13:30
2	田尻　勝紀 中山　美智子 吉岡　慶子 文屋　裕子	ひこばえ広場 世田谷保育園	高齢者と幼児のつながりづくりの試み（その3） 「ひこばえ広場」活動の広がりと今後の方向	13:55
3	園原　一代	NPO法人ハートウォーミング・ハウス	高齢者世帯所有の空き部屋ストック有効活用事業	14:20
14:45～15:10 は、パネル発表の時間になります。　（2201教室 ・ 3202教室）				14:45
4	佐野　有未	老人給食協力会ふきのとう	配食サービスとコミュニティカフェの取り組みと地域協同の展開について	15:15
5	遠藤　慧 西堀　圭介	世田谷区社会福祉協議会	東日本大震災による区内避難者への支援で見えてきた現状と課題～世田谷区社会福祉協議会が実施する「避難者の孤立化防止事業」を通して～	15:40
6	矢吹　千恵子 亀井　文男 鈴木　一夫	世田谷区老人問題研究会	「世老研」 福祉活動33年の歩み	16:05
7	桐原　仁子 橋元　晶子 丸山　節子 山本　恵理	砧地域ご近所フォーラム2014 実行委員会	砧地域ご近所フォーラムのとりくみ ～医療・介護・福祉・行政そして地域の連携～	16:30

2. 障がいの理解 （1202教室）		進行役・助言者	石橋悦子（東京都発達障害者支援センター主任支援員） 田中信行（日本体育大学体育学部健康学科教授）	
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	悪七　千尋 越川　美希 中村　紗代子 伊藤　伸二 阪本　英樹	東京都市大学 駒澤大学 区内在住主婦 区内在住定年退職者 区内在住重度障害者	在宅重度障害者介助のチームワークと情報共有化の重要性　～当事者と介助者が抱える問題点とその打開策～	13:30
2	田坂　知樹	サポートステーションさいとう	感情表現を促すためのAAC（補助代替コミュニケーション） ～脳性まひによる肢体不自由者の事例～	13:55
3	甲斐　実	世田谷区立下馬福祉工房	立ち直る姿を導く	14:20
14:45～15:10 は、パネル発表の時間になります。　（2201教室 ・ 3202教室）				14:45
4	小林　昭一	世田谷区教育委員会事務局 生涯学習・地域・学校連携課	障害者青年学級「いずみ学級」の半世紀にわたる活動史	15:15
5	中村　勘太	世田谷区立世田谷福祉作業所	「わいわい隊」からはじまるチャレンジ	15:40
6	長見　亮太	世田谷立下馬福祉工房	マイナスの現象に自ら振り回されるAさんの心情の受け止め	16:05
7	浅野　剛史	世田谷区保健福祉部障害者地域生活課　障害者就労支援担当	世田谷区障害者雇用促進協議会の取り組み	16:30

3. 認知症ケア （2202教室）		進行役・助言者	大熊由紀子(国際医療福祉大学大学院教授) 今井康明(株式会社すずらん代表取締役)	
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	矢作　聡	協同組合ライフケア世田谷	認知症高齢者に対する環境整備の重要性について	13:30
2	市川　裕太	グループホームかたらい	尊厳のある認知症の人への生活に向けて ～グループホームの生活支援及び環境について～	13:55
3	長谷部　希恵子	グループホームももちゃん	日常の外出ケアによる入居者への効果	14:20
14:45～15:10　は、パネル発表の時間になります。　（2201教室　・　3202教室）				14:45
4	木村　真佐子	世田谷福祉専門学校 介護福祉学科	認知症の周辺症状がある利用者とのかかわり方	15:15
5	井上　博美 鹿野　幹子 横山　香織	深沢あんしんすこやかセンター	認知症と医療連携	15:40
6	瀧村　悦久	デイホーム三宿	デイサービスに通うことにより生活に意欲が持てるようになった事例	16:05
7	北澤　冴子 千葉　優雅 北原　由美子	優っくり小規模多機能介護喜多見	生活習慣病と認知症予防にむけて 『物語（ナラティブケア）』が認知症高齢者を支える	16:30

4. 高齢者支援 （3201教室）		進行役・助言者	長尾譲治（駒澤大学文学部社会学科准教授） 瓜生律子（世田谷区地域福祉部高齢福祉課長）	
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	谷　義幸	世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム松原	利用者の声から始まった新たな試み	13:30
2	関　勝之 中島　和子	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	地域開放事業の展開 ～元気な奥沢街づくりClub　For　優～	13:55
3	小林　クリスト ファー太	世田谷福祉専門学校	カレンダー製作を通して、利用者の主体性を引出せるような関わり方を考える	14:20
14:45～15:10　は、パネル発表の時間になります。　（2201教室　・　3202教室）				14:45
4	野中　圭 片桐　修平 猪爪　千恵子	成城歐林邸	成城歐林邸の方針"叶える"	15:15
5	山本　繁	世田谷区民	見守り活動の課題と問題点～世田谷区を中心に～	15:40
6	森田　昇 山下　真理子	若林地区社会福祉協議会	若林地区高齢者見守り運動（地区高齢者見守りネットワーク）とは	16:05
7	安藤　潤一 伊藤　誉敏 伊藤　綾 三友　一仁	世田谷区立特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	生きる力の支援の取り組み『外出会』編	16:30

5.子どもの発達／人権　（2203教室）	進行役・助言者	伊藤陽一（東京都市大学人間科学部講師） 加室弘子（世田谷区教育委員会事務局　教育相談専門指導員）		
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	隅田　文子	世田谷区民生委員・児童委員 主任児童委員	地域のおせっかいおばさん	13:30
2	東　咲生子	駒澤大学大学院修士課程	一時保護所における職員間連携に関する質的研究	13:55
3	高木　こずえ	日本体育大学女子短期大学部専攻科	児童養護施設ボランティア活動から学んだことと今後の抱負（実践報告）	14:20
14:45～15:10　は、パネル発表の時間になります。　（2201教室　・　3202教室）				14:45
4	坂田　由紀子 田淵　かおる	子どもの生活研究所めばえ学園	発達障害のある子どもとの関わり～食事場面を通して～	15:15
5	菊地　悠介	福音寮	福音寮・性教育の取り組みについて	15:40
6	龍尾　怜子	日本大学大学院文学研究科 心理学専攻	大学生におけるAD/HD傾向と受容感，気分状態の関連の検討	16:05
7	田邉　仁重 宮田　眞治	世田谷区社会福祉協議会	世田谷区社会福祉協議会が提案する切れ目のない支援について　～あんしん事業・成年後見制度・任意後見契約～	16:30

6. 家庭生活支援　（2204教室）	進行役・助言者	天野久実子（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教） 本多洋実（日本体育大学短期大学部幼児保育学科准教授）		
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	高山　都規子	かたよせ会	在宅介護家族の会の有様	13:30
2	佐藤　小百合	母子生活支援施設かわだ	母と子とかかわるということ ー自分の子育てを通してー	13:55
3	前田　佐知子	母子生活支援施設 パルメゾン上北沢	子ども家庭支援の現場から ～関わることの難しさ　関わることの　その力～	14:20
14:45～15:10　は、パネル発表の時間になります。　（2201教室　・　3202教室）				14:45
4	米澤　大我	デイ・ホーム中丸	認知症対応型デイサービスにおける延長利用対応について	15:15
5	村山　拓 他学生７名	東京都市大学人間科学部	障害児の保育所入所と養育環境	15:40
6	和久田　規子 一刎　貴典	世田谷区立駒沢生活実習所	Aさん親子を地域で支える取り組み ～行政、医療、福祉の連携と生活介護施設の役割～	16:05
7	井口　直樹	おおらか学園	家庭訪問支援を通じて学んだこと	16:30

7.人材育成／チームケア（3205教室）	進行役・助言者	市橋奈緒美(特別養護老人ホーム久我山園施設長) 植田祐二(世田谷高次脳機能障害連絡協議会)		
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	渡邉　久子	フレンズホーム	見えない介護を見える介護へ ～根拠のある介護の実践を目指して～	13:30
2	山崎　達也 柳　真美 他3名	特別養護老人ホーム久我山園	新任介護職の入職6ヶ月目における介護力の習熟と課題 －キャリアパスに連動した介護力を育む熟達度評価－	13:55
3	田島　和美	世田谷区立下馬福祉工房	自己覚知の点から親の思いを考える	14:20
14:45～15:10 は、パネル発表の時間になります。　（2201教室 ・ 3202教室）				14:45
4	飯岡　淳子 鳴海　弘将 吉田　優里子	社会福祉法人奉優会 等々力の家	胃ろうゼロを考えるⅡ ～多職種で支える経口栄養・私達の「STOP！　胃ろう」～	15:15
5	外池　孝普 石黒　真貴子 湯本　ゆみ	NPO法人せたがや移動ケア	連携・共有を目指して ～世田谷区福祉移動支援センターの各種研修の紹介～	15:40
6	松本　渚 他4名	特別養護老人ホームさつき荘	特養における機能訓練指導員の役割 ～ポジティブDEハッピー　さつき流生活リハビリの実践～	16:05
7	辻本　きく夫	世田谷区介護サービスネットワーク	介護サービス事業者団体のこれまでの活動と今後の課題	16:30

8.スポーツと福祉・健康（3206教室）	進行役・助言者	長谷川幹(三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長) 宮田理(日本体育大学体育学部社会体育学科助教)		
	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	大河原　裕迪	日本体育大学体育学部健康学科福祉支援専攻	障がいのある人とない人のスポーツ・レクリエーション交流事業 ～世田谷における実践～	13:30
2	豊田　キヨ子	あめんぼう	ハダカのおつき合いと地域社会 ～水泳を通して～	13:55
3	中山　進	世田谷区民	バイオリズム表を活用した思いやり対話	14:20
14:45～15:10 は、パネル発表の時間になります。　（2201教室 ・ 3202教室）				14:45
4	村上　奈央子	地域栄養サポート自由が丘	地域で活動する訪問管理栄養士の活動紹介とその効果	15:15
5	泉谷　一美 水上　朽美 鬼塚　正徳	NPO法人せたがや移動ケア	世田谷区福祉移動支援センター(そとでる)の相談業務と外出支援	15:40
6	清水　勝代 西海　奉成	奥沢地区社会福祉協議会	奥沢地区社会福祉協議会　インボディ測定事業・介護予防への取り組み	16:05
7	渡辺　孝行 内藤　麻里	奥沢あんしんすこやかセンター	地域の社会資源を活かした介護予防の取り組みについて ～介護予防強化推進事業を通した取り組み事例～	16:30

<参考>第５回大会発表予定者一覧

【パネル発表】

今年度新たな試みとして、パネル発表を行います。
14 時 45 分から 15 時 10 分の間は、２２０１教室、３２０２教室にお集まりください。
各発表者のパネルを自由にご覧いただいたり、ご質問いただくこともできます。

助言者　橋本睦子（特別養護老人ホームさつき荘施設長）
北島洋美（日本体育大学体育学部健康学科准教授）

◇第１会場（２２０１教室）

発表者	所　属	テーマ
木谷　哲三	世田谷区社会福事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム	地域包括ケアの推進と特養の役割（考察）
相田　有紀 國持　憲子	奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所	ボランティア活動を続ける認知症高齢者の支援 「彼もまた誰かの社会資源」
瀬戸　麻里絵	優っくりグループホーム鎌田	転倒リスク＝車いす？～歩くことをあきらめない～
伊藤　陽一	東京都市大学人間科学部	学童キャンプのあり方 ～参加学生のアンケートから～

助言者　佐藤光正（駒澤大学文学部社会学科准教授）
辻本きく夫（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

◇第２会場（３２０２教室）

発表者	所　属	テーマ
長島　正明 相内　五十美	優っくりデイサービス喜多見	その介護と医療「明日への架け橋」
村山　拓弥 外池　清治 梅原　朋美	等々力の家デイホーム	歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」の３つの目的設定とその効果について
八重樫　亮一	優っくりグループホーム鎌田	素晴らしき特技をもう一度
斉藤　由子	世田谷区立下馬福祉工房	“給料日”は買い物に行こう！ ～工賃の意義への考察～
杉山　惇	日本体育大学体育学部健康学科 福祉支援専攻	二子玉川にある子どもの居場所「寺子屋」

【レポート発表】

今年度新たな試みとして、レポート発表を行います。
２２０１教室にてレポートをお配りしています。当日発表者は不在です。

（２２０１教室）

発表者	所　属	テーマ
村瀬　精二	千歳台福祉園	新しい価値に気づく
下國　君子	世田谷区立下馬福祉工房	身勝手に見えるＡさんの心情理解の視点

せたがや福祉区民学会第５回大会

広告協賛団体

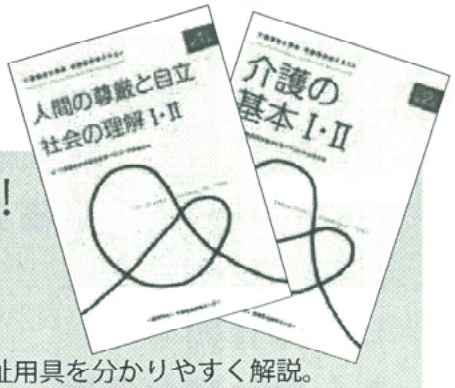
一般財団法人　長寿社会開発センター
（株）メディアチャンネル
セントケア東京株式会社
社会福祉法人　世田谷区社会福祉事業団
社会福祉法人　奉優会
都築電気株式会社
日本体育大学
あらかわ総合保険
一般社団法人　東京防災設備保守協会
株式会社　アイデム
株式会社　スエヒロ
東光建設株式会社
有限会社　みやざき印刷
ユメックス株式会社
株式会社　アライ印刷
株式会社　さくらケア
社会就労センター　パイ焼き窯
学校法人大東学園　世田谷福祉専門学校
世田谷区福祉移動支援センター　そとでる
株式会社　アクセルオン
社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立世田谷福祉作業所
冨士エレベーター工業株式会社
有限会社　マルカワ
三峰電気株式会社

（掲載順）

介護福祉士養成実務者研修テキスト

（全9巻）

現在販売しております「介護職員 実務者研修テキスト」は、
平成26年1月に「介護福祉士養成 実務者研修テキスト」
として生まれ変わります。



弊社テキスト採用のメリット

POINT 1 教えやすい! 使いやすい!!

- デザインを一新し、読みやすさを追求。
- 両端に側注をつけ、用語の解説等を明示。
- 難解な諸制度はイラストで解説。
- イラストや写真を多用し、介護技術や福祉用具を分かりやすく解説。
- 「医療的ケア」には、「DVD」を無料添付。
- 生活支援技術や職務の理解の学習を助ける「DVD」を低価格で販売。
- DVD購入機関には、講師向け「学習指導のポイント」も提供。
- 介護過程を丁寧に解説し、スクーリングが必要な「介護過程Ⅲ」を介護過程の流れに沿って展開。（講師用解説も準備）
- 過去の介護福祉士試験問題に該当する部分を「」マークで明示。

POINT 2 よりお買い求めやすい価格設定

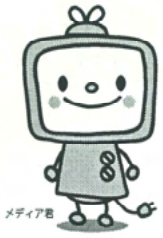
- 9巻セット（医療的ケアDVD付き）でご購入頂くと13,000円（税別）【予定価格】
- 生活支援技術と職務の理解のDVDがセットで2,000円（税別）【予定価格】
  ※テキスト本体とは別売りです。
- テキストは、それぞれ分売可能。
  第1巻～第8巻 各1,800円（税別）【予定価格】
  第9巻：2,000円（税別）【予定価格】

POINT 3 養成研修運営のお手伝い

- 450時間の授業構成案を提供。
- 講師向けに、「介護過程Ⅲ」（スクーリング）にも対応できる事例の模範解答集も準備。
- 通信教育に対応した「全学習課題」を提案。

営業・販売連絡先　一般財団法人　長寿社会開発センター　出版管理部

〒105-8446　東京都港区虎ノ門3−8−21　虎ノ門33森ビル8階
TEL：03-5470-6760　FAX：03-5470-6764
E-mail　shuppan@nenrin.or.jp



メディアチャンネルは、

「見るホームページ」から「使えるホームページ」へ！

を、プロデュースするホームページ制作会社です。

制作事例



世田谷区社会福祉協議会様
http://www.setagayashakyo.or.jp/



世田谷区福祉人材育成・研修センター様
https://www.setagaya-jinzai.jp/



練馬障害福祉人材育成・研修センター様
https://kensyu.neri-shakyo.com/



西東京市社会福祉協議会様
http://www.n-csw.or.jp/
スマホ対応



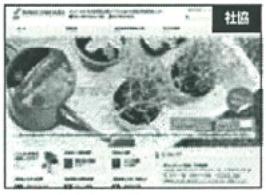
台東区社会福祉協議会様
http://taitoshakyo.com/
スマホ対応 キャラクター制作



文京区社会福祉協議会様
http://www.bunsyakyo.or.jp/
スマホ対応 キャラクター制作



足立区社会福祉協議会様
http://adachi.syakyo.com/
スマホ対応



板橋区社会福祉協議会様
http://www.itabashishakyo.jp/



練馬区社会福祉協議会様
http://www.neri-shakyo.com/



葛飾区社会福祉協議会様
http://www.katsushika-shakyo.com/



小平市社会福祉協議会様
http://www.syakaifukushi.kodaira.tokyo.jp/



東村山市社会福祉協議会様
http://www.hm-shakyo.or.jp/

大学 東京農業大学様 東京農大コミュニティ
http://nodai.cc-town.net/
スマホ対応

大学 成城大学様 成城コミュニティ
http://seijo.cc-town.net/

大学 大妻女子大学様 大妻コミュニティ
http://otsuma.cc-town.net/

大学 明治学院大学 教養教育センター様
http://mgu-cfla.cc-town.net/
スマホ対応

こんな機能が、ホームページにつけられます！

既存のホームページにも導入可能です！

音声読上システム

視力の弱い方に配慮したホームページづくり

ホームページの文字情報を自動的に読み上げるシステムの導入が可能です。

福祉マップ 掲載管理システム

Google マップを使って福祉の情報を発信！

施設の情報、サロンなど福祉活動の情報、車いすステーションなど福祉サービスの情報が掲載できます。情報の登録や編集・削除は管理画面から行います。

ボランティア情報 掲載管理システム

ボランティア募集・団体の最新情報を素早く発信！

高齢者・子供・環境などの「分野別」や、単発・継続などの「種類別」でボランティア情報が掲載できます。一覧画面での並び替えも可能です。情報の登録や編集・削除は管理画面から行います。

お問合せ

株式会社メディアチャンネル

電話 03-5302-9251

- ホームページ：http://www.media-ch.com/
- 住所：〒151-0073 東京都渋谷区笹塚 3-21-5 笹塚 KN ビル 2F
- Email：info@media-ch.com

理想は福祉社会の創造です

セントケアグループは、
最高のヘルスケア企業を築くことを目指します。

お客様と接する時間を大切にし、心を込めてケアすることを通して、安心・喜び・満足という信頼をサービスで提供させて頂くことが我々の仕事と捉えています。
そして、その先にある感動を与えられる仕事をしたいと思っております。

セントケア 経堂デイサービスセンター
〈認知症対応型通所介護施設〉

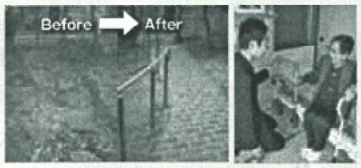
認知症プログラムをはじめ、入浴や食事、レクリエーション、運動機能向上のトレーニング、口腔ケアなど、さまざまな活動を行っています。



Tel.03-5426-1055
世田谷区経堂5-34-7 アシャンテ経堂1F

セントケアリフォーム世田谷
〈住宅改修〉〈福祉用具〉

お客さまの自立と予防に繋がる効果を期待して行われます。住まいに自分を合わせながら生活している人に、ちょっとした工夫で、その我慢を取り除いて差し上げることが基本です。



Tel.03-5329-1060
世田谷区松原2-42-14　美鈴ビル201

セントケア世田谷
〈訪問介護〉〈介護予防〉〈訪問入浴サービス〉

お客さまが一番お客さまらしくいられるご自宅に訪問し、ご家族を含めたお客さまの生活全体を支えています。



Tel.03-5430-2943
世田谷区三軒茶屋2-14-8
ファッションビル第2 2F



アルタクラッセ二子玉川
〈介護付き有料老人ホーム〉

無垢の木の素材感を大切にした落ち着きのある施設にて、お客様一人一人の生活リズムを大切にし、めいめいが心にゆとりを持って生きていくための住まいをご提供いたします。



Tel.03-5797-5144
世田谷区玉川3-40-21

セントケア等々力
〈居宅介護支援〉〈訪問介護〉〈介護予防〉

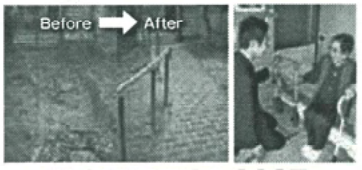
お客さまに介護保険を適正かつ上手にご利用いただくため、専門的な知識を用いて、あらゆるご相談に対応いたします。



Tel.03-3701-2946

セントケアリフォーム等々力
〈住宅改修〉〈福祉用具〉

お客さまの自立と予防に繋がる効果を期待して行われます。住まいに自分を合わせながら生活している人に、ちょっとした工夫で、その我慢を取り除いて差し上げることが基本です。



Tel.03-3701-2027
世田谷区等々力3-6-9
サニーテラス等々力202

セントケア東京株式会社

Saint-Care

Tel.03-5980-2488　Fax.03-3918-8900
〒170-0004 東京都豊島区北大塚3-32-4 OBCビル3F
http://saintcare-tokyo.com/

スタッフ募集!

セントケア東京は各サービスにて
仲間を募集しています。
詳しくは、ホームページをご覧下さい。

住み慣れた世田谷で
あなたらしく暮らせるように

区内7か所の多彩なデイ・ホーム

1 お一人おひとりに合わせた機能訓練

松原、世田谷は機能訓練指導員を中心に、
あなたに最適な個別機能訓練を実施しています。

2 失語症コースで充実した訓練

世田谷、大原では言語聴覚士、会話パートナーを中心に
グループ訓練を実施しています。



3 きめ細やかな認知症対応型コース

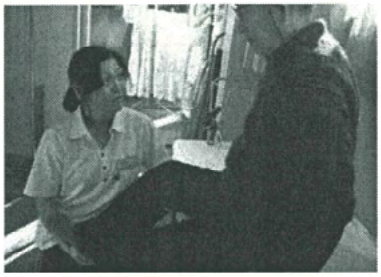
弦巻、芦花、上北沢の認知症コースでは安心して過ごして
いただけるよう、きめ細やかな対応をしています。

4 区内デイ唯一の若年性認知症専門コース

太子堂では高齢者の方とは別に、毎週土曜に若年性認知症
コースを実施しています。

5 介護者のご都合に合わせ、夜21時まで営業

上北沢では夜21時まで延長利用できます。
もちろん、夕方17時からのご利用も可能です。
温かな夕食をお召し上がりいただき、送迎もいたします。


暮らしに役立つトレーニングを実施


あなたの好奇心をサポートします

ご見学やご質問はお気軽にお問い合わせください ※土曜・祝日も営業しています

世田谷	デイ・ホーム世田谷：世田谷区世田谷4-15-3	TEL 03-3439-3358	
太子堂	デイ・ホーム太子堂：世田谷区太子堂5-24-20	TEL 03-5486-8254	※入浴設備あり
大原	デイ・ホーム大　原：世田谷区大原1-23-13	TEL 03-3460-8019	
弦巻	デイ・ホーム弦　巻：世田谷区弦巻5-13-19	TEL 03-5450-2003	※入浴設備あり
松原	デイ・ホーム松　原：世田谷区松原5-17-6	TEL 03-3323-2081	
芦花	デイ・ホーム芦　花：世田谷区粕谷2-23-1	TEL 03-5317-1091	※入浴設備あり
上北沢	デイ・ホーム上北沢：世田谷区上北沢1-28-17	TEL 03-3306-5166	※入浴設備あり

事業団は7つのサービスを
区内全26事業所で展開



ホームヘルプ	訪問看護	特養ホーム	ショートステイ
居宅介護支援	地域包括支援センター	デイ・ホーム	

人をつなぎ 地域をつなぐ 共に笑顔のパートナー

社会福祉法人
世田谷区社会福祉事業団

世田谷区社会福祉事業団　検索

http://www.setagayaj.or.jp/

【本部事務局】〒154-0017 東京都世田谷区世田谷1-23-2 TEL 03-5450-8223



採用情報

区内全26事業所 「世田谷で、はたらく。」
一緒に働く職員を募集しています。

世田谷区社会福祉事業団では随時、募集を行っています。
介護職員や看護職員など、あなたの専門性を活かしてみませんか。
詳細はホームページをご覧ください。

お電話でもどうぞ … 採用担当
03-5450-8223



For You

SOCIAL DREAM WELFARE CORPORATION

社会福祉法人 奉優会

優っくり村 YUKKURI MURA

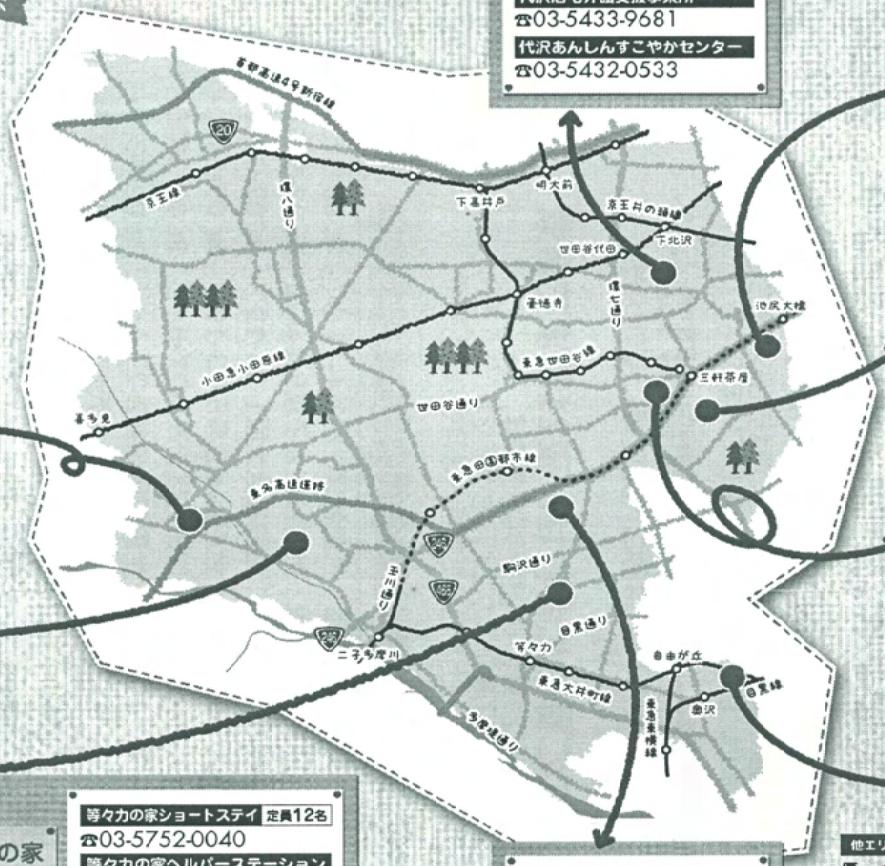
私たち奉優会は、地域に暮らす高齢者一人ひとりの、その方らしい暮らしを大切にします

ご相談やご見学などお気軽にお問合せ下さい ☎03-5712-3770 〒154-0012 東京都世田谷区駒沢2-11-3 8F
http://www.foryou.or.jp 奉優会 検索

緑に黄色の線がFor Youの目印 ドアツードアが基本



奉優会の優しい職員が心をこめて、対応させていただきます。



世田谷区代沢5-3-20 中川ビル102号室
代沢居宅介護支援事業所
☎03-5433-9681
代沢あんしんすこやかセンター
☎03-5432-0533

優っくり村 池尻

世田谷区池尻2-3-45

奉優デイサービス池尻
☎03-5779-9131

小規模多機能型居宅介護 定員24名
☎03-5779-9134
グループホーム 定員18名
☎03-5779-9133



奉優デイサービス 野沢（デイホーム野沢）

世田谷区野沢1-35-8
アクティ三軒茶屋8棟1階
☎03-5431-6865



優っくり村 三軒茶屋

世田谷区三軒茶屋2-32-14
（丸山区民集会所）
小規模多機能型居宅介護 定員25名
☎03-6453-2451



デイホーム奥沢

世田谷区奥沢2-23-1

奉優デイサービス 奥沢
☎03-5726-3011



奥沢居宅介護支援事業所 ☎03-5726-3515
奥沢あんしんすこやかセンター ☎03-5726-3511

優っくり村 喜多見

世田谷区喜多見3-10-15

小規模多機能型居宅介護 定員25名
☎03-5727-0642
グループホーム 定員18名
☎03-5727-0641
認知症対応型通所介護
☎03-5727-0643



医療法人社団 多聞会
訪問看護ステーション こあら喜多見
☎03-5727-8478

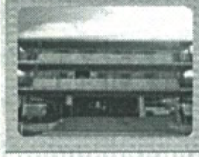
優っくり村 鎌田

世田谷区鎌田3-31-19
グループホーム 定員27名
☎03-5491-5897



等々力の家

世田谷区等々力8-26-16



奉優デイサービス等々力の家
☎03-5752-0037
特別養護老人ホーム等々力の家
☎03-5752-0030

等々力の家ショートステイ 定員12名
☎03-5752-0040
等々力の家ヘルパーステーション
☎03-5752-0039
等々力の家居宅介護支援事業所
☎03-5752-0035

世田谷区駒沢4-33-12
深沢まちづくりセンター内
深沢あんしんすこやかセンター
☎03-5779-6670

他エリアにも事業所があります

優っくり村石神井台沼辺
練馬区石神井台2-7-5
小規模多機能型居宅介護
☎03-5923-7117
グループホーム
☎03-5923-7100

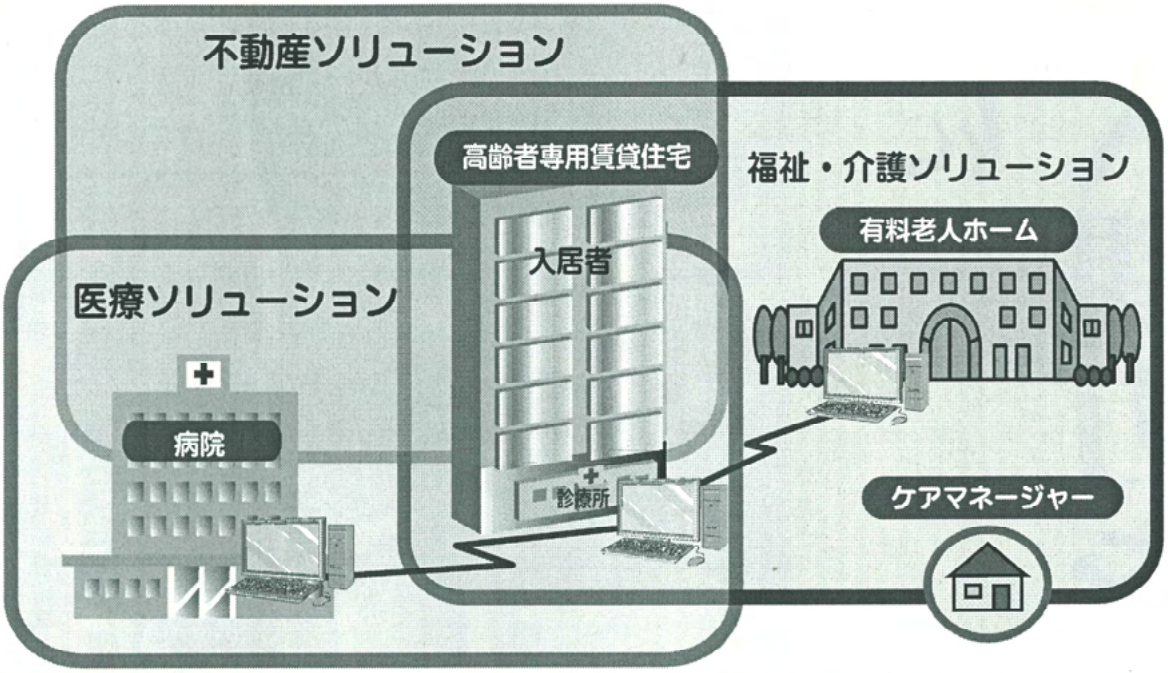


かわいの家
横浜市旭区川井宿町69-1
特別養護老人ホーム
☎045-954-4500
ショートステイ
☎045-954-4520



都築電気の取り組み

介護・医療・不動産
ワンストップサービス構築へ



医療ソリューション

●病院向け
・電子カルテ及びオーダリングシステム

●無床診療所向け
・電子カルテシステム

●各種部門システム
・診療予約システム
・再来受付システム
・自動精算システム
・待順表示システム
・病診連携システム

●福祉・介護との利用者情報連携

不動産ソリューション

●KitFit 不動産
（業務テンプレートKitFit ReEsSo）
・仕入管理、分譲管理等・
売買仲介管理、賃貸仲介管理、
顧客反響管理等

・オーナー管理、一般賃貸管理、
高優賃／特優賃対応，店舗対応、
マンスリー対応等

・建物点検工事管理、物件設備管理、
リフォーム、保守／修繕管理等
・プロジェクト予算管理、入出金管理、
会計連携等

●図面管理、地図連携、
マーケティング等

福祉・介護ソリューション

●介護事業者向け統合管理システム
（シルバーランド）
・有料老人ホーム、
高齢者専用賃貸住宅システム
・ケアプランシステム、訪問介護システム、
短期入所システム、通所システム、
小規模多機能システム等

●電子カルテ及び医事会計連携システム、
入居者家族向け情報公開システム

●緊急通報システム、栄養管理システム、
栄養ケアマネージメントシステム、
勤務割システム等

ツヅキデンキ
都築電気株式会社
http://www.tsuzuki.co.jp/

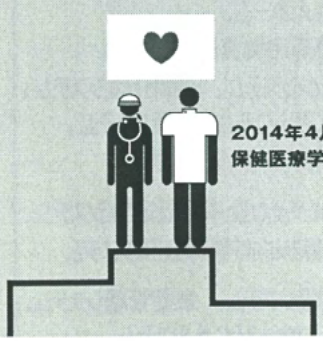
神奈川支店
〒220-0011 横浜市西区高島１丁目１番地２号
横浜三井ビルディング
TEL (045) 201-3611　FAX (045) 201-6273
E-mail : webinfo@tsuzuki.co.jp

若き力に、真の人間力を。



チャンスの像
日体大スピリットである「ポイントゲッターであるよりもチャンスメーカーになれ！」という思いが込められています。

目指すは、No.1スペシャリスト。



スポーツの専門性を備えた、医療の担い手となる。

保健医療学部 2014年4月スタート

整復医療学科	救急医療学科
柔道整復師国家試験受験資格	救急救命士国家試験受験資格

日本体育大学

★体育学部；体育学科・健康学科・武道学科・社会体育学科
★児童スポーツ教育学部；児童スポーツ教育学科　★保健医療学部；整復医療学科・救急医療学科

東京・世田谷キャンパス　〒158-8508 東京都世田谷区深沢 7-1-1　Tel 03-5706-0900（代）
横浜・健志台キャンパス　〒227-0033 神奈川県横浜市青葉区鴨志田町 1221-1　Tel 045-963-7900（代）

安心と安全のコンサルタント
保険のことなら何でもご相談ください

(財)東京都人材支援事業団指定代理店

特別区職員互助組合指定代理店

◆火災保険
◆自動車保険
◆旅行保険
◆自治会保険
◆イベント保険
◆その他各種損害保険

三井住友海上火災保険(株)代理店
日本損害保険協会認定　特級(一般)資格

あらかわ総合保険

〒157-0067　東京都世田谷区喜多見 6-14-7
TEL:03-3415-8513　FAX:03-3415-8516
E-mail:kazusige@msh.biglobe.ne.jp

安全と安心



～保守協会の公益的事業のご紹介～

●消防機関への通報システム

お年寄りやお身体の不自由な方のお住まいにおいて火災が発生した時に、東京消防庁へ自動的に通報する『火災安全システム』の設置・点検を行っています。また、平成２６年度から急病の時にペンダントボタンの操作により東京消防庁へ通報する『緊急通報システム』の設置・点検も開始します。
お申し込みについては、東京都内の各区市町村の高齢者又は障害者の担当窓口へお問い合わせください。

●消防設備のトラブル対応

消防設備が作動した時などの緊急対応を２４時間体制で行っています。

短縮ダイヤル
#7112
つながらない場合は　03(5962)2929

●防災訓練サポート(東京消防庁後援)

『訓練は本番のように、本番は訓練のように』

法律に基づく講習会運営で培った技術により、ご依頼のあった建物（主に大規模）の実態に応じた訓練を企画し、インストラクターを派遣して自衛消防隊の指揮者育成のサポートをします。
お気軽にご相談ください。

保守協会はおかげさまで　50th Anniversary

一般社団法人 東京防災設備保守協会
Tokyo DSEM Association
設立　昭和39年3月26日
〒162-0805　東京都新宿区矢来町８１番地の３
http://www.hosyu-kyokai.or.jp

	TEL	FAX
保守営業部	03-5261-4170	03-5261-4165

AIDEM

人に、企業に、地域に密着。

さまざまなかたちで、地域密着型の人材サービスを提供する私たち。
これからも人と企業のすぐそばで、採用活動を応援していきます。



［毎週日曜日発行］
新聞折込求人紙
しごと情報アイデム



※「医療・介護・福祉求人特集号」は不定期発行

［毎日更新］
総合求人サイト
イーアイデム



※「医療・介護・福祉・保育」専門サイト

イーアイデム Search

［毎週月曜日発行］
求人フリーペーパー
ジョブアイデム

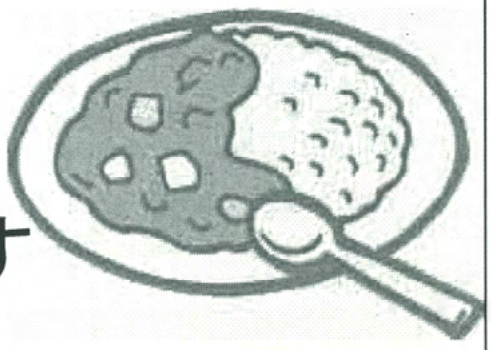




株式会社アイデム 事業概要 求人広告の企画・発行 教育企画 労働市場調査
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-4-10 アイデム本社ビル TEL:03-5269-8622 http://www.aidem.co.jp/

銀座スエヒロ

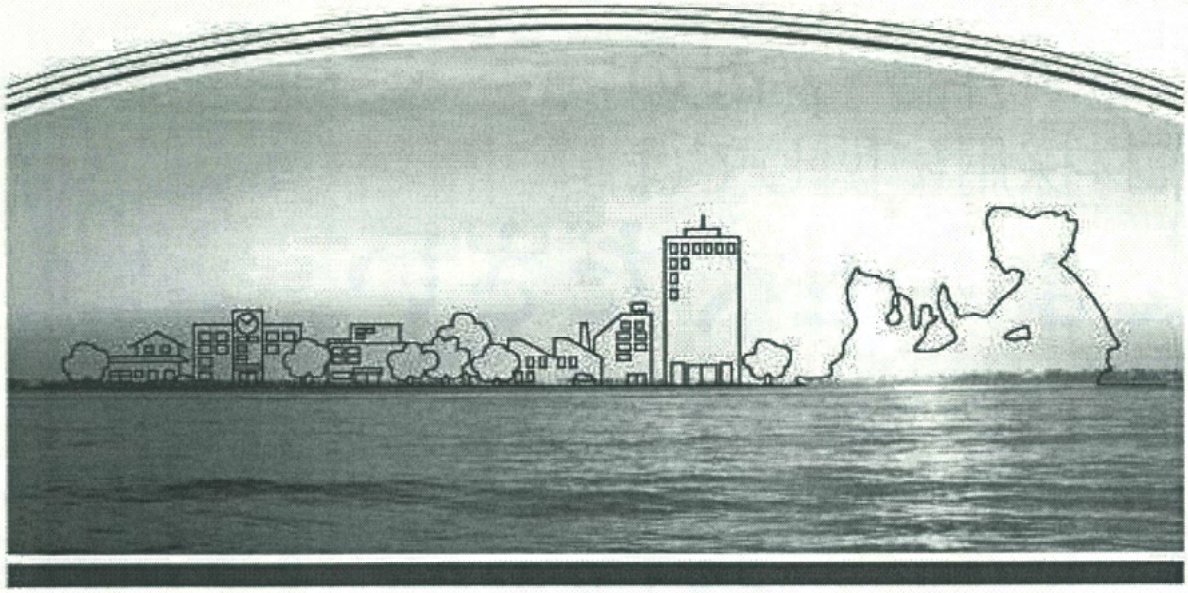
安心安全なお食事を
心を込めて
つくっております



スタッフ一同お待ちしております

GINZA SUEHIRO
Since 1956

銀座スエヒロカフェテリアサービス㈱
TEL 03-3544 - 4888



人の住む家、やすらぎの街。未来の夢を実現する空間を創ります。

東光建設株式会社

〒156－0052　東京都世田谷区経堂5－23－15
TEL：03－3706－7111　FAX：03－3706－7119
URL:http://www.toko-const.co.jp

印刷をお考えの半径5㎞のお客様へ

確実な
データ
編集・変換

フェイスto
フェイスの
営業

納得の
デザイン

創業52年の
ノウハウ

創造する喜び
有限会社みやざき印刷

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山5-33-2
TEL(03)5384-1331・FAX(03)3305-2528
URL: http://www.miyazaki-p.co.jp/
E-mail : info@miyazaki-p.co.jp

医療・介護・福祉の
人材採用に関しては
おまかせください。



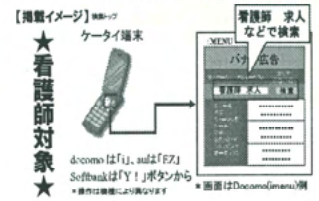
1都1府4県に地域密着媒体を展開。幅広い読者層のご家庭に「毎週日曜日」お届けします。

yumex
ユメックス since 1979

★初回キャンペーン実施中！

初回又は1年以上ご利用のないお客様は
1週分の料金で翌週又はもう1地区無料です

Yahoo!Google リスティング広告を実施！



Yahoo! や Google の検索エンジンから「看護師 求人」等キーワードを入力したユーザーにのみ検索結果一覧へ広告を表示。求職活動に積極的な看護師を誘導します。

携帯のリスティング広告では毎回、安定した誘導数を維持！
2012年8～2013年1月はめべ 16,600人 誘導!!（Yahoo!、Google のモバイル対象）

ご掲載のお申込み・お問い合せは、こちらまでお気軽にどうぞ

ユメックス株式会社
三鷹市下連雀3-35-1 ネオシティ三鷹12F

☎0422-40-9070

地元の印刷屋だから出来る事…

1枚のPOP、効果的なチラシ、DM、
カタログ、営業案内、自費出版、名簿…
印刷の事なら何でもご相談ください。
原稿作りから納入まで
誠実に、迅速に…ご注文に応じます。

株式会社 アライ印刷
〒156-0042 世田谷区羽根木1-12-7
Tel.03-5376-9123 Fax.5376-8854

介護職員初任者研修講座
受講生募集!!
受講料 都内最安値!!※
※詳しくはお問い合わせください。



通信・通学コース
（土日コースもあります）

●研修期間：1ヶ月～2ヶ月
●募集人数：定員数24人
●受講場所：さくらケア福祉カレッジ駒沢

申込（受講料お振り込み） → 開講式 → 平日・土日スクーリング（通信は自宅学習併用） → 就業への備え＆振り返り → 筆記試験 → 修了式

さくらケアの学べるポイント！

1 まかせて安心なヘルパースクール
おかげさまで、創業9年目。訪問介護事業や居宅介護事業、福祉用具貸与事業等、長きにわたり様々な介護事業サービスを行ってきたさくらケアが運営するヘルパースクールだからこそ、安心して受講頂けます。

2 現場経験豊富な講師が指導
現場最前線の声が聞けるため、実技だけではわからない、リアリティある意見を聞くことができます。予期せぬ事態がおこりやすい介護では、とてもためになります。

3 無理のない短期集中コース
ご自身のライフスタイルに合わせて2ヶ月弱で資格が取得できます！同じ目標をもった仲間と学べる、充実した中身のコースです。

説明会を開催します!! 予約制
毎週 火曜日 14:00～
毎週 金曜日 16:00～
予約制となりますのでまずはお気軽にお問合せ下さい！

さくらケア福祉カレッジ駒沢
訪問介護事業所（担当／荒井）
世田谷区駒沢4-23-18駒沢エイトビル7F（東急田園都市線「駒沢大学」駅徒歩7分）
受付/9:00～18:00（平日のみ）
☎03-6805-3963



株式会社さくらケア

パイ焼き窯

障害（主に精神等）のある人が、働くことによって経済的自立を目指し、障害と付き合う方法を知り健康と自信を回復し、就職やあたりまえの暮らしを目指すことをサポートします。障害を持ちながら社会で自立生活を営むためには、周りの人々とつながり・語り合い、自分の持っている能力や感性を発見し・育て、自分に合う仕事に就いて収入を得ることです。そして「これが私らしい生き方」の自覚と自信と誇りを持つことを焼き菓子製造・調理・清掃等の仕事を通じて学習する場所です。１９９４年のスタート以来「働く喜び、食べる楽しさ・仲間作り等」生活の原点も大切に運営してきています。

学校法人大東学園　**世田谷福祉専門学校**（区内で唯一の福祉専門学校）

～「人とともに歩む」介護と手話のプロを養成します ～

手話通訳学科 実習成果報告会　２月17日（月）
介護福祉学科 卒業研究発表会　２月19日（水）
両日ともに　9:30～15:30（入退場自由）
国立オリンピック記念青少年総合センター
（小田急線参宮橋駅・千代田線代々木公園駅下車）

今年度最終回のオープンキャンパス・入試　３月７日（金）
（世田谷区船橋 7-19-17 ☎03-3483-4106 京王八幡山駅・小田急千歳船橋駅下車）

そとでる
誰もが自由に外出できる世田谷にするために
世田谷区福祉移動支援センター

杖、車いす、ストレッチャーで乗車できる車両を手数料無料で手配します。加盟事業者６０超、登録車両１２０台以上の「そとでる」をご利用ください。急なご用命も承ります！

※ 原則として世田谷区民が対象ですが、移動に関するご相談は、区外の方でもお受けいたします

＜電話受付＞
祝祭日を除く月～金　9:00～17:30

TEL ： 03-5316-6621
FAX ： 03-3329-8311
http://www.setagaya-ido.or.jp/htdocs/

「そとでる」は世田谷区から補助金交付を受け
NPO 法人せたがや移動ケアが運営しています

ビルメンテナンス
株式会社 アクセルオン
〒157-0064
東京都世田谷区給田五丁目20番12号
TEL 03-3326-1618　FAX 03-3326-1619
E-mail：info@accelon.co.jp

〈営業内容〉
・清掃管理業務　・公園緑地・植栽管理業務
・設備管理業務　・プール管理業務
・衛生管理業務　・内外装工事全般
・警備・受付業務　・塗装工事全般

ISO 9001 www.intteert.com　ISO 14001 www.intteert.com　ISO 27001 www.intteert.com　OHSAS 18001 www.intteert.com

丹精こめて作ります
BONHEUR（ボヌール）
クッキー・パウンドケーキ
HANDFUL（はんどふる）
手すき紙製品

社会福祉法人武蔵野会
世田谷区立世田谷福祉作業所
〒154-0002
世田谷区下馬2－31－34－101
TEL:03－3414－0141
FAX:03－3412－1084

3
2
1
Fuji Elevator
富士エレベーター工業株式会社
★各種エレベーター
乗用・寝台用・人荷用・荷物用・自動車用
★小荷物専用昇降機
テーブルタイプ・フロアータイプ各種
新設・リニューアル・保守
本　　社：東京都千代田区内神田3−4−6　TEL：03−3252−8961㈹　FAX：03−3252−8900
札幌営業所：札幌市中央区大通西14−1　TEL：011−221−1331㈹　FAX：011−221−5255
足柄営業所：神奈川県南足柄市狩野58−4　TEL・FAX：0465−73−1609
サービスステーション：新宿・城南・城東・埼玉

office supporter MARUKAWA
事務用品・OA機器・内装工事・サイン工事
ノベルティ&ギフト・イベントグッズ
有限会社 マルカワ
〒158-0092 東京都世田谷区野毛 2-26-11
TEL：03-3701-1723 FAX：03-3704-2245
http://marukawa.biz E-mail:info@marukawa.biz
マルカワは皆様の「オフィスサポーター」として
お役にたてるよう、日々努力しております。

Quick Action & Follow
最新のIP−PBX、ビジネスホン、ナースコールシステム、CTIシステム、防犯監視カメラシステムなど各種IPコミュニケーションシステムやモバイルコミュニケーションシステムなどのコンサルテーション・システム設計から施工・運用・保守までをトータルにサポートします。
沖電気工業株式会社特約店
三峰電気株式会社
〒108−0014　東京都港区芝5−10−14　03−3453−7271
http://www.mitsuminedenki.co.jp

せたがや福祉区民学会のご案内

せたがや福祉区民学会では随時会員を募集しています。
会員として学会の発展をご支援いただける方は申込み用紙をFAXまたは郵送でお送りください。申込み用紙は直接事務局へご持参いただくか、下記ホームページからダウンロードしてください。

<せたがや福祉区民学会事務局>
世田谷区福祉人材育成・研修センター
〒156-0066　世田谷区成城6-3-10　成城6丁目事務所棟1階
TEL / 5429-3100　FAX / 5429-3101
URL　https://www.setagaya-jinzai.jp/

年会費　個人会員　1，000円
学生会員　500円
団体会員　1口＝3，000円以上



せたがや福祉区民学会　実践研究発表会報告集

発行　　せたがや福祉区民学会
発行日　平成２６年６月

＜事務局＞　社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
世田谷区福祉人材育成・研修センター
〒１５７－００６６　世田谷区成城６－３－１０
電話：５４２９－３１００
ＦＡＸ：５４２９－３１０１
Ｅメール：fukushijinzai@setagayaj.or.jp
ホームページ：https://www.setagaya-jinzai.jp/